八代将軍吉宗

堀和久

文春文庫

著者紹介

堀　和久(ほり・かずひさ)

昭和6(1931)年、福岡県に生れる。日本大学芸術学部映画学科を中退のあと、芸能プロダクションの企画部、浅草フランス座・ロック座の宣伝部、シナリオライターまた映像ディレクターなどを経て執筆生活に入る。昭和52(1977)年、「享保貢象始末」で第51回オール讀物新人賞を受賞する。綿密な時代考証をふまえたユーモアあふれる歴史読み物、時代小説には定評がある。著書に「軍師の時代」「大久保長安」「春日局」「無空幻」「立身出世」「織田有楽斎」「中岡慎太郎」「江戸風流医学ばなし」「死にとうない」などがある。

文春文庫

八代将軍 吉宗

堀 和久



文藝春秋

目次

第一章　将軍宣下（せんげ）　7
第二章　外柔内剛　41
第三章　大岡越前守　85
第四章　財政再建と大巻狩　131
第五章　米将軍　178
第六章　回想　213

参考文献　226
年表「吉宗とその時代」　228

初出　「別冊文藝春秋」第二一〇号（一九九四年冬）
但し、第六章は書下ろし。

八代将軍　吉宗

第一章　将軍宣下

一

江戸城本丸大広間は、表御殿大玄関の西側に威容を誇る、儀式用の座敷群であった。二十八畳ある上段之間につづき、中段之間、下段之間、二之間、三之間、四之間、溜之間、入側などから成り、仕切りをはずせば総数四百畳の大広間となる。

上段之間の、松竹梅に鶴亀を配した気品ある障壁画をはじめ、大広間全体に狩野派の華麗な筆致で、松と鶴を主題にした四季の移り変わりが描かれていた。

俗に千畳敷と称される、この大広間には、朝廷での正装である束帯に威儀を正した、勅使、上皇使、女院使、親藩の諸大名、老中、高家らが居流れている。

袍（上着）の色は、四位以上が黒、五位以下が浅緋で、優美にして重厚な彩が式典の雰囲気を高めていた。

享保元年（一七一六）、八月十三日、巳の刻（午前十時）すぎである。

正二位大納言の位階官職をうけたばかりの徳川吉宗は、黒い袍の束帯に身を固めて、上段之間に着座していた。

今しも、徳大寺右大将、庭田前大納言両勅使が上段之間へ進み出て、

「将軍宣下の宣旨、進ぜらる」

と、厳かに挨拶があり、中段之間の左の座へ戻ったところである。

突然、南庭より縁側に近づいた告使、山科出雲守が、はるか上段之間へ向かって、甲高い、よく透る声で、

「御前、御昇進、御昇進」

と叫び、引き退った。

入れ替わりに、副使の青木縫殿助が、宣旨を入れた覧箱を捧げて、静静と現われる。覧箱は、高家の中条対馬守が受け取り、上段之間へ膝行、蓋をとって六通ある宣旨のうち、最初の一通を吉宗に奉る。

吉宗は、うやうやしく宣旨を戴き、黙読した。

従二位権大納言源朝臣吉宗

右以件人宣令補任征夷大将軍

享保元年八月拾参日

以前の官職が記されてあるが、宗家を継いでおよそ三ヵ月半、将軍に就任したという実感が、ようやく、吉宗の胸にわく。

八代将軍徳川吉宗の誕生である。

式典はつづいていた。

右近衛大将、右馬寮御監、淳和・奨学両院別当、源氏長者を兼ね補される等、五通

の宣旨を披見しおわると、賜物の拝受と献上物の贈答の儀がとりおこなわれる。

（夢をみているようじゃ）

上段之間に端座する、やや上気した吉宗の脳裏に、十一年前の、思いがけない栄達がよみがえる。

その時も、夢ではないか、と、おのれの境遇の激変が信じられない思いであった。

吉宗は、貞享元年（一六八四）十月二十一日、紀州藩五十五万五千石の第二代藩主徳川光貞の第四男子として、紀州和歌山城下で生まれた。

生母は、おゆり（於由利）の方と称され、今も達者である。

家臣巨勢六左衛門の娘、とされているが、その実、父母の名もさだかではない、紀州に流れついた巡礼娘だった。

農民六左衛門に拾われ、養われていたが、大女の力持ちを買われて、和歌山城の奥御殿に雇われ、雑用にたずさわっていた。ある日、たまたま、湯殿の掛に当たり、藩主光貞のお手がついたのである。

五十八歳の光貞には、すでに三男一女があったが、次男を夭逝させており、他の子たちも、ひ弱な感を否めない。それで、容貌はともかく、いかにも頑丈なからだをもつ、おゆりに目がとまり、子を産ましめようと思ったのだという。

おゆりが側室の一人に加えられたことから、養父六左衛門は巨勢の姓を賜わり、家臣に登用されたのである。

吉宗の幼名は源六。十一歳になると新之助と改名。十二歳で従五位・主税頭に任じられた。

翌年の元禄九年（一六九六）十三歳で元服、頼方と名乗り、従四位下・左近衛権少将に昇進。若年にしてこの官位は、紀州徳川家が御三家の名門であるからにほかならない。

元禄十年（一六九七）四月、将軍綱吉より越前国（福井県）丹生郡に三万石の所領を与えられ、十四歳にして大名となった。

これも、家柄がもたらす、慣例による処遇であり、格別のことではない。

領主であるが、頼方（吉宗）は、主として江戸の藩邸に住まい、越前の所領へ一度も行かず、家臣に統治させていた。

本来なら、このまま、御三家の庶子相応の三万石の大名として、平凡な一生をおえるはずであった。ところが、宝永二年（一七〇五）、二十二歳のときに、最初の境遇の激変がおこったのである。

当時、紀州藩主は、七年前に封を継いだ光貞の嫡男綱教であった。その第三代藩主綱教が、五月十四日に四十一歳にして病死したのである。綱教に子がなく、第四代藩主には弟の頼職が、兄綱教の養子となって就任した。

頼職は二十六歳。八十歳になっていたが、第二代藩主であった父光貞が後見する形である。

だが、光貞が八月八日に老衰で他界。その葬儀の線香も消えぬ一ヵ月後の九月八日、もともと虚弱であった頼職が、藩主就任の緊張と心労のためか急死してしまった。

頼職にも子がない。末弟であった頼方が急遽、次兄頼職の養子に直され、第五代藩主となったのである。

紀州五十五万五千石を継ぐにあたり、従三位・左中将の叙任をうけ、将軍綱吉から吉の一字を賜わり、頼方を吉宗と名を改めた。

捨扶持に近い三万石の支藩領主から、御三家紀州藩の当主になったのである。

夢ではないか、と、吉宗は運命の急転が信じられない思いであった。

二

吉宗が紀州藩主になって十一年を数える今年（正徳六年・六月二十二日に改元、享保元年）の四月半ばであった。

およそ四ヵ月前であるが、にわかに身辺があわただしくなったのである。

「上様の御不快（病気）、軽からずの由。お心構えを」

低い声で言上したのは、江戸藩邸の用人、有馬氏倫であった。

奥座敷には余人はいない。

氏倫は、当年三十三歳の吉宗より十六歳年上の、英知、気力ともに充実した四十九歳。

吉宗を傅育した一人であり、剛毅果敢の質である。

上様というのは、第七代将軍徳川家継である。四歳で亡父家宣の後を継ぎ、五歳にして将軍宣下をうけた家継は、未だ八歳である。八歳の将軍に子があろうはずがない。

お心構えを、と氏倫がささやいたのは、将軍の座を狙うべし、という進言にほかならなかった。

吉宗は、強健であった父光貞に加え、大女で力持ちの母の血を引いて、当世、まれに見る巨軀であった。目、鼻、口、耳などの造作は、いずれも大きく、浅黒い、あばたが目立つ容貌である。

その魁偉な吉宗の面が、かすかに朱を帯び、右目の下が、しばし、ひきつった。この、けいれんは、極度に緊張したときに吉宗の顔面にあらわれる特徴である。

「無理ではないか。万が一の場合の後継ぎであれば、尾張か水戸」

吉宗の声も低い。

「御謙譲は、時と場合によりまするぞ」

幼い時代の吉宗を厳しく鍛えた氏倫の、傅役当時をよみがえらせる叱りであった。

「吉通どの亡きあと、殿のほかに、上様となられるお方はございませぬ。お気を強くもたれ、天下を掌中になされませ。それが、徳川宗家のため、延いては、天下万民のため、でございまする」

「とは言え、こればかりは、当方の一存ではいかぬ」

からだが大きく、力も並みの男の数倍を有する吉宗であるが、体軀とともに、力持ちでありながら温和であった母親の性質も継いだのであろう、本性、気はやさしい。喜怒哀楽の情を、めったに表に出すことはなく、物の言いようもおだやかであった。見方によっては、優柔不断に映らなくはない。

「天が与えたもうた、千載一遇。手は充分に打っておりまする」
氏倫の眼光が鋭い。
「手を……。それは、どういうことであるか」
吉宗の語調が、やや乱れている。
「殿は、与り知らぬ、それでよろしゅうございまする」
軽く受け流した氏倫は、ふたたび、眼光を強めた。
「上様の御不快が、憂慮すべき事態に至りますれば、まず、御後見職の慫慂がありましょう。御辞退は、形だけになされ、必ずや、将軍位にお昇りあそばされまするよう」
氏倫の秀でた額の左から眉間にかけて、二寸（約六センチ）ほどの刀傷が残っている。
貞享三年（一六八六）から元禄五年（一六九二）にかけて、藩支配地の高野山で騒動があり、元禄五年、当時二十五歳であった氏倫は一隊を指揮して鎮圧にあたった。その折りに受けた、向こう傷であった。
その、威圧を与えずにはおかない、武士の誉れともいうべき刀傷が赤く染まっているのは、氏倫の気持の高まりをあらわしている。
吉宗とても、将軍位を伴う宗家継承に、無関心であるわけではない。だが、
（見込みは、薄い）
という判断を拭いきれないでいた。
御三家は、徳川宗家に嗣子がない場合、適する男子を迎えるよう、初代家康がたてておいた家康の血を引く家である。

徳川家康は十一男五女をもうけた。

男子に限れば――

長男信康は、盟友織田信長の猜疑をうけ、自刃させなければならなかった。

次男秀康は、人質同様に、豊臣秀吉の養子として送り出した。のちに、越前福井六十七万石の家門をたてさせたが、父家康に先んじて死去。

宗家を継いで第二代将軍となったのは、三男秀忠である。

四男忠吉は二十七歳で病死。

五男信吉も二十一歳で早世。

六男忠輝は二十四歳のときに、家康から勘当（のち配流）される。

七男松千代、八男仙千代は、ともに夭逝。

結局、家康の晩年に生き残っていた男子は、将軍秀忠と勘当の忠輝のほかは、九男義直、十男頼宣、十一男頼房の三人になっていた。

家康は九男義直に尾張城を与え、六十一万九千五百石所領の尾張家を創設。十男頼宣には駿河・遠江・東三河五十万石を割譲したが、秀忠は紀州五十五万五千石へ移し、紀州家とした。十一男頼房は水戸二十五万石（のち、三十五万石）に配され、水戸家の初代となる。

これが御三家の成り立ちであった。

吉宗が、宗家相続の資格を有する御三家の一家でありながら、見込みは薄い、と判断

したのには、当然、理由がある。

御三家のうち、筆頭の尾張家に次ぐ第二位の家柄であることも大きいが、四年前の、今や公然の秘密となっている、江戸城の漏れ話を耳にしていたからであった。

正徳二年（一七一二）の九月二十七日、六代将軍家宣は、病床に、一千石を給する一学者にすぎないが、事実上の補佐役として信頼している新井白石をよび、後嗣について意見を求めたという。

叔父にあたる五代将軍綱吉の後を継いだとき、家宣はすでに四十八歳。在位わずか三年で重病の床に臥したのである。

男子は五人生まれたが、四人までが一歳または三歳で死に、四男の鍋松（家継）が残っていた。とはいえ、四歳である。

家宣は五十一歳。苦しい息づかいながら、死期を覚っている冷静なまなざしを白石へ向け、

「天下の事は、私情をもって取り計らうべきではない」

と、語りはじめたと吉宗は仄聞していた。

「わが子は、あまりにも幼少。古来、幼主の時、世の中が無事であった例は多くないであろう。神祖（家康）が三家をたてておかれたは、かかる場合のためであるゆえ、尾張（吉通）どのに後を譲り、わが子が幸いに成人したのちも、尾張どのの一存にまかすべきであろうか。それとも、幼少ながら、わが子に継がしめ、尾張どのに摂政してもらい、万が一の時は将軍家を継ぐ、という事にすべきであろうか」

この問いに、白石は、

「仰せられるような事になりますれば、天下の人は二つの党派にわかれて、ついには世の乱れる元となりましょう。三家をはじめ、一門、譜代相伝の家臣がおりまする徳川家は盤石でございまする。若君が世を継がれるのに何の御心配もいりませぬ。万が一、若君に御不幸の事がありました場合には、その時こそ、神祖が三家をたてておかれた意義があるのでございまする」

と、若君鍋松を推したという。

その日から半月余り後の、十月十四日に、家宣はこの世を去った。

七代将軍は、四歳の、鍋松改め家継に決まり、翌正徳三年の四月二日に将軍宣下をうけたのである。

そして今、八歳になっている上様の病状は重く、万が一の事が間近の様相であった。

本来ならば、後継は、文昭院（家宣）の御遺志を重んじ、御三家筆頭で英明の聞こえが高い尾張家の徳川吉通が動かぬところである。

ところが、その吉通は、家継が正式に将軍に就任した同じ正徳三年の七月二十六日に急死していた。二十五歳の若さである。しかも、後を継いだ三歳の嫡男五郎太も十月に死去、尾張家は吉通の弟の継友が藩主になっていた。

不幸はつづいたが、継友とて御三家筆頭の当主であり、年齢も二十五歳。将軍継嗣の最有力候補であることに変わりはない。

今一人の有力候補は、御三家第三位の家柄であるが、生母の出自が群を抜く水戸家の

綱条であった。

武家では、正室と側室の腹に嫡庶の別があり、さらに生母の家柄でも優劣をつけがちである。

吉宗の弱味は、生母が卑賤の出で、湯殿でのお手つき女であることであった。

一方、水戸綱条の生母は、家康の御落胤という噂もある、三代将軍家光時代の大老土井利勝の、その姫である。

第二代光圀の後を継いだ第三代当主綱条の年齢は六十一歳。幼君家継によって弛緩をきたした幕政を引きしめるには、重厚なる綱条が最適という世評が強いことを、吉宗は知っていた。

それらの理由から、

（見込みは、薄い）

と推量し、万が一の場合の将軍家後継は、尾張か水戸、と考えざるをえなかったのである。

（そのほうがよい）

吉宗は胸のうちでつぶやく。

有馬氏倫が気合いをかけるところの、天下を掌中にする、すなわち、将軍位に昇る野望は、吉宗には全く無い。

（今の地位で充分）

だと心から思っている。

三万石の形ばかりの支藩から、いきなり、五十五万五千石の本藩当主に直された当時の困惑と、以後、何年もつづいた辛苦の数数がよみがえるからである。

吉宗は並みはずれた巨軀に、魁偉なる容貌を兼ね備えている。それで、気質も豪放磊落と思われがちである。家康が配した付家老をはじめ、由緒を誇る、およそ二千人の本藩家臣団の、どちらかといえば冷たいまなざしを一身に浴びながら、臆することなく、弱冠二十二歳にして悠然と藩政に当たったと見られていた。

事実は、その逆である。

吉宗が藩主に就任した当時、紀州藩は、他藩に倍する財政難におちいっていた。数十年の間に巨額の出費が重なったからである。

貞享二年（一六八五）に、長兄綱教と将軍綱吉の長女鶴姫との結婚の儀が盛大に催された。さらに、将軍の江戸藩邸訪問が二回あり、御殿の新築や饗宴に金銀が湯水のように消費された。

国元では、和歌山城下で火災がたびたびおこり、領内の紀ノ川や熊野川等の河川氾濫が毎年のようにくり返された。それらの被害額は計り知れない。

元禄五年には、有馬氏倫が向こう傷を負った高野山騒動が収まりがつかなくなり、出兵の費用は甚大であった。この前後に、蝗の大群が田畑を食い荒らしたり、天候不順もあり、大凶作がつづくのである。

一方、元禄八年と同十一年に江戸藩邸が全焼し、その再建に巨費を要した。

藩士は禄米を借り上げられ、町人は間口税を強制された。農民への苛斂誅求は激し

くなってゆく。

困窮による領内の人心は荒れに荒れていた。

出費は留まるところを知らない。

宝永元年（一七〇四）から翌年にかけて、大きな葬儀がつづいた。

宝永元年四月十一日に、将軍家から迎えた第三代藩主綱教の正室鶴姫が、疱瘡で死去。

翌宝永二年五月十四日、藩主綱教が正室の後を追うかのごとく他界。

同年八月八日、第二代藩主光貞が、気落ちが老衰を進めたのであろう、八十年の生涯をとじた。

同年九月八日、第四代藩主頼職も、心労のためか急死。

第五代藩主になった吉宗は、就任早早、一年五ヵ月の間に四回おこなわれた大葬儀の後始末が当面の責務となったのである。

思いもかけず本藩の当主となった感激よりも、藩の実状を直視するとき、茫然自失、というのが偽らざる気持であった。

できれば、藩主の座から逃げ出したかった。兄たちのように、病死したいとさえ思ったものである。

三

吉宗は、藩主に就任した翌年の宝永三年（一七〇六）、三月二十七日、京より下ってき

た伏見宮貞致親王の姫、真の宮理子の輿を、江戸赤坂邸で迎えた。

諸事準備をへて、吉宗と理子の婚儀がとりおこなわれたのは、同年十一月一日である。吉宗二十三歳、理子十六歳であった。

伏見宮は皇族であり、貞致親王は伏見宮家第十二代である。

御三家の当主でなければ実現しえない縁組である。重臣たちが、母方の出自が劣る若い新藩主に箔をつけさせようとする、懸命の奔走の成果にほかならない。

窮迫この上ない藩財政である。祝儀ゆえと、上方の豪商をはじめとする御用達商人に、多額の資金を献上させたようであった。

親王家から正室を迎えた吉宗が、ようやく自信を五体にみなぎらせ、おのれの意志を藩政に押し出したのは婚儀の翌年である。

宝永四年（一七〇七）、参勤交代で帰国した四月中旬。藩主となって、初のお国入りであった。

入府の翌朝、吉宗は、平時にはめったに聞かれない総登城の太鼓を、勇壮に打ち鳴らさせた。軟弱に堕し、窮乏から荒廃に傾いている藩士の精神を、まず、質実剛健へ戻すことから藩政を改革しようと決意した吉宗にとって、合戦を連想させる非常呼集の太鼓の響きは、欠かせぬ儀式だったのである。

前もって触れておいたので、甲冑姿で馳せ参ずる者こそいないが、上士、下士いずれも面に緊張の色をうかべて、虎伏城の異称をもつ雄大な和歌山城をめざした。

政庁となっている二の丸御殿の大広間を埋めつくす家臣団は、上段之間に出座した新

主君を仰ぎ見て、思わず驚きの嘆声をもらした。

若さみなぎる巨漢である。しかも、まるで稽古のために道場へまかり出るような粗衣をまとっていたからである。

吉宗は、すぐには着座せず、しばし、群臣へ向かって仁王立ちをつづけた。

先導してきた重臣や従う刀持ちの小姓等が子供の背丈に見えるほど、藩主の体軀が際立つ。

この所作は、吉宗が自ら案出した、家臣威圧法であった。

吉宗は、幼少年期、おのれの並みはずれて大きいからだが、内心、うとましかった。癖のある目鼻立ちにも自己嫌悪を覚えてきたものである。

二人の兄や、学問相手として付き合わされる同年輩の重臣の子らは、大方が当世風の、小柄で細っそりとした体型であり、目鼻立ちは整っていて、色白であった。

疱瘡は、流行れば貴賤にかかわらず罹病し、防ぎようがない。死亡率は高い。死をまぬがれても、病中に発疹する水疱とその後の瘡蓋のあとが、あばたとなって残る。

吉宗は、八歳のときに疱瘡にかかったが、ほどなく快癒した。このとき、四歳年上の次兄頼職も罹病し、症状は重かったのである。にもかかわらず、残ったあばたは、歳月がたつにつれて兄の顔面から薄れてゆくのに、おのれの顔面の凹凸は醜さを増してゆくように思われてならなかった。

「おれは、どうせ、鬼だいだいじゃ」

折りにふれ、幼少期の吉宗は、こうつぶやいて、いじけたものである。

だいだいは、一本の木に何代もの実が着いて落ちないことから、代代の字を当てて縁起物として欠かせない柑橘類である。だが、当世、みかんと称する、形、色、甘味ともに優る小みかんが紀州藩の物産となっており、だいだいは、食えないもの、として軽んじられていた。

とりわけ、凹凸がひどく怪異な感じを与える出来そこないを、

「鬼だいだい」

と名づけ、ののしり言葉としても用いられる。

吉宗は、陰に陽に「鬼だいだい」と呼ばれて育ったのであった。

また、「湯殿っ子」と陰口をたたかれていることも知るようになる。それが何を意味するのか、源六という幼名のころは、正確には理解しえなかった。しかし、嘲りであることは感じられる。

城郭に接した吹上の別邸で生まれた吉宗は、捨て子は育つの吉例にのっとり、いったん追廻門の外に捨て置かれた。すぐに、偶然通りかかった振りの岡ノ宮の神主が泣き叫ぶ嬰児を拾い、段取り通り、重臣加納五郎左衛門の屋敷へ届けたのである。

源六と名づけられた吉宗は、生母おゆりの乳をふくんで、加納屋敷で育ち、五歳になると母と離され、城中奥御殿に引き取られた。

十九歳年上の長男綱教は別として、四つちがいの三男（次男次郎吉は夭逝）長七（頼職）とは背丈は変わらず、数年のうちに追い越した。腕力、武術も、年年、兄長七に差をつけてゆく。

父光貞は、御三家第二代当主として戦国乱世の遺風をうけ継いでおり、武芸とともに格闘技である相撲を好んだ。

御殿中庭で、光貞は長七と源六をよく取り組ませたが、七対三の割りで源六が勝った。三の取りこぼしも、兄を負かしつづけてはいけない、という配慮が幼いながら源六にあり、力を抜いていたのである。

周囲の目は源六に冷たかった。とりわけ、長七の付き人たちは憎しみのまなざしを、図体が大きく、腕力の強い、異相の源六へ浴びせた。

「湯殿っ子」

「鬼だいだい」

という声が、おのれへの悪口として源六の耳に止まるようになったのは、そのころからである。

源六がぐれて凶暴の質にならず、逆に、無口の、気弱な子に変わっていったのは、力持ちの大女でも温順であった母の血かも知れない。

長七と相撲を取らされても、力押しでは圧勝するが、兄の技にはもろい、という格好をつくって、七対三の割りで負けを演じるようになった。

長七とその付き人たちは、

「相撲は頭の働きじゃ。技じゃ。馬鹿力だけでは勝てぬわい」

と、意気軒昂、御殿女中たちも大よろこびである。

しかし、光貞が真相を見抜かないわけはない。やがて、御殿中庭での相撲はおこなわ

れなくなった。

そのころ、光貞は、源六の付き人の一人であった加納久通に、次のように語ったという。

「頭の働きが優れているのは、源六のようじゃ。源六は強靭なる体軀といい、面構えといい、知識の働きといい、心根のやさしさといい、一国一城の主にふさわしい器量である。あれが末っ子ではなく、嫡男であれば、と思うことがあるぞ。いや、これは、物議をかもす。失言じゃ。構えて、他言無用」

口止めをする大殿（光貞）のお目が笑っていた、と、久通が打ち明けたのは、吉宗が紀伊藩主に推された日である。

「当時、何かと風当たりが強く、意気消沈のわれら（源六の付き人）を励まそうと、御失言を装いなされて、仰せられたのでございましょう。なれど、御本心であったと存じまする」

二十二歳の若さで、思いもかけず五十五万五千石の御三家を継ぐことになり、吉宗が内心、うろたえているのを察した久通は、昔話をもち出して自信を植え付けようとしたのだった。

加納久通は、生後間もない吉宗を預かり、五歳まで育てた重臣加納五郎左衛門の一族である。

十一歳年上の久通は、源六の御城入り後、有馬氏倫とともに傅役に選ばれ、今日に至っていた。

それゆえに、吉宗が魁偉剛健な外貌とは裏腹に、本性は引っ込み思案で、気が小さいことを熟知している。それが、兄たちをはじめ、学問相手として付き合わされてきた、当世風の容貌を有する同年輩の重臣の子らへ対する劣等感にもとづくことも、久通は察知していた。

久通は、形ばかりの大名とはいいながら三万石の領主となって以後の吉宗（当時は頼方）へ向かい、

「殿の、おからだの偉大なるは、天の賜物でございまする。それだけで、人人に威を放ち、よき政治ができまする。天与の宝を粗略になされてはなりませぬ」

と、長身を恥じて猫背になったり、醜いと思いこんでいる顔を俯き加減にする悪癖の矯正に、根気よく努めてきたものである。

（そのことを思い出されたに相違ない）

上段之間の框の端に控える加納久通は胸中でつぶやき、すぐには着座せず、巨軀を充分に見せつけるように仁王立ちになったまま、大広間にひしめく群臣を睥睨している若き主君を、頼もしげに仰ぎ見ていた。

やがて、悠然と座に着いた吉宗は、口をひらく。

「われが、吉宗である」

力のこもった、よく通る声であるが、外貌に似ず、幼さが残る、やわらかい響きであった。

「本日、汝らを呼び集めたのは、余の儀ではない。よく存じておると思うが、紀州藩は、

この数十年来の、さまざまな出費の重なりによって、財用の窮乏は極に達しておる。このままでは、家臣のうち、半数の召し放ちも、やむなきに至る」

大広間に動揺の息遣いがひろがる。

上段之間に背筋をのばして座す吉宗は、言い急がず、おだやかなまなざしで満座を見渡していた。

「落ち着いておられる」

加納久通は、横に座す有馬氏倫へ、ささやかずにはいられない。

久通の軟に比し、剛で傅育に当たってきた氏倫であるが、いつも強面をくずさないその剛毅な頬がゆるんでいる。

返事がないので、久通が見直すと、上段之間を見つめる氏倫の目に涙がにじんでいた。

訓示の内容は、昨夜、城中の密室において、吉宗の意向を尊重しながら、氏倫、久通の三人で練り上げ、言いようの稽古も重ねているところから、心配はない。

憂慮していたのは、出座直前までの吉宗の落ち着きの無さであった。緊張が高じて、何度も便所へ足を運び、浅黒い顔面が青ざめ、ひきつっている。厳つい外貌に隠されている気の弱さを、やはり抑えきれない様子がありありであった。

それゆえに、別人のごとく、悠揚迫らぬ態度で大広間の静まりを待つ吉宗の雄姿に、氏倫と久通の感慨はひとしおだったのである。

「召し放ちは、最後の最後の手段にしたいと思う」

ふたたび口をひらいた吉宗の声に、乱れはない。

廊下や縁側にまであふれ出た在国の士分千数百人の目が、一つの鏃になって、上段之間を射ていた。

吉宗は動ずることなく、言葉を継ぐ。

「それには、上下、心を一つにし、難局に当たらねばならぬ。われを見よ」

吉宗は立ち上がった。

まとった粗衣を、おのれの目で点検するように、眺め渡す。

「財政の再建は、出費を減じ、収入を増す、このほかに妙案はない。すなわち、われも行うゆえ、汝らに、質素倹約を命ずる。衣は、このように、木綿。食は、朝夕二食にし、多くても一汁二菜。間食（昼）が欲しくば、残りものですませよ。屋敷に、武家として必要欠くべからざるもののほか、ぜいたくなる物品を置くことを禁ずる」

吉宗は、小倉織の袴の股立ちを引き上げ、機敏に座す。

「さて、召し放ちを最小に、よいか最小にとどめる応急の処置として、一同に、俸禄の二十分の一あて、二十分の一じゃ、差上金を求める」

意味をはっきり理解させるために、吉宗の口調は、ゆるやかで、明瞭であった。

すでに吉宗の威に打たれている群臣は、息をのんだように粛然とし咳一つもらさない。

「差上金は、何年つづくかわからぬ。なれど、あまたの借財を返済しおえた暁には、差上金は必ず、そのほうらに戻す。これまでのように、借上金を、うやむやにはせぬ」

安堵の吐息が大広間に流れた。

四

吉宗は、回想から、我にかえった。

江戸城本丸大広間での、将軍宣下の礼典は、終りに近づいているようである。

将軍側衆は五人いる。そのなかの二人が、吉宗の江戸城入りに際し、随従を命じた旧紀伊藩士であった。

二人は、気心の知れた有馬兵庫頭氏倫と加納遠江守久通にほかならない。両人は、それぞれ従五位下に叙せられており、今日の式典には温和で沈着な加納久通が束帯姿で影のごとく吉宗の介添えをつとめている。

上段之間の端に控えている、その久通の視線が、吉宗を回想から現実に戻したのであった。

勅使をはじめとする公卿一同の帰還の儀があり、吉宗は、いったん殿上之間へ退く使者たちを古例にのっとって見送る。

「しばし、休憩にございまする」

久通の、いたわりをふくむ声で、吉宗も大広間から中奥へ向かった。

御成り廊下の途中から、有馬氏倫もお付き衆に加わり、休息之間に入る。

直ちに、昼食の膳が運ばれてきた。

吉宗は、紀伊藩主時代から、一日二食を励行してきた。江戸城の主になってからも、

特別の行事のほかは、朝は辰の刻（八時）、夕は申の刻（四時）の二回ですませている。

「一日二食で身を養うのに充分である。それ以上は、みな、腹の奢りというべきであろう。太平無事のときに飽食するくせをつけておいたならば、非時のときに充分なる働きができない」

と言い、これまでの三食の慣習を変えさせていた。

ただし、昼食の代わりに、朝食の残りものを肴に指定し、酒を飲むことはめずらしくない。

美食を無用とする吉宗だが、酒は好んだ。だが、賄方にあらかじめ酒量を伝え、自ら決めた量を決して越えない、自制力の強い飲みようである。

「祝いゆえ、昼は、氏倫と久通を相伴、肴は朝の残りものにて、銚子、三献」

と命じてあった。

運ばれてきた膳を、下段之間に置かせた吉宗は気軽に上段之間からおりて、氏倫と久通を前に座す。

このような、主従団欒の飲食はめずらしくはない。

すでに三ヵ月余になるが、吉宗は、徳川宗家を継ぐことに決まったとき、心の中で誓った三ヵ条があった。

一、驕らず、高ぶらず。

一、質素倹約を基とした紀州藩での治績を心の糧に、信念をもって財政破綻と聞く幕政に取り組む。

一、江戸城に伴う紀伊藩士は最少の人数とし、派閥をつくらず、側近の政事介入の弊害を除く。

第一は自戒である。

第二は、将軍としての政事に対する心組みである。

第三は、五代将軍綱吉以後の、幕政の乱れの原因に留意することであった。

綱吉は、三代将軍家光の第四子である。上野館林二十五万石の領主であったが、長兄である四代将軍家綱の、ただ一人残った弟として将軍職を継いだ。その綱吉は、江戸城入りに際し、側近をはじめ、家臣（陪臣）のほとんどを伴い、幕臣に直して、身辺を固めたのである。

側近のなかから、老中をしのぐほどの権力を有する側用人牧野成貞や柳沢吉保などが出て、綱吉治世の後半は生類憐みの令等の悪法がまかり通り、幕政は乱れた。

甲府三十五万石から六代将軍に就任した家宣（綱吉の兄、綱重の子）も旧臣を大勢召し連れて、江戸城に入った。側近のなかから、側用人間部詮房や儒者新井白石という権力者が出て、老中を圧する。

外様（陪臣）に幕政を意のままにされた三河以来の名門大名や直参旗本の、将軍家への不満は極に達していた。

それを知る吉宗は、幕政の中心を本来の老中に置き、譜代の旗本を要職に登用する方針を打ち出したのである。

この方針は、紀伊藩江戸家老三浦為隆の見識に負うところが大きい。

三浦家は、紀伊藩創設の節、家康から付けられた、安藤家、水野家、久野家と並ぶ四家老家である。

吉宗は、宗家相続が決まると、陰の働きが随一であったにちがいない三浦為隆を幕閣に据え、片腕にしたいと考えたのだった。

だが、為隆は、

「恐れながら、それがし、神君家康公より紀伊家を補佐せよ、との命をうけましたる家系。御遺命にそむくわけにはまいりませぬ」

きっぱりとした返答である。

「それならば、われが将軍になったあとも、政道について相談にのってくれような」

「それはなりませぬ」

親子ほどにも年がちがう為隆は、慈愛のまなざしで、諭すように言う。

為隆も、吉宗が「湯殿っ子」「鬼だいだい」と軽視されていた部屋住みのころ、陰に陽に力づけてくれた一人であった。

「江戸城の主におなりあそばされたあとは、紀伊藩と縁を断ち切らねばなりませぬ。将軍は、区区たる藩ではなく、天下を治めるが責務。幕府には、御老中をはじめ、将軍を補佐する役職の者が、仕組みとして、そろっておりまする。その仕組みを大事になされませ。外様が口をさしはさむとき、人心一統を損ない、御政道は乱れまする。幕政は幕政。御老中を尊重なされ、かつ、譜代の旗本のなかから、人材を抜擢なされませ」

このような進言があって、吉宗が紀伊藩から召し連れたのは、必要最少の人数に限っ

た。

この数ヵ月の間に、多少の入れ替えをおこなったが、今のところ、近習に重きをおき、側衆二人、小姓十数人、小納戸二十数人。このほか、御膳番、奥医者、鷹匠、薬込役（のちの御庭番）をそれぞれ若干人。吉宗の嫡男長福丸（のちの九代将軍家重）付き家臣団等にすぎない。

江戸城では、将軍の近習として、八人前後の側衆のほか、一組五十人ずつが六組ある小姓衆をはじめ、小納戸衆、御書院番など、千数百人の幕臣が交代で詰める職制となっている。

吉宗は、六人いる老中を全員留任させ、側用人の間部詮房や儒者新井白石等、幕政をゆがめた権力者と彼らの息のかかった小姓、小納戸は解任したものの、大幅に人事を動かしていない。

日常、吉宗は、従来の近習と紀伊藩から入った近習とを区別せず、原則として、順番通りに用いている。それでも、見知った顔が当番にあたり、給仕をしたり、身のまわりの世話をしていると、顔には表わさないが、心の和みを覚える。

今、吉宗の膳から肴を少量ずつ摘み、酒も杯に半ばほど注いで、それぞれを毒味している近習は、紀伊藩系の小姓二名であった。

やはり、安心感は格別である。

諸事簡略を旨とし、先日などは、夜半前、月番老中が緊急の伺い事で謁を求めてきた。

「将軍と老中は、政事に関しては一心同体ゆえ、要件あれば、朝を待たず、深夜であっ

ても斟酌なく、申し出るよう」と、かねて、言い置いていたからである。

奥御殿（大奥）へ渡らない夜は、中奥休息之間の、十八畳ある上段之間の奥で就寝する。

その日、知らせをうけると、吉宗は白い寝着のまま、下段之間へ出て行き、老中と会った。

寝入りばなを起こした感のその姿に恐懼する老中へ、

「われらは、昼、夜にかかわらず、心安く会わねばならぬ。そのたびに、服装をいちいち改めるにはおよばぬであろう」

と、笑って語ったものである。

このように、物事にこだわらない吉宗であるが、毒味だけは、無用、とは言わなかった。

膳は、紀伊藩からきた御膳番が加わった台所で、賄方によって慎重に調理され、毒味も念入りにおこなわれる。

膳部の受け渡しや、運ぶ小納戸衆にも厳重な警備の目が光っている。毒物等の混入は、まず、ありえない。

しかし、吉宗には、氏倫と久通にも打ち明けられない、だが、両人は以心伝心で感知しているであろう、怯えがあった。

復讐をうける恐れである。

もちろん、その起因については、全くかかわりはない。紀伊藩にとっても、その風説

は濡れ衣にちがいないのだが、一抹の疑惑もなしとしないところが、吉宗の不安を払拭できないでいるのだった。

ひそかなるこだわりは、前将軍家継の病状が悪化したころにさかのぼる。

硬派の側近有馬氏倫が、次の将軍職を狙うべし、と進言したとき、諸般の事情から見込みは薄いと判断していた吉宗は、心を動かさなかった。

氏倫は、眼光を異様に鋭くし、

「天が与えたもうた、千載一遇。手は充分に打っておりまする」

と、声を押し殺した。

「手を……。それは、どういうことであるか」

という詰問には、氏倫は、

「殿は、与り知らぬ、それでよろしゅうございまする」

軽く受け流したのであった。

その問答が、吉宗の胸底に澱のように沈んでいる。

澱をつつけば、恐ろしい秘密がとび出すようで、吉宗はその後、この件に触れようとしなかった。

加えて、薬込役の報告がある。

薬込役は、紀伊藩で御手銃の玉薬をこめるのを表向きの役職とした、藩主直属の隠密であった。

吉宗は、この薬込衆を自在に使って、家臣の動向や領民の実情を把握し、あるいは世

間の風説を知り、藩政の舵取りに役立てたのである。

紀伊藩江戸屋敷にも、薬込役は随従してきている。まだ幕臣に直していないが、そのなかの何人かが、正式の将軍宣下の前であったが、すでに上様と称されている吉宗の内命をうけ、紀伊藩での御用と同様の任務についていた。

内命の一つに、紀伊藩から吉宗が徳川宗家を継いだことに関する世評、とりわけ、敗れた尾張藩と水戸藩における噂を集めよ、というのがあった。

薬込役は、吉宗が休息之間の西廊下の一角に出て、庇の下にうずくまる指名の者に、直接、使命を伝えた。報告も、同じ場所で、人払いをして聴取する。

後年、腹心の側衆（吉宗時代は有馬氏倫と加納久通）が仲立ちをし、重要な件に限り、将軍が側衆との問答を障子越しに聞いたが、吉宗の治政の初めは一対一であった。

身分の低い薬込役であるが、吉宗はその一人一人を熟知し、信頼していた。世襲である薬込衆も、主君に対する絶対の忠節が身についている。

その一人、明楽正親という者が、過日、尾張藩の江戸諸屋敷内や御用達商人の間でひろまっている噂を言上したのだった。

報告は、見聞したままを、私見を加えず、そのまま細大もらさず申し上げるのが掟である。

一対一といっても、当然、異変に備えて、適宜の位置に近習や警固の士が控えている。したがって、言上の声は低い。

明楽正親は初老であり、頭格の老練者であった。

「もっぱらの噂と申しまするは、先先代（吉通）と先代（五郎太）の尾張公の、死因についてでございまする。将軍相続間違いなしとされておりましたる吉通公が二十五歳の若さで急死なされたときの御様子が尋常ではござなく、食後に急に血を吐かれ、ひどいお苦しみであられた。にもかかわらず、医者は全く手をほどこさず、もだえ死ぬのを見ていただけ、との風説が近ごろ流れ、尾張人は信じているようでございまする。その、およそ三ヵ月後に、後を継いだばかりの、三歳の五郎太公も急死なされ、尾張家の直系は絶えたのでございまするが、これには……」

冷静な正親であるが、暫時、言いよどむ。

「斟酌無用」

吉宗は一声かける。

「この連続した藩主死去の怪の裏には、必ずや、紀伊藩の手がのびておる。その証拠に、当日の吉通公付き医者も、五郎太公付きの奥女中も、行方知れずになっておる、と、このように尾張屋敷出入りの者は、ささめき合っておりまする。さらには、前将軍（家継）のおいのちを縮めまいらせたのも、紀伊家の意をふくんだる大奥の何者か……との噂も小耳にはさみましてございまする」

やがて、報告をおえた明楽正親は立ち去った。

吉宗は、しばしその場にたたずみ、思いに沈んだものである。

吉宗は、同じような風説で、心を傷つけられた過去をもつ。

十一年前の、二十二歳だった宝永二年（一七〇五）。五月に当主の長兄綱教が死に、八

月に先代藩主の父光貞が他界、九月に第四代藩主になったばかりの次兄頼職が急死した、あの年のことである。

末弟であった頼方（吉宗）が急遽、第五代藩主に就任して間もなく、どこからともなく、紀伊五十五万五千石を横領する野望から頼方とその側近が、邪魔者に毒をまいらせた……という噂が立ったのである。

風説を、いち早く、吉宗の耳に入れたのは有馬氏倫で、

「人の口に戸は立てられぬ、と申しまするが、全くもって荒唐無稽。誰もが信じていますまい」

怒る気にもなれない、という面持ちであった。

兄二人と父が次次に病に倒れ、臨終を迎えた、その経緯を目の当たりに見ている吉宗は、気力の衰えが急速にからだを蝕む人のいのちのはかなさを痛感こそすれ、何者かの手が加わったとは全く考えられなかった。

まして、吉宗自身はもちろん、側近の誰かに紀伊本藩を乗っ取ろうとする野望があったとは、思いもよらぬことである。

現に、以後十一年の間、その形跡は顕れていない。

同様に、尾張家において藩主が連続死したのも、腹満（腹膜炎、腸捻転）、胸痺（狭心症、心筋梗塞）、脚気衝心（脚気による心臓麻痺）といった、貴賤にかかわらず襲われる急死病だったのではあるまいか。まして、三歳前後の幼児は、ちょっとした風邪や食中りで直ぐに死ぬ。また、身内が短期間につづいて死ぬのは、一般に、稀有のことではな

い。

このように、おのれに言い聞かせても、吉宗の気は晴れないのであった。

氏倫の、

「天が与えたもうた、千載一遇。手は充分に打っておりまする」

という押し殺した声が耳朶に残っているからである。

御三家間の競争心、対抗心は異常に強いと世間から見られている。吉宗は格別には感じないのだが、とりわけ紀伊藩の重臣に、尾張藩へ対する負けん気がいちじるしい。

紀伊家が御三家のなかで、江戸から最も遠い地に配されたこと。尾張家の六十一万九千五百石に対し、紀伊家の五十五万五千石は六万石少ないこと。尾張家が何かといえば御三家筆頭の家柄を誇る等で、紀伊藩の重職や血気の者は腹に据えかねているようであった。

正徳二年（一七一二）に六代将軍家宣が死去し、次の将軍が下馬評の高かった尾張吉通ではなく、幼少で虚弱の質と伝わる鍋松丸（家継）に決まったとき、有馬氏倫は、

「恐れ多い申しようながら、次の御治世替わりは、早いかも知れませぬな。何年かたてば、情勢も変わってきましょう。殿には、一層の御摂生を」

と、何気無い語り口で、この機をとらえた風を装い、さしあたり、酒量を減らすよう、銚子の追加を命じないよう、諫言におよんだのである。

加納久通は率直明快であるが、久通より五歳年上の氏倫には何を考えているのかわからない、底知れぬところがあった。

当時、吉宗は紀伊藩主になって七年目の、二十九歳。藩財政の立て直しに成功し、各方面からの莫大な借金をほぼ返済し、家臣に課した差上金も取りやめ、約束通り、これまでの分を年賦で戻しはじめるまでになっていた。

奥向きに関しても、二年前（宝永七年・一七一〇）に正室の理子が懐妊したものの、流産し、母子ともに亡くす不幸はあったが、翌年に側室の須磨が嫡男長福丸（家重）を産み、吉宗は公私ともに充実していた。その勢いが、日常を放恣にし、酒に淫するに至っていたのである。

その時の氏倫の諫めで、吉宗は賄方にあらかじめ酒量を伝え、自ら決めた量を決して越さない飲みようを身につけたのであった。

だが、四年後の今、当時の氏倫の、何気無い語り口が、妙に気になる。

尾張家の吉通の急死は、幼君家継が正式に将軍宣下をうけた三ヵ月後であり、つづいて吉通の嫡子五郎太も死去したのだった。

まさしく、何年もたたぬうちに情勢は変わり、御治世替わりも、きわめて早かった。結果、紀伊家の吉宗に将軍位がころがりこんできたのである。

氏倫の見通しのままになった、と言えなくはない。

（まさか……）

小姓の、念入りの毒味はつづいている。

吉宗は、相伴の昼膳を前にして端座している五位の束帯に身を固めた氏倫の表情を、それとなくうかがう。

だが、今日の式典を裏で支える心労がにじんでいるほかは、氏倫の謹厳な顔面から何も読み取れない。

並ぶ加納久通のほうは、全身からよろこびがあふれ出ており、このたびの将軍職継承に紀伊藩の陰謀が秘められているなど、とうてい考えられない晴れやかな顔色であった。

(それにしても……)

吉宗は、一抹の疑念が澱となって沈んでいる胸の底に、かすかな痛みを覚える。

午後は、諸大名をはじめ、布衣以上の諸役人、法印・法眼等がひしめく大広間に出座するのにつづき、白書院へ移って、御三家の当主の祝賀を親しくうけなければならない。

尾張家の継友、紀伊家の宗直、水戸家の綱条である。

宗直は吉宗が後継に据えた一門であるから心安いが、将軍職を争った継友と綱条とに対面するのは気が重い。とりわけ、継友は、吉宗に遺恨を抱いているのにちがいなかった。

吉宗は、勅使を迎えての今日の盛儀で、ようやく将軍就任の実感がわいた。しかし、依然、心からの歓喜にほど遠く、むしろ前途に暗雲を見るのであった。

第二章　外柔内剛

一

享保元年（一七一六）八月十三日におこなわれた将軍宣下の大典は、八月二十四日の勅使一行御帰洛の後も華やかにつづき、数日間催された大広間南庭能楽堂での祝賀能楽の、町入能をもって、一応終了した。

町入能というのは、祝賀能楽の最終日に、江戸府内八百八町の町人（家主以上の町役人）数千人を午前と午後にわけ、城郭内へ招き入れて、将軍代替わりの慶賀をわかちあう催しである。

この日のにぎわいは、根ががらっぱちの江戸っ子だけに、格別であった。

麻上下に威儀を正した家主たちは、名主に引きつれられ、大手門から入るのであるが、門内で紅白の饅頭包みと晴雨にかかわらず傘が一本ずつ与えられる。

この、町内へ帰れば大変なお土産になる品をもち、鉄砲組などが出ていかめしい三之門、中之門を経る。大勢であるから、怖いものなしである。おのおのが大名気分になって、大玄関前の、豪壮な中雀門をくぐり、塀重門から大広間南庭へ入るのだった。

正面に、総建物が一万一千余坪におよぶと聞く本丸御殿群の、その南端に位置する大広間の殿舎が視野いっぱいにひろがり、町人たちの度肝を抜く。

道筋で、警備の士に、たびたび、

「静まれ」

の叱り声をあびても、一向に陽気な喋りをやめなかった連中も、南庭へ足をふみ入れたとたんに、気圧されたように口をつぐみ、神妙に能舞台前へ導かれる。

殿舎との間を矢来で仕切った広大な庭の白洲が町人たちで埋まると、やがて、幽玄なる音色とともに揚幕があがり、きらびやかな装束の能役者が橋懸りに現われる。

この日の午後、将軍吉宗は、かすかに鼓の音が響き、地謡の声が流れてくると、中奥御座之間から大広間へ渡り、入側の戸の透き間から立ったまま庭を眺めた。

威厳に欠ける所作だが、随従しているのは側衆のなかでも最も心安い加納久通と、数人の小姓だけである。

能楽を観覧するためではない。

吉宗は、立場上、口には出せないことだが、能楽を好まなかった。雅やかというのであろうが、音色も演技も悠長にすぎる。それに、節倹質素を信条とする吉宗には、能役者が着る美麗をつくした装束が目ざわりでならなかった。

江戸城では、正月の能楽初め等の年中行事をはじめ、勅使下向、世子誕生、婚儀、元服などの大典のあとには能楽が催される。

吉宗は、紀伊藩主時代から、将軍に陪席しても能楽観覧が苦痛であった。

このたびの、おのれ自身の将軍宣下にともなう祝賀能楽は、勅使以下公卿を主賓とする興行を第一とし、勅使帰洛後も諸大名、幕府役人、官職をもつ旗本、大名の世子等を何回かにわけて拝観させている。

そのたびに、祝いをうける新将軍として、吉宗は上段之間の御簾のなかながら、出座していなければならなかった。

「うんざりじゃ。将軍とは、なかなかもって、つらいものよのう」

と、加納久通に苦笑をもらしたのは、昨日である。

にもかかわらず、出座の必要のない今日の町入能に吉宗が姿を現わしたのは、久通が午前の興行をのぞき見て、

「江戸の町人は、まこと、自由三昧でございまする。勝手放題の言動をとり、舞台よりは白洲の気ままを見ているほうが、面白うございまする」

と、笑いを抑えて報告したからであった。

江戸城においては、能楽は厳粛なる儀式の一つであった。姿勢を正し、出かかる咳も懸命にのみこみ、眠気をこらえて見ていなければならなかった。

「ならば、われも民情検分をしておかねばなるまい」

何かと口やかましい有馬氏倫が久方振りに休みをとっているのを幸い、好奇心の強い吉宗は、音曲の流れとともに早速、中奥御座之間を抜け出したのである。

広い南庭を埋めつくしている町人髷は、早くも退屈したとみえ、すでに行儀悪く揺れ動いており、あちこちで私語が交わされていた。

演技たけなわの舞台に尻を向け、車座になって談笑している一団さえある。

そのうち、賜わりものの饅頭を食べはじめる者、それをやめさせようとする年輩の男。土産の傘をひらいたり閉じたりして遊んでいる者、制止する隣りの男。傘で前の男をつついて悪戯をする者。舞台へ向かい、中腰で野次る者、制止する怒号、ついには喧嘩がはじまる始末であった。

周囲を固めている警備の士は、千余のぎっしり詰まった群衆であれば、目の前の辺りを静まらせるほかに、なすすべはない。

まさに、城中とは思えない、自由三昧であった。

一方、舞台では厳粛に演目が進められている。

吉宗は、こらえきれず、笑い声を立て、その場を離れた。

松之廊下を中奥の方へ戻りながら、吉宗は振り返る。

「のう、久通」

「はっ」

「人は、あのように、おのれの心のままに生きるのが、幸せというものじゃ。面白くないものは面白くないと、勝手気ままに騒ぎ立てる町人が、うらやましい。さりとて、われに、自由三昧が許されようか」

「今さら、何を仰せられまする」

久通は、やんわりと、たしなめる。

「それでのう。城を出て、存分に野山を駆けめぐることができる、鷹狩りの制復活を急

ぎたいものじゃ」

吉宗は立ち止まり、久通を、やや甘えた目で見る。

「これは、われの我ままではないぞ。能楽とは比べものにならぬくらいの、武士の嗜みである」

久通は、あいまいな表情で、うなずく。

それというのも、鷹狩りは、貞享四年（一六八七）の正月、五代将軍綱吉が生類憐みの令を発布して以来、おこなわれず、元禄六年（一六九三）九月には幕府の鷹匠・餌指・鳥見組といった職が正式に廃止になっていたからである。

生類憐みの令は、宝永六年（一七〇九）正月、六代将軍家宣の治政初めに撤廃された。だが、家宣は尚武の質ではなく、次の幼君家継も当然、鷹狩りに興を示していない。

貞享四年から数えれば、およそ三十年、鷹狩りの制は忘れられた存在になっている。

「久通」

「はっ」

「東照神君（家康）御遺訓の一つに、鷹狩りの徳が述べられておる。存じておるか」

「おおよそ、鷹狩りは遊興のためのみにあらず……」

久通は、目に笑みをふくんで、すらすらと暗唱しはじめる。

「……遠く郊外へ出て、土地者の艱苦、暮らしぶりを察するのは言うまでもなし。また、筋骨を鍛え、手足を軽捷ならしめ、風寒炎暑をいとわず奔走するにより、おのずから病など起こることなし。これ、軍務調練を第一とする、武士の心得ぞ。その上、朝早

く起き出れば、朝飯の味も格別。夜中となれば、終日の疲れによりて快眠するゆえ、閨房にも、おのずから遠ざかるなり。これぞ摂生の極意にて、なまじの薬を用いるより、はるかに勝れり、でございまするな」

「あっぱれじゃ。よくぞ、一言一句、間違いなく諳んじておるものよ」

いっしょに誦じていた吉宗が感嘆する。

「上様」

「うむ」

「恐れながら、この御遺訓は、上様御幼少のみぎり、わたくしめが、口移しにお教えいたしましたるものでございまするぞ」

「あ、あ」

吉宗の魁偉な顔面が、少年のように、ぽっと赤らむ。

「そ、そうであれば、師匠が誤りなく諳んじていても、何ら、不思議ではない」

「恐れ入りたてまつりまする」

吉宗と久通君臣のやりとりには、時として滑稽味がともなう。

二

堂堂たる体軀と相まって、日に日に将軍としての威厳が身につき、立ち居振舞いにも余裕が見うけられる吉宗であるが、胸の内では絶えず不安と劣等感にさいなまれていた。

生まれや育ち、教養、容貌が、公方さまと呼ばれる江戸城の主にふさわしくないのではないか、という負い目である。

（これでいいのか）

（言行に誤りはなかったか）

（誰かが、われを笑っているのではあるまいか）

このような思いで、中奥休息之間の裏側にある、名もない小座敷に閉じこもり、ふさぎ込んでいる時も少なくない。

休息之間と称しても、上段奥が寝所になっているものの、下段之間は御座之間同様の執務部屋に等しい。小姓や小納戸にかしずかれ、側衆が出入りし、老中も急ぎの書類をもって伺候してくる。

誰にも姿を見られず、肘枕でのびのびとくつろいだり、大の字になって暫時まどろんだり、泣き顔をつくったりできるのは、江戸城広しといえども、この小座敷だけであった。

そう長く逃避していることはできない。せいぜい、半時（一時間）が限度である。政務にさしつかえるし、第一、側衆が気遣って、襖の向こうからしきりに声をかけ、当番の医師を呼びよせていることすらある。

私邸である大奥も、江戸城育ちではなく、紀伊家から入った吉宗にとって、憩いの場所ではなかった。

中奥より一層、窮屈であり、気骨が折れ、居心地が悪い。

本丸御殿群は、大きくわけて、表向、中奥、大奥から成っている。表向は政庁であり、中奥は将軍公邸、大奥は御台所（将軍夫人）、側室、奥女中等が住む女だけの殿舎であった。

「何たる無駄ぞ、浪費ぞ」

宗家を継いで間もないころ。

初めて大奥の全貌を知った翌朝のことであった。中奥休息之間へ戻った吉宗は、出仕の有馬氏倫と加納久通に憤慨したものである。

「年寄（大奥の老中、七人）どもは、いやがっていたようじゃが、検分してみた。じつに広い。聞けば、表と中奥をあわせて四千六百八十余坪であるのに、大奥だけで六千三百二十坪ほどあると自慢気であった。しかも、何をしておるのか、女どもが六百人も住まっているというぞ」

「お声が高い。それに、女どもなどと、お言葉遣いにお気をつけめされよ」

面を強ばらせていた氏倫が、早速、小言を発する。

あらかじめ人払いをしているのだが、三人にとって、江戸城内は、まだ、えたいの知れない敵地という思いが強い。

「どうも、奇妙な感じでございまするな」

久通が、ひょうきん顔をつくって、口をはさんだ。

「大奥は、上様のお屋敷でございましょう。御自分のお屋敷を、お咎めがちに仰せられるとは、いや、はや……」

と、吉宗と氏倫から笑いを引き出しておいて、久通は声を改める。
「お伺いが遅れましてございまするが、若さま、並びに、お方さま方は、御壮健であられましょうや」
「小次郎は健やかである。おこんと、お久は心細がっておる」
吉宗は率直簡明に言い、精悍な面を曇らせた。
久通と氏倫は、ちらりと視線をあわせ、その目に同情の色をにじませる。
おこん、お久は、紀伊江戸屋敷から大奥に移住した吉宗の側室である。二歳の小次郎は、おこんが産んだ吉宗の次男であった。
お須磨という今は亡き側室の腹である嫡男長福丸（家重）は六歳になっていた。世子であるので、模様替えがおわり次第、二の丸に迎えられることになっており、目下、赤坂の紀伊屋敷で待機している。

吉宗の正室、真の宮理子は結婚四年目の宝永七年（一七一〇）、夏、宮家育ちの生来の蒲柳の質に流産が重なり、赤坂紀伊屋敷で母子ともに逝った。理子は二十歳、吉宗は二十七歳。女児ではあったが、待望久しい正室の子だっただけに、吉宗はじめ家臣一統の落胆は大きかった。
十代後半から二十代初めにかけての吉宗は、三万石の領主とはいえ、実質は部屋住同様であり、末っ子の気楽さと精気横溢の体軀から、かなり酒色に淫した。父光貞が藩主であった十二歳より父に従い、長兄綱教が封を継いだ十五歳からは長兄とともに、参勤

交代をし、江戸屋敷では大飲し、折りをみて奥女中などに手をつけることもやっている。

国元和歌山では、さらに奔放であった。氏倫、久通ら重臣の目を盗んで、単騎または近習数騎で遠駆けをし、根来寺門前の隠れ色里などで遊蕩することも、まれではない。

時には、畦道や山村で娘を見初めることもあった。しかし、吉宗は、頼方と名乗っていた当時から将軍位についた今日まで、女性に乱暴を働いた例はない。おのれの体軀と面貌が人を怯えさせるのを知っており、少年のころより、弱い者、とりわけ女性には、はにかみさえ浮かべて物柔らかに接する習性を身につけていた。

逃げ隠れたり、拒み通す女には執着しない。供の者がいれば取り持ちをさせる。その場合も、無理強いをさせない鷹揚さは、さすが御三家の御曹司、と周囲を感服させたものである。

とはいえ、一方、体面を重んじ、事なかれを念ずる長兄の藩主綱教をはじめ重臣たちにとって、頼方（吉宗）の放埒は頭が痛い。

協議の末、十七歳の春から、数人の側室をもたせた。いずれも、れっきとした藩士の子女である。

利かぬ気の頼方は、むしろ、このような、あてがいに反発し、遠駆けをやめなかった。後年、天一坊事件で知られる御落胤騒動がおきるのは、この時期に因がある。

一貫した好みは、美貌ではなく、大柄で丈夫そうな女性であった。

紀伊藩主になって五、六年後のことである。

宝永六年（一七〇九）に生類憐みの令が撤廃されたが、江戸では、新将軍家宣が好ま

ないところから、諸大名は鷹狩りを慎んだ。

吉宗も同様であったが、帰国すると、幕府に倣って廃止していた鷹狩りの制を復活し、思う存分、和歌山近郊の野山を駆けめぐったものである。

太平の世の火縄銃は三匁玉が普通であるが、吉宗は十六匁玉の重い胴太の銃を軽軽と扱い、田畑植林を荒らす凶暴な猪を撃つのを得意とした。

手負いの大猪が逆襲してきたことがある。まさに、猪突猛進であった。近習たちは叫び逃げるばかりである。

吉宗は、銃を逆さにもって構え、飛びかかってくる瞬間、

「やっ」

気合いもろとも、牙をむく大猪を台尻で打ち殺してしまった。人間ばなれした怪力というほかはない。

主君を放って逃げた近習たちには、お咎めはなく、

「われに手柄をゆずるとは、あっぱれじゃ」

と、呵呵大笑したものである。

そのような狩猟の帰路、

「おう」

馬上の吉宗は、思わず、手綱を引いた。

いななきに、何事か、と近習が数人、駆け寄ってくる。

「あれを見よ」

目を輝かせて、吉宗は鞭で示した。

生け垣の向こうは、庄屋であろうか、家屋の前の庭がひろく、籾倉の虫干しでもしたようで、数人の男女が俵をかついで往復している。男衆は一人一俵であるが、男たちより大柄な女が一人いて、明らかに若い肢体をもつ、その女性は二俵を軽軽とかついでいるのだった。

吉宗は帰城すると、早速、使者を遣わした。

使者は、万事、飲み込んでいる加納久通である。

二十六歳になっても縁談に恵まれなかった、おさめ、という名の、お多福顔のその娘は、本人は何が何だかよくわからないまま、周囲の人人に、

「玉の輿やのし」

と、お祭り騒ぎで送り出された。

やがて、おさめは吉宗の側室になり、寵愛をうける。

おさめの奥向入りを、吉宗以上によろこんだのは、吉宗の生母、おゆりの方であった。おゆりは、その出自と容貌のゆえか、長い間、不遇であった。光貞からは、すぐに忘れられた。わが子（吉宗）が五歳になると引き離され、おゆりは以後、城外の屋敷に捨て置かれたのである。

吉宗は本藩を継ぐと、直ちに生母を和歌山城奥向に迎え、孝養をつくしたのであるが、

「おさめは、あが（私）の若いころに、そっくりじゃのし」

と、一目で気に入り、図らずも、孝養の最たるものになった。

そのうち、おゆりの方は、おさめをおのれの居住棟に同居せしめ、親子のような暮らしをはじめたのである。

吉宗は、御三家として、参勤交代は定期の通りとはいかず、江戸在府が長引くことが多い。

気立てがやさしく力持ちの、幼いころに両親と死に別れたところまで似た身の上の二人だけに、おさめが老母に付いてくれることは、吉宗にとっても、ありがたかった。おさめにしても、侍女にかしずかれて慣れない部屋にぽつねんといるより、土地訛で甘えられる、おゆりの方と暮らすほうが、どんなにか安らぐことか。

おさめは二十九歳になると、早早とお褥お断りを申し出て、おゆりの方の養女格になり、今は年寄として奥向で重きをなしている。

吉宗は、徳川宗家を継ぐと、数人いた和歌山城の、いわゆるお国御前（側室）に暇をとらせるよう、国家老へ指示した。できるだけ良縁を周旋し、相当の手当も与えるよう言付けることも怠っていない。

江戸城大奥へ移ったのは、江戸屋敷付きの側室であった、おこん、お久の、二人だけである。

正室理子が死去した翌年、正徳元年（一七一一）の十二月、側室お須磨が男子・長福丸を出産した。宮家より嫁した亡き理子の出自を重んじ、継室を迎える気持のない吉宗であれば、長福丸は嫡嗣であった。

お須磨は正室に準ずる扱いとなる。大名の妻子は江戸屋敷での定府が決まりであるか

ら、お須磨と長福丸は、以後、江戸赤坂屋敷住まいであった。

お須磨は、重臣たちが薦めた、紀伊藩士大久保忠直という文武両道の士の娘である。吉宗好みの大柄で、美貌とはいいかねるが、才女の誉れが高かった。

「子のためには、学才ある女性も、よろしかろう」

と、江戸屋敷では側室は他を置かず、もっぱら寵愛したが、そのお須磨がめでたく男子を産んだのであった。

二年後の正徳三年、九月十九日に、お須磨は次男を出産するお手柄を立てた。しかし、子は翌日に死亡、お須磨も十月二十四日に息を引き取ってしまった。この時代、流産または産後、母子ともに死ぬ率がきわめて高い。

吉宗は、二十六歳で逝った愛妾を悼み、

「長福丸は、まだ幼い。この子を育てるためにも、お須磨にゆかりの女人を見つけてくるように」

側室にするふくみで、加納久通に言いつけた。

ゆかりの女人は、難なく、探し出せた。お須磨の従妹にあたる、藩士竹本正長の娘という。

「それは、重畳。召し出すのに、差しさわりはないか」

人妻であったり、許嫁の身であったりすることへの配慮であった。

「それは、ございませぬが……」

久通は困り顔である。

「どうした」
「いえ、その、何でございまする」
「忌憚なく申せ」
「申し上げまする。その女人、顔かたち、よろしからず、枕席に侍らす容貌では、とうていございませぬ」
「醜い、という意味か」
「御意」
「からだは」
「いたって、丈夫に見うけられまする」
「学問は」
「かなり、とか」
「気立ては」
「よろしいとのこと」
「申し分、ないではないか。女性は、顔の美醜ではない。直ぐに召し出すよう」
こうして、長福丸の養母の心得で、江戸屋敷付きの側室になったのが、当時十九歳だった、おこんである。
おこんは、二年後の正徳五年（一七一五）十一月、男子を産んだ。次男、小次郎（田安宗武）である。
今一人、大奥入りをした、お久は、おこんが懐妊中に手をつけた奥女中であった。お

久も、豊かなからだをしているが、麗人にはほど遠い。

吉宗が、華奢好みの当世風に反し、骨太の、どちらかといえば醜女のほうに情愛を傾けることに関して、

「色香に溺れず、政治を第一にし、丈夫な子孫を残すこと、これぞ武士の心得ぞ」

と、家臣に語っているが、本心であろう。

だが、久通や氏倫など、吉宗を幼時から知る重臣は、主君の秘められた心情を察していた。

「湯殿っ子」「鬼だいだい」と陰口をたたかれてきた幼少年期。それは、とりもなおさず、母親おゆりへの侮蔑にほかならない。

もの心がつきはじめて以来の心の傷は、成長するにつれて、悪くは拗れず、逆に他人への思いやりに好転してゆく。それは、吉宗の胸の底に焼きついている、五歳で生き別れた、大柄で、力が強く、やさしく、そして悲しげな目をしていた母親の記憶と無関係ではない。

腹は借り物、の時代である。

側室が産んだ子は、主家の子とされ、おのれの子ではなくなってしまう。まして、主君の寵を失った、お手付き女は多くは飼い殺しで、愛児に会うなど思いもよらなかった。

吉宗のほうも、何度か求めたが、生母に会うことは許されなかった。ただ一度、内内で、やや離れた位置で、目を合わせたほかは。

その唯一の機会は、吉宗が越前丹生郡三万石の領主となったことの披露を、和歌山城

でおこなった元禄十一年（一六九八）、吉宗（当時は頼方）が十五歳の夏である。

三万石の大名といっても、御三家庶流に与えられる形式上の石高で、実収入は一万石に満たない土地である。頼方は、実質、依然として和歌山城の部屋住で、西の丸に居館がある。

あらためて編成された家臣団の謁見の儀があり、つづいて奥向で老女や奥女中等の目通りの儀があった。

その時、奥向へ渡る廊下の、中庭をへだてた向こうの小部屋に、中年の女人がただ一人、大柄の身を縮めるようにして両手をつかえていたのである。

先導の加納久通が、歩をゆるめた。

直前に耳打ちされていたので、頼方は廊下へ出るやいなや、くい入るような視線を向こうの小部屋へ射込んでいる。

（母上……）

かすかに唇をふるわせただけである。

だが、できることであれば、大声で呼び、庭へとびおりて、駆け寄りたかった。

しかし、後ろには太刀持ち等、近習が数人従っており、前方のお錠口には老女が出迎えている。

中庭の風情を賞でる振りでゆるめてくれた久通の歩みを、厳粛顔を保って、進むほかはない。

それでも、親子は目を合わせることができた。頼方は見た。身をのり出すような姿勢

をとる母の、化粧気のない浅黒い顔じゅうが濡れているのを。

横を向くことも、ましてや振り返ることもできない立場である。母の姿は、すぐに、歯をくいしばって涙をこらえる頼方の視野から切れた。

目通りの儀の間、十五歳の頼方は言いようのない怒りと闘っていた。怒りは、下段之間に居並んでいる、美しく着飾った老女や奥女中たちによって誘発されたのである。

（母上が、かわいそう）

三万石の大名となった、わが子の晴れ姿を、生母が身分違いという理由で、物陰でしか見ることのできない理不尽。それも、久通と有馬氏倫の、勇気ある好意がなければ実現が叶わなかった、掟破りである。

その罪への怯えがあってか、頼方の瞼に残っている母の姿は、相応の衣裳を身につけていたはずだが、いかにも、みすぼらしかった。

五歳で別れたまま胸の底に刻まれていた母の面影にまぎれもなかったが、醜さは否めなかった。

それに比し、眼前の女人たちのほとんどは武家の出である。自然にそなわった気品があり、容貌への自信をにじませていた。事実、老女といっても三十歳をこえておらず、奥女中たちは二十歳前後のようであり、いずれも美貌で、当世風の華奢なからだつきをしている。

（母上が、かわいそう）

少年の正義心は、母親を粗野で醜く見せる、他の女人の美しさへの反感となり、怒り

に変わっていったのであった。

このへんの機微を肌で感じとってきた久通と氏倫は、女性の好みに偏りをもちつづける主君吉宗を暖かい目で見守り、協力もしてきている。

そして今（享保元年）、生母の面影を宿す大柄で、美貌とはいえない吉宗の側室、おこんと、お久が、気位が高く、きらびやかさを競う女人を六百人も擁するという大奥で、引け目を覚え、心細い思いをしているのである。

吉宗は、精悍な面を曇らせ、「何たる無駄ぞ、浪費ぞ」と、おのれの私邸というべき大奥の現状へも憤慨をもらしているのだった。

しかし、江戸城に入って間もない吉宗と側近たちにとって、表も中奥も、大奥も、未だ敵地である。

三

将軍宣下の式典をおえて、地位が不動になった吉宗であるが、老中に対しても、大奥にも、多分に遠慮深く接している。

表向き、吉宗を将軍に擁立したのは、老中五人と、大奥の実力者二人であったからである。

吉宗は、時折、前将軍逝去の日の、何とも奇妙な動きを思い起こす。

正徳六年（享保元年）、四月三十日の午後であった。

「間もなく、急のお召しがございましょう。供揃え等、密かに用意万端、ととのっておりまする」

用人の有馬氏倫が、緊迫した表情で、ささやいた。

「それまで、殿には平生通り、お弓の稽古などを」

江戸赤坂の紀伊屋敷、中奥の居室である。

部屋には、登城用の装束が置かれ、すぐに着付けができるよう、納戸役が数人控えていた。

武術を愛好する吉宗は、居室に接した庭園の、岡山と呼ぶ射場へ出て、日課となっている弓の鍛錬にとりかかった。

梅雨前の蒸し暑い季節である。

「汗は、お出しになられぬよう」

これは、同じ用人、加納久通の気くばりであった。

八歳の将軍が危篤に近い病状であることは、どういう手蔓からか、江戸家老三浦為隆はじめ紀伊屋敷の主だった者たちは知っている。

今夕までに、後見職を兼ねる将軍継嗣を決めるため、御三家の当主を江戸城へ召し出す段取りであることも、探り出していた。

継嗣決定に力を有するのは、五人の老中と、家宣、家継二代の将軍に側用人として仕え、権勢無比を自他共に許す間部詮房。それに、大奥で重きをなす天英院（家宣正室）、並びに月光院（家宣側室）とされている。

天英院は子を夭逝させているが、摂家筆頭で前の関白太政大臣近衛基熙の姫である。基熙は京都で健在であった。

月光院は側室だったとはいえ、現将軍家継の生母である。ただし、江戸浅草の僧侶の娘とも町医者の子とも伝わり、素性はさだかではない。

地位は天英院のほうが上である。一方、月光院は間部詮房と結んでおり、家継から父親のように慕われているという噂さえひろがっていた。天英院は大奥で孤立しているようである。

老中は、飾り物同様で、無気力をつづけていた。結局、間部詮房と月光院が最も強い発言権をもっていることになる。そして、両人の胸中が、文昭院（家宣）の御遺志であった尾張家と、推量するのが大方の見方であった。

加えて、尾張継友は二十五歳と若く、優男であり、意のままに動かしやすい。三十三歳の吉宗は容貌魁偉、奢侈禁止と倹約で紀伊藩を改革した厳しい男として知られている。

「見込みは、無きに等しい」

吉宗は苦笑して両用人に語り、将軍継承争いを醒めた目で眺める姿勢をくずさなかった。

しかし、紀伊藩の重職たちは自信満満だったのである。

「未だ、小田原評定のようにて、方方の思惑の一致を見ず、決まりかねているようでござりまする。かくなれば、同時に緊急の登城を発し、第一番の忠を励んだ卿を後嗣に推戴するほかはあるまい、という論も出ておるようでございますれば、そのお心得に

て」

これは、朝方、氏倫が語った要旨である。

「尾張、水戸両家へ内通するやからがいるやも知れず、当方の動きを感づかれてはなりませぬ。御日課は、平生通りに」

という、久通の言上もあった。

この段になれば、吉宗は何も考えず、藩要職が立てる計策通りに動くほかはない。

汗をかかぬよう、軽く二、三本射たところで、小姓が息せき切って駆けつけ、ひざまずいた。

「御登城でございまする」

駕籠の用意と供揃えは、またたくまに完了した。

紀伊赤坂屋敷から、大手門まで十八町。

市谷御門外の尾張屋敷からは二十九町。

水戸屋敷は小石川御門外にあり、大手門まで二十一町。

距離は紀伊藩に有利である。しかも、江戸城の要路と通じ、尾張、水戸両家を出し抜いて、朝から万全の用意をととのえていたのである。

当然、第一番の登城は吉宗である。供回りの人数は、ふだんより多く、速歩だが整然粛粛たる行列で威容を示した。

四半時（三十分）ほどもたって、水戸家のやや乱れた行列が、駆け足で大手門に近づいてくる。

さらに遅れて、数騎が家名を呼ばわりながら、大手門を駆け抜けた。供揃えに手間取るのを見た継友が、焦りのあまり馬にとびのり、近臣数騎のみで疾走。家臣団が切れ切れに追うという、尾張藩の醜態は覆うべくもない。

後日、武士としての平生の心掛けの無さを笑われ、江戸家老と重職たちの油断、無能があげつらわれたものである。

三卿がそろうと、第一番の登城ということで、吉宗が最初に中奥へ招じられた。

御座之間下段に、五老中と間部詮房がそろっていた。もちろん、将軍は瀕死の病床であるから、上段之間に人影はない。御前での協議という体裁である。

老中は、土屋相模守政直、井上河内守正岑、阿部豊後守正喬、久世大和守重之、戸田山城守忠真の五人である。いずれも老体であった。

（これは……）

吉宗は、内心、驚きを禁じえなかった。

いつもであれば、大老格を自任して傲然と構えている間部詮房が、豊満な頬の肉をおとし、ひとまわり縮んでうつむいているではないか。

詮房は能役者の倅で、その美貌によって甲府城主であった家宣に召し出され、日夜を分かたず近侍したと言い伝わっている。家宣が六代将軍に就任し、江戸城に入ると、詮房は老中格の側用人にまで出世し、高崎城五万石に遇されていた。

家宣亡きあとは、幼い七代将軍家継の側を日夜離れず、学者新井白石の意見を用いながら、事実上、幕政を総べていたのである。

のみならず、前将軍の側室で家継の生母である月光院との仲が怪しまれ、大奥のありうべからざる邪淫として、心ある者の公憤をあおっていた。

月光院は三十二歳、詮房は五十一歳とはいえ、若さを充分に残し、ともに美女と美男である。

その美貌に加わる貫禄と、家継の養父気取りで権勢を誇っていた詮房が、悄然としているのだった。

一方、五人の老中は、それぞれ老顔に生気をみなぎらせ、吉宗へ好意に満ちたまなざしを向けている。

「事態は急を要しまするゆえ、率直簡明に申し上げまする」

一同を代表した形で、老中首座の土屋政直が口をひらいた。

「ここに集いまする六人、ならびに天英院さま、月光院さま、挙って、御後見には紀伊中納言（吉宗）卿こそ、と一決いたしておりまする。なにとぞ、お請けくだされ、早速、二の丸（継嗣居城）へお渡りあそばされますよう」

政直が両手をつかえると、他の五人も恭しく、ひれ伏した。早くも、将軍に向かっての礼に近い。

「しばらく」

吉宗は、慇懃に制し、暫時、思考をめぐらす。

明らかに、吉宗を将軍位につけるための、格別の力が働いている。またもや、「手は充分に打っておりまする」という、有馬氏倫のささやきが、吉宗の耳朶によみがえる。

打った手の一つは、間部詮房を無力にし、五人の老中を奮い立たせ、かつ、気位の高い大奥の、対立する二貴婦人の意向を一致させるほどの威力をもっていたのであろうか。

それとも、専横きわまる間部詮房憎しが、五老中と大奥を協力せしめたのであろうか。

それにしても、月光院と詮房は一心同体のはずである。

あるいは、将軍の死去がまぎれもないと見て五老中と天英院が結びつき、詮房・月光院一派を屈伏させることに成功したのであろうか。

だが、今は、内情をせんさくする余裕はない。

ともあれ、何者かによって、段取りは周到につけられているようである。

しかし、即座に承諾しては、後日の禍の種になるような気がする。ここは、当然、手続きを踏んでおかねばならない。

「後見職は、軽からぬお役目」

吉宗は謙虚に述べる。

「家柄からいえば、御三家筆頭の尾張殿が至当でございましょう。年輩貫禄から申せば、水戸殿が適任でございまする。御辞退するほかはありませぬ」

「その儀なれば、御斟酌無用にございまする」

老中次席の井上正岑が、にこやかに説得にのり出した。

「このたびは、先ず第一に、神祖東照宮（家康）の御血の濃さが重んじられましてございまする。すなわち、尾張継友卿は、神祖より四代目の玄孫でございまする。卿（吉宗）におかれましては、神祖より数えて三代目の曾孫におわしまする。水戸の綱条卿も

曾孫でございまするが、御三家の順位から申せば末席。ゆえに、卿を御推戴するは、理に適っておりまする次第にございまする」

正論に似て、詭弁でなくはない。なぜなら、六代将軍家宣は、尾張の吉通を後継として心に描いていたのである。今は亡き吉通は、継友の兄であるから、同じ玄孫であった。玄孫だから曾孫より継承順位が低いという理屈は成り立たない。

しかし、五老中は、紀伊優位を、あえて正当化してくれているのである。当の吉宗は、ありがたく拝聴しておくべきであった。

「加えて、御登城第一番の御忠節は、天下万民が目の当たりに拝しましたるところ。卿は、万民の待望の英主にあられまする」

これは、比較的若い久世重之の世辞であった。

「幕府の財政は、数代前よりの出費累積が重くのしかかり、破綻に瀕しておりまする」

沈痛な口調に転じたのは、土屋政直である。常陸土浦九万五千石の領主で、当年七十六歳。老いても、さすが、老中首座としての責務をなおざりにしていない。

「ここは、紀伊五十五万五千石の財政を、見事、再建なされた御手腕を、天下万民のために賜わりたく、これぞ、卿を押し戴く真意にございまする」

政直の皺顔に誠実がにじんでいた。

「方々の念入りなる御意向には、感じ入りまするが……」

冷静に応える吉宗は、なおも、謙譲の態度をくずさない。

「文昭院さまの御遺命等も、もれうけたまわっておりまするほどに、御辞退申し上げる

のが筋と存じまする」

五老中の視線が、いっせいに、うつむいたままの間部詮房へ注がれた。

吉宗の再度の固辞を予想していたと思われる、老中五人の所作である。

強い視線にうながされた詮房が、怯えを帯びた目に、残念の色を添えて平伏した。

「恐れながら、文昭院さま御遺命ならば、その正しき御趣旨を、天英院さま、ならびに月光院さまが、お伝えいたしたいと、大奥にてお待ちなされておりまする」

御遺命の正しき御趣旨とは、その真偽はさておき、吉宗後継の意に間違いないであろう。

段取りは、そこまで行き届いているのかと、吉宗は驚嘆する。

詮房の先導で、土屋政直のみが付き添い、吉宗は大奥へ向かう。

自らの地位崩壊につながる、大奥先導の詮房の足どりは乱れがちである。それを、あえてなさしめる五老中の結束と怨念のすさまじさにも、吉宗は政変の残酷さを垣間見るのであった。

平生は、めったに使用しないという、下御錠口から大奥へ導かれた。御鈴廊下を渡れば、直ぐ、御客座敷があり、すでに、天英院が出座していた。

天英院は五十六歳。落飾した頭を肩までかかる頭巾で包み、頭巾の色目は禁色と称する紫であった。近衛家の出自である天英院は、従一位に叙せられており、一位さまと敬われている。

「お呼び立て、申しわけございませぬ」

気品に満ちた瓜実顔の、ほのかに老いを刻む目のあたりに、親しげな笑みがただよっていた。

「こなたより、表へは参られませぬゆえ」

意外に、諧謔を含む、気さくな物言いである。

吉宗は、儀礼の挨拶を交わしたあとも、前将軍の正室への敬意を表し、両手をつかえたままであった。

天英院は形を改め、重重しい語調となる。

「文昭院さまの御遺志は、尾張吉通卿に万が一あるときは、紀伊吉宗卿、でございました。吉通卿亡き今、そなたが御大政を摂したまわねばなりませぬ。まずは、将軍家お見舞いの上、二の丸へお入りなされまするよう」

言い終えると、返答の間を与えず、天英院は上臈年寄の介添えで座を立ち、静静と退室した。

吉宗が振り向くと、御客座敷後方の入側で控えていた土屋政直と間部詮房が一礼し、表御殿へ戻る気配である。

吉宗は一人、大奥に取り残されたのであった。

やがて、老女が二人現われ、有無を言わせぬ厳かな物腰で、吉宗の先に立つ。

迷路のような廊下を何度も曲がり、薬臭がただよう小座敷へ招じられた。

「上様、お睡眠なれば」

という、部屋付きの老女のささやきである。

幼い将軍が、熟睡しているのか、すでに息を止めているのか、さだかではない。

吉宗は、次の間から御簾越しに寝所を拝しただけで、別室に案内された。

部屋には、月光院が低頭して待っていた。

月光院は三十二歳。豊満な肢体が衣裳の上からうかがえる。やはり、家宣逝去にともない落飾しているが、頭巾の色は純白であった。その、清楚であるべき色目が、かえって、なまめかしく感じられるのは、絶世の美女と謳われた名残であろうか。

「お見舞い、かたじけなく存じまする」

と述べて面を上げた月光院は、黒目勝ちの大きな瞳をみはって、吉宗を直視してくる。おのれの容貌と艶美への自信が身についている女性の、大胆な振舞いといわねばならない。

吉宗は、冷ややかなまなざしで、無言のまま返礼を送ったのみである。

このような者を、吉宗は最も嫌悪する。母や側室たちに辛い思いをさせてきたのは、この種の、美貌と地位を鼻に掛けた、驕慢な女たちであった。

それに、将軍であるわが子が、明日をも知れぬ重病の床についている時下ではないか。眼前の月光院には、愁傷の影さえ認められず、吉宗へ媚を売っている。

そういえば、大奥全体が浮き立っている。次期将軍に擬せられている偉丈夫を迎えて、早くも歓心を買おうとする雰囲気が、明らかに高まっていた。

死にかけている、あるいは死んでしまった将軍を顧みる者はいない、とさえ見受けられ、吉宗は、ここでも政変の非情を覚えずにはいられない。

吉宗の沈黙を、緊張のあまりと勘違いしたのであろうか、月光院は、励ますような、馴れ馴れしいまでの笑みをうかべて、

「文昭院さま御遺命でございますれば、なにとぞ、なにとぞ、御後見のこと、よろしゅう、お頼み申し上げまする」

おのれ一人が遺命を伝えるかのごとき口振りであった。

わが子の死後も、大奥での地位と権威を、吉宗を通じて保ちつづけようとする懸命の思惑があらわである。

吉宗は、武骨を装って無言を守り、恭しく一礼して座を立った。

その夜、二の丸へ入って間もない吉宗のもとに、家継の逝去が知らされ、翌朝、老中より、

「今日より、吉宗卿を上様と称し奉る」

と、公示されたのであった。

四

あわただしく将軍宣下の年が暮れて、享保二年（一七一七）の新春を迎えた。

有章院（家継）の喪中とはいえ、新将軍初の正月であり、江戸城本丸において拝賀式典が盛大に執行された。

元日は、老中戸田山城守忠真の先導で、緋の直垂に身を固めた吉宗は白書院に出る。

御三家をはじめ、加賀百万石の前田家、越前松平家等、外様の大大名ならびに親藩・譜代の重鎮の年賀を受けるのである。

宗家を相続した当初は、敗退した尾張家の継友と水戸家の綱条との対面が心苦しかった。とりわけ、不幸不運が重なった尾張家からの報復を懐疑し、食事の毒味などを念入りにさせたものであった。

それらの憂いも、今は昔である。

将軍の権力は絶大であった。御三家は将軍家一門であるが、それでも将軍とは天と地のひらきがあるといっても過言ではない。

元日拝賀も、継友、綱条ともに、下段之間で恐懼平伏し、祝意を表すのみである。

次いで、吉宗は大広間に出座、下段之間や入側にひしめく譜代・外様の諸大名、高家、大身旗本、番頭、奉行等、要職の士の拝賀にうなずく。さらに、祐筆、儒官、小姓組頭、新番組頭等が威儀を正して待つ黒書院へ移らねばならない。

二日は、まず、白書院で御三家の嫡子の賀儀を受け、大広間へ渡って国主、准国主、喜連川等、別格大名の拝賀謁見をなす。それが終ると、白書院次之間で平伏して待つ代官、医師、連歌師等の前に姿を見せねばならない。

三日は、無官の大名や旗本、町年寄、金座・銀座役人、御用達商人等を、それぞれ定められた座敷において、簾越しに拝賀平伏を受けるのである。

三箇日の間に、日本中の主だった者がほとんど全員、吉宗の前にひれ伏したのであった。

（将軍とは、かくも、権力を一人占めにするものかな）

わき出る快感を、しかし、吉宗は冷静に抑える。

（有頂天になってはならぬ）

思いもかけぬ幸運の重なりと、老中や大奥の思惑によって、おのれは紀伊家の末子から将軍位にまで昇りつめたのである。否、祭り上げられたといってもよいであろう。

それゆえ、当分、謙虚をつづけ、擁立の臣たちに礼をつくし、意を察して動くほかはあるまい。

（しかし、いつまでも傀儡ではないぞ）

正月拝賀を機に、吉宗の胸中深く、ふつふつと将軍親政への意欲がわいてきたのであった。

紀伊藩の財政を立て直し、善政を敷いた実績も、強い自信となってよみがえる。

そうであっても、吉宗は、外面はにこやかに、老中に対しても、大奥の実力者たちへも、適度の遠慮をもって接しつづけた。

外柔内剛の策にほかならない。

七種の節（一月七日）がすぎて、正月気分も静まりつつある一夕、吉宗は休息之間下段で老中五人と向かい合って会食をし、その後、雑談に興じた。

吉宗は、ふと思いついた風情で、語りかける。

「おのおの方に、尋ねたき儀がある。われはまだ、江戸城と幕府役職について、知らざ

ることが多い。それゆえ、教えてもらいたい」

にこやかな物言いであった。

「なんなりと仰せられませ」

首座の土屋政直は、自尊心をくすぐられた笑顔である。

「それでは、そなたに」

「ははっ」

「神君が幕府を創設なされて、今年で何年になるであろうか」

政直は、半眼になって、暫時、勘定をしているようであったが、大きくうなずいて答えた。

「幕府創設は、慶長八年癸卯と心得ますれば、今年で、百十四年になるかと存じまする」

吉宗があらかじめ調べたことと一致する。さすが宰相である。

「ほう、百十四年にもなるか。これからも、ますます繁栄させていかねばならぬのう」

「御意にございまする」

「大老は、非常時臨時の職と聞くが、これまで何人、つとめたであろうか」

「申し上げまする。この百十四年間に、土井大炊頭殿、酒井讃岐守殿、酒井雅楽守殿、堀田筑前守殿、井伊掃部頭殿の、わずか五人にて、掃部頭殿は再任でございました」

「ほほう、よく、すらすら言えるものよ。あっぱれである」

政直は面目をほどこしたが、あと一問、

「江戸城天守閣は、明暦三年、丁酉の大火で焼失したままであるが、土台から上、楼閣の高さはどれほどであったのであろう」

これに詰まった。

政直は苦悶の面持ちである。

「はて、その高さは……」

「まだ、生まれていなかったかな」

「恐れ入りまする。丁酉の大火は、それがし、十七歳のみぎりにて、瞼に五層の雄姿はくっきり残っておりまする。最上階の屋根には、背丈が一丈（約三メートル）と称されまする巨大な金の鯱が輝いておりましてございまする。その光で、品川沖の魚が目を回す、という噂がひろがったのを覚えておりまする。なれど……楼閣の高さとなりますれば……」

「苦しゅうない。ただ、聞いてみただけじゃ。それにしても、鯱の輝きで海の魚が目を回すとはのう」

吉宗は笑いながら、

「御苦労である」

と、七十六歳になった長老をいたわり、目を井上正岑へ向けた。

「ははっ」

正岑は早くも緊張している。

「そなた、老中を何年つとめておる」

「恐れながら、十二年目に相成りまする」
「それでは、一年の年貢収納高は存じておるな」
「はっ、はは、はっ」
みるみる六十五歳になる正岑の顔面が赤くなり、すぐに色を失う。
「申しわけございませぬ。すぐに調べまして……」
あわてて座を立とうとする。
「それにはおよばぬ。これも、座興じゃ」
吉宗は、少しも気にしていない、春風駘蕩たる表情である。
「ここで止めては、不公平になるゆえ、一問ずつ、尋ねる」
残りの三人は、戦戦恐恐であった。
「山城守」
「はーっ」
六十七歳という戸田山城守忠真が、間のびをした返事をする。歯が悪いのか、老いのせいか、なまあくびを嚙み殺すがごとく口をもごもご動かす癖がある。
「幕府の戦力である、旗本・御家人の総数は、何人であるか」
「ははあ、旗本・御家人の数でございまするか」
しばし、口をもごもご動かし、
「はて、さて、はて、弱りましてございまする」
「俗に、旗本八万騎と称するが、扶持米の支出から算計しても、それほど養えるとは思

われぬ。実数は何人であろうのう」

吉宗は一座を見渡すが、誰もが顔をうつむけてしまう。

概算で、旗本五千数百、御家人が一万七千余、計二万数千の幕臣、と下調べはついているが、吉宗はそ知らぬ顔を通した。

この二万数千人に戦時軍役の家臣（侍、槍持ち等）を加えると、優に八万騎を越える軍団になる……といった返答を期待したのだが、今の老中には無理のようである。

見渡した吉宗の視線が戻ると、忠真はびくっとからだを震わせ、

「恐れ入りましてございまする。早速、調べまして」

立ち上がろうとするが、足がしびれていたのか、つんのめってしまう。

「山城守、無用ぞ。徳川の戦力を知らざるは天下泰平の証。めでたいことである。それでは、豊後守」

「はっ」

阿部豊後守正喬の声は悲鳴に近い。五老中のうちで最も若い四十六歳である。

「そなたの所領は、武蔵忍城十二万四千石であったな」

「御意にございまする」

「十二万四千石の正規の軍役は、鉄砲何挺であるぞ」

正喬の数代前は、松平伊豆守信綱とともに三代将軍家光の左右の腕と称された、阿部豊後守忠秋である。名門であった。

その、いかにも大名らしい、おっとりとした正喬の顔面がひきつり、突然、ひれ伏し

た。

「申しわけございませぬ。それがし、不明を恥じ入りまする」

血を吐くような声で、今にも切腹をしそうな形相である。

「これ、これ、よもやま話のついでであるぞ。知らざるは、これも天下安泰の徴。めでたいことではないか。気にするでない」

軽く言い、最後の一人に目を向ける。

五十八歳の久世重之は、観念したような笑顔で頭を下げ、

「上様、お手やわらかに」

先手を打つ。

吉宗も笑い、

「これは、むずかしいぞ。わからずとも、致し方あるまい。江戸城全域の櫓の数じゃ。どうだ、わかるか」

わざとおどけて、詰問する。

「城門の数は三十二、これは存じております。各城門には渡櫓があり、多門櫓があり、本丸のみならず二の丸、三の丸、西の丸にも隅櫓をはじめ、大小の櫓がございますれば、無数、と申し上げるほかはござなく、江戸城は万全の備えにございまする」

重之は、諧謔をもって、はぐらかしてしまった。

これで座が和み、散会となったのである。

（これで、よし）

吉宗は、五老中がほうほうの態で退出すると、目に精気をみなぎらせた。

老中たちは、おのれの無知無能、怠慢を思い知ったはずである。

（じょじょに力を殺ぐ）

頭を上がらなくし、政事の実権を奪い、将軍直裁へもってゆく、これが吉宗の深慮遠謀であった。

大奥対策も、吉宗は抜かりなく進めた。

どのような内内の経緯が秘められているのか、誰がどのような手を打ったのか、有馬氏倫、加納久通の両人は、

「何もございませぬ。時の流れ、時勢が、さらに申せば、天命が、上様を上様ならしめたのでございまする」

と、その機微に触れようとしないが、明らかに文昭院御遺言を曲げて紀伊の吉宗を将軍後継に推した天英院と月光院を、徒や疎かにできない。

天英院は、皇族とも血のつながりが深い、近衛家の出である。吉宗の亡き正室真の宮理子が伏見宮家からの降嫁であることで、格別の親しみを抱いているようであった。

「京の父（近衛基熙）が将軍位御継承のことを、たいそう、よろこんでおりまする」

過日、御機嫌伺いに天英院と面談した折り、白磁を思わせる頬をほころばせて、そのように語ったものである。

月光院は、先代将軍の生母として、表向き、大奥で尊重されていた。しかし、月光院

には二つの大きな落度があり、権威の失墜は覆うべくもない。

一つは、三年前の正徳四年（一七一四）の春、月光院付きの年寄絵島が流罪になった不祥事である。

月光院の代参で、将軍家菩提所である芝の増上寺へ参詣した絵島は、その帰路、木挽町の芝居小屋へ立ち寄り、美男で評判の役者生島新五郎をまじえて乱痴気騒ぎをおこない、大奥の門限に間に合わなかった。

月光院と間部詮房の力をもってしても、事件をもみ消すことはできず、絵島とその縁者や供をした奥女中たち、生島新五郎ら芝居小屋関係者、取り持った御用達商人等、千数百人が重罪に処せられたのである。

事件を、あえて大きくしたのは、月光院・間部詮房一派の増長を憎む五老中の陰謀であり、絵島らは政争に利用された……という風説を、吉宗は当時、薬込役（紀伊藩隠密）を通じて仕入れていた。

その政争は、吉宗擁立の下地になっているという見方もあるようだが、そこまで考えるのは吉宗自身、不愉快である。

今一つの月光院の落度は、間部詮房との醜聞である。醜聞の真偽は、誰もが、突き止めていない。

月光院のすさまじさは、後継将軍が吉宗に決まりそうになると、尾張家推戴で同心していた詮房を冷然と切り捨てたことである。

詮房とその参謀ともいうべき新井白石は、ともに職を解かれたが、月光院は何ら救助

の手をさしのべていない。むしろ、詮房一派の失脚を促進する側にまわったのであった。

その後、月光院は、さまざまな口実をもうけて、吉宗を大奥の、おのれの居住棟の客室へ招こうとする。あるいは、召使う美貌の女中を側室に差し出そうと、あの手この手を弄している。

吉宗は、外柔内剛の策で、大奥の何人にもにこやかに振舞っているが、月光院の居住棟は鬼門として近づくのを避けた。

もともと、江戸城育ちではない吉宗にとって、大奥はおのれの私邸とはいえ、居心地のよい場所ではない。魑魅魍魎の棲処かにも映る。

何をしておるのか、女どもが六百人も住まっている大奥を、

「何たる無駄ぞ、浪費ぞ」

と、憤慨したのは、宗家を継いで間もないころ、しぶる年寄に案内させて大奥の全貌を知ったときである。

絢爛を競うがごとき女だけの巨大な殿舎で、紀伊江戸屋敷から移ってきた、土地訛が抜けず、素朴で醜女に近い、おこん、お久という二人の側室が、それぞれの居住棟で多くの美しい女中にかしずかれ、肩身の狭い思いをしている、そのことへの吉宗の、内心の怒りもあった。

大奥の改革は、吉宗の懸案である。

しかし、古来、大奥は伏魔殿とも称される。扱いようによっては、事実、魑魅魍魎がとび出し、収拾がつかない混乱を巻き起こすという。

無用の騒動を避けるのが上策である。

それゆえ、吉宗は節倹を第一の施策に掲げながら、大奥の主ともいうべき天英院と月光院には贈物を欠かさず、何一つ不自由のないよう心遣いをしている。もちろん、天英院と月光院では、多少の差をつける、きめ細かい配慮も怠っていない。

天英院に対しては、親元である京の近衛家にも、折折に金品の寄贈をおこなっている。だが、大奥の従来の勢力も、老中同様、じょじょに殺ぎたかった。

五老中に、それとなく一撃をくらわせた数日後、吉宗は有馬氏倫、加納久通の両腹心を休息之間に呼び、密談に及んだものである。

ややあって、氏倫は、赤銅色の厳めしい面をわずかにゆるませただけであるが、久通が声を出して笑った。

「そのお役目は、わたくしめということになりましょうな」

余人の耳目のないときは、くだけた物言いにもなる。

「うまくやってくれよ」

吉宗のまなざしにも、悪戯心が宿っていた。

天英院と月光院へ贈物を呈したり、大奥への通達には、主として氏倫か久通が使者となって大奥へ渡った。

重重しさを要する場合は氏倫が、軽い用件は久通の分担である。

その日、大奥へ出向いた久通は、使者対面所において、月番の年寄（老女）二人へ、意味ありげな微笑をうかべて次のように伝えた。

「上様、内内の思し召しでございまするが、大奥に住まう女性のうち、身分上下にかかわらず、見目容貌うるわしき者を選んで、名を書き出し、差し出すように、との仰せでございまする。なにとぞ、よきに計らいくださいまするよう」

老女は、顔を見合わせ、たちまち目に競い心をにじませた。

七人いる年寄には、それぞれ派閥があった。

天英院、月光院にそれぞれ長く仕えている年寄がいる。おこん、お久に新たに付いた年寄もいる。各年寄には愛顧の中年寄、御客会釈、御中臈、御坊主、御小姓、表使、御次……といった下役奥女中が末広がりになっており、系列の女中が将軍のお手がついて側室になり、さらには御部屋様（男子を産む）、御腹様（女子を産む）になれば、老女の羽振りは全くちがってくる。

当然、「上様、内内の思し召し」とあれば、競い心がむき出しになろうというものである。

「あの、書き出しは、何人、とは限らないのでございましょうか」

一人が、あれこれの容姿を思いうかべるかのごとく、気負って訊ねる。

「さよう。若く、美しき女性は、もれなく、という仰せでござった」

久通は、にこにこ顔で答えた。

翌日、書面が提出された。

久通は、うれしげに中奥へ持ち帰り、吉宗へ渡す。

吉宗は披見し、

「……ざっと、五十余人。これを多しと見るか、少なしとするか……」

つぶやき、

「かねてのごとく、事を運ぶべし」

と、指示した。

久通は大奥へ引き返す。

月番年寄二人は、御目見の方法等、次の段取りへの期待で目を輝かせている。

「上様の御諚を伝えまする。書き出したる五十余人、残らず暇をとらせるゆえ、実家へ戻り、親はらからの心のままに、嫁がせよ、との仰せ。ありがたく、お受けするように」

久通は、さらりと言ってのけた。

老女二人は、愕然とした面持ちで、しばし、久通を見つめるばかりである。

「そ、それは、いかなる理由でございましょうや」

一人が怨ずる口調で問う。

「これも、上様の御慈愛深き思し召しでござる。すなわち、見目容貌よろしからずの者は、心やさしきにもかかわらず、嫁入りにも難渋し、生計の苦労もなしとしない。ゆえに、今後も末永く大奥にて勤めるがよい。美貌の者は、書き出し以外にても、この際、本人の気持次第にて暇をとらせるゆえ、名乗り出るように、との御諚もござった。申し添えておく」

追加の書き出しはなく、先の五十余人は、残留の嘆願も空しく、泣く泣く江戸城を去

っていった。

同時に、書き出しを競った年寄七人の信用、権威は失墜し、最も多くを書き出した月光院派は勢力を激減させてしまったのである。

吉宗の大奥改革の緒における奇策は、大成功であった。

第三章　大岡越前守

一

享保二年（一七一七）一月下旬。将軍吉宗は、十三年間在職し、六十九歳という老齢になったことで辞任を願い出ていた南町奉行松野壱岐守助義の、後任を決める必要に迫られた。

京都、大坂といった管轄の地名を冠せずに、単に町奉行と称して重んじられる江戸の町奉行は役方（文官）旗本の最高位である。

天下の総城下町と呼ばれる江戸府内の、武家地、寺社地をのぞいた民政のすべてをとり扱うのである。加えて、寺社奉行（大名職）、勘定奉行（旗本職）とともに三奉行と称され、幕府の最高議会である評定所に参与することから、老中（大名職）、若年寄（大名職）に次ぐ重職であった。

町奉行は、幕府の職制がほぼ固まった寛永八年（一六三一）から定員二名の月番交代が定着していたが、元禄十四年（一七〇一）に中町奉行所が置かれ、三名になって今日に至っている。

しかし、吉宗の冗費節約方針により、中町奉行所を廃し、元の二奉行制に戻すことになっていた。

中町奉行坪内能登守定鑑も六十九歳である。南町奉行への横すべりは考えられない。北町奉行の中山出雲守時春は、六十六歳であるが、在職三年目である。当分、勤めさせるとして、相役の南町奉行は、吉宗の最初の大きな人事として、納得できる人物を据えたかった。

「数人、推挙せよ」

と、老中に命じ、提出された名簿の一人一人について、吉宗は紀伊藩系の広敷伊賀者（幕臣に編入した薬込役、のちの御庭番）を用いて身元調査をさせていた。その報告をもとに、候補を一人にしぼり込んでいたのであるが、

「大岡忠相、という名に覚えはないか」

と、有馬氏倫、加納久通の両人に問うてみた。

「忘れられるものではございませぬ」

直ぐに氏倫が、ことさら、渋い顔をつくって答えた。

久通のほうは、好意ある笑顔で、

「山田奉行を勤めておりましたる旗本でございまするな。また何か、事を起こしたのでございまするか」

興をかきたてられたように、身をのり出す。

「早まるな。大岡忠相は、今は普請奉行じゃ」

吉宗は苦笑をもらした。

吉宗と氏倫、久通両人が、家禄千九百二十石の一幕臣の名を知っていることについては理由がある。

紀伊藩時代に、痛い目に合っているからであった。

山田奉行は、伊勢国の山田の地で、伊勢神宮の警備と遷宮祭祀をつかさどり、併せて、周辺の幕府領（天領）を支配、さらに海上交通の要衝である直轄地、志摩の鳥羽港を管理する幕府の遠国奉行である。

ところが、伊勢国のうち、松坂領六万石が紀伊藩の飛び地になっており、山田奉行支配の天領と隣接していた。

境界や水利権などをめぐる、農民同士のいざこざは少なくない。

訴訟は、概して、地元の松坂領側に非があった。だが、歴代の山田奉行は、御三家との紛争を好まず、詮議を引き延ばして任期切れを待つのが常であった。

大岡忠相は、山田奉行所に着任すると、滞っている難件を避けず、一つ一つ理非曲直を糺して、できるだけ和解へもちこんだ。それでも治まりのつかない他領がかかわる訴訟事は、定法に従って双方の口書を江戸の評定所へ送り、裁決を仰ぐ。

その能吏ぶりは際立っており、しかも、一切の情実を排し、賄賂のたぐいは断固として受けないのである。

忠相の詮議の進めように不利を覚った松坂領の農民が、藩主吉宗へ救援を嘆願したことがあった。

秣場をふくむ境界争いの一つである。秣場は、労働力として飼育している牛や馬の飼料のための、共同草刈り場であり、草木を肥料や薪にする大事な原野であった。水利権とともに、いざこざが絶えない。

その境界線は、氏倫、久通の所領と多少のかかわりがあった。紀伊藩士として、氏倫は千三百石、久通は千石の、それぞれの所領を松坂領内に与えられていたからである。忠臣の領地にも及ぶ天領との争いであるから、吉宗は剛毅果敢な質の氏倫を伊勢へ派遣し、解決を有利に導かせようとした。

ところが、氏倫は、当時三十六歳であった新任奉行の大岡忠相に理路整然と、松坂領側の詭弁と長年の横暴を立証され、ぐうの音も出なかったのである。

あまつさえ、

「不服とあれば、江戸の評定所へ事の次第を送らねばなりませぬ。不正は明白なれば、御三家のお家に傷がつくやも知れず、ここは内内にお裁きなされるがよろしかろう」

と、ねんごろに諭され、氏倫は吉宗に進言して、悪徳領民の代表三人を処刑するのやむなきに至ったのであった。

たしかに、忘れられるものではない過去である。

「その大岡忠相が、いかがなされましたか」

久通は、何かあるとにらんで、興を捨てていない。

「町奉行更迭の件であるが……」

吉宗が言いかけると、飲み込みの早い久通がふたたび身をのり出したが、かろうじて

声を呑む。

側用人等寵臣の政事介入の弊害を排し、老中尊重を明言している吉宗は、気心の知れた氏倫、久通であっても、諮問したとき以外の施策、人事への差し出口を禁じていた。

「どうであろう、忠相を南町奉行に抜擢する案は」

久通を無視し、吉宗は、直接痛い目に合った氏倫に諮問したのである。

「恐れながら……」

氏倫は重重しく口をひらく。

「うむ」

吉宗は、かすかに、緊張の色をみせた。

「町奉行は、江戸町地の最高権力者というのに留まらず、評定所において重きをなす幕府の要職にございまする。さらには、上様、最初の大きな任免にございますれば、世の注目を浴び、御新政の真価が問われまする」

「その通りである」

「よほどの人物を据えずば、向後、政事御改革の舵取りがむずかしくなりましょう」

「いかにも」

「それゆえ」

「うむ」

「恐れながら」

「早く申せ」

「上様には、よき人物にお目をつけあそばされました。大岡忠相、御新政の町奉行に、これ以上の男はございますまい。ぴったりでございまする」

虚心坦懐に言い放ち、笑みをうかべた。

「そうか」

吉宗は満足げにうなずいたが、

「しかし、老中の推挙書き出しには、大岡忠相の名は末尾に、付け加えられた形で記されておってのう」

当惑顔である。

「聞けば、忠相は人物であるが、若すぎる。町奉行は、役方旗本の最高位であれば、六十歳に近い老練の士を登用する慣習があるとのこと。忠相は、四十一歳。それに、普請奉行からの町奉行抜擢は前歴がない。京都町奉行、大坂町奉行、勘定奉行といった要職を歴任して、昇りつめる役職だそうである。将来、引き上げるべき人物として、心覚えのため、書き加えた、という申し条であった。これを、何と思うぞ」

今度は、久通への問いである。

「年齢、経歴にこだわる必要は、全くない、と存じ上げまする。人物本位、これこそ、恐れながら、御新政の根本でなくてはなりませぬ」

確信に満ちた、なめらかなる久通の言上であった。

「じつは、わたくしめ、幕臣に直り、永田町に屋敷を拝領いたしまするとき、掛奉行でありまする大岡忠相と懇談することがございました」

普請奉行は、城郭の石垣、堀、橋等の普請にあたるとともに、府内の上水道、武家屋敷を管理し、任免に応じた屋敷替え、屋敷の修築なども職掌である。

「江戸は火事が多うございまする。一度、火が出ますれば、武家屋敷、町地の別なく、灰燼に帰し、人命はもとより、財産等の損失は計り知れませぬ。このことを、特に憂慮し、対策の急を力説しておりました。しかれども、普請奉行は、事後の再建復興にあたるのみにして、防火の対策にかかわることができぬのが残念、などと、もらしておりました。語り合ううちに、清廉、公正、果敢の気性がひしひしと感じられ、山田奉行時代の実績と相まって、わたくしめ、密かに惚れ込んでおりましたる次第でございまする。町奉行は、評定所一座兼任でございますれば、防火対策をはじめ、あの男ならば、御新政推進の一翼を充分に担うでありましょう」

「男が惚れるほどの男であれば、間違いなかろう。それにしても、久通」

「はっ」

「そちは、年を取るにつれて、氏倫とは逆に、ますます、雄弁多弁になるのう」

「あっ、これは、恐れ入りたてまつりまする。以後、気をつけることにいたしまする」

身を縮める久通へ、

「いや、いや、感心しておるのじゃ。われは口下手ゆえ、老中や諸大名などと会って、語り合うのが苦痛である。鬼だいだい、と称されるほどの面貌のせいであろうか、相手が初めから怯えを抱くかに見ゆるのも、困りものじゃ」

どこか淋しげな吉宗の述懐であった。

二

大岡忠相の町奉行任命は、二月三日（享保二年）であった。同時に、これまでの能登守から越前守に改めるよう沙汰があり、ここに、南町奉行大岡越前守忠相が誕生したのである。

老中首座土屋相模守政直に伴われて、中奥の御座之間に召し出された大岡忠相は、近ごろの武士としては大柄のほうであった。

意志の強さをあらわすように鰓が張った、引きしまった面貌である。それでいて、衒気は感じられず、誠実が全身にあふれ出ていた。介添えの土屋政直の老軀と並べば、親子どころか孫ほどにも若若しく、進取の気象もにじみ出ている。

吉宗は、一見して、満足の笑みをもらした。

「大岡越前に、町奉行を命じる」

自ずと、さわやかな声になっているのを、吉宗は覚える。

忠相は座につくと、平伏したままであった。

「面を上げよ」

声をかけると、忠相は両手をつかえたまま、素直に半身を起こす。

吉宗と視線を合わせても、忠相の面に怯えの色はあらわれず、目は澄んでいた。

「町奉行は、民政の根本である。そのほうの、清廉、公正、果敢の気性を賞で、期する

ところ大である」

「はーっ」

決意を新たにするかのごとく力強い声を発し、感激の面持ちで平伏する間に、吉宗は座を立った。

大岡忠相は期待通りの働きをはじめた。

幕府の役人は、老中、若年寄をはじめとして、前例を誤りなく踏襲するのを良吏と心得、事なかれに徹している。

吉宗は、幕政に活力をよみがえらせるためには、この因習を打破せねばならぬと考え、老中を通じ、幕臣一統に、

「政事、職務について改革の意見があれば、忌憚なく上申書に記し、提出せよ」

と、達示させていた。

ただし、将軍への直訴は禁じた。秩序を守るためである。

「献策、訴願のたぐいも、頭、支配、奉行など、それぞれの上役を通じ、老中に上申するのを定法とする。上役は下役からの上申をにぎりつぶしてはならぬ。上役に不正、非道があるときは、目付衆に訴えよ」

という訓令も同時に発していた。

老中には、

「上申のたぐいは、いかなる内容であっても、意見を付し、提出せよ。将軍と老中は、

政事に関しては一心同体ゆえ、要件あれば、朝を待たず、深夜であっても斟酌なく、申し出るよう」

と、指示している。

しかし、上下とも依然、事なかれをつづけ、政道に関する意見も訴願さえも提出されない。

「長年の泰平に慣れ、あるいは家禄俸禄に安住して、頭の働きが鈍り切っておるのか。それとも、率直なる意見具申を阻む、われの知らぬ悪しき仕組みがあるのであろうか」

吉宗は悩みを、腹心の氏倫、久通両人にもらし、

「いっそ、老中を一新するか。どうじゃ」

いらだちをあらわにして諮問すると、

「短慮はなりませぬ」

打てば響く、氏倫の諫言である。

「今の老中が、上様擁立の功臣であることを、お忘れなく。五人の老朽、無能は、憚りながら、否めぬにしましても、罷免すれば、本人たちは申すまでもなく、譜代大名衆の反感を買いましょう。また、動揺は、幕臣の端端まで及び、紀伊家出身の者が幕政の牛耳を執るのではないかという、無用の猜疑がひろがりましょう。蟻の一穴、堤を崩す、ということわざもございまする。老中は、遠からず、順次、老病によって辞任のやむなきに至りましょう。時機をお待ちあそばされ、それまでに、財政再建をはじめとします御改革の柱となりうる人傑を見定めなされ、老中を新しくなさればよろしいかと存じ

上げまする」

めずらしく、氏倫の長弁舌であった。氏倫の言は、辛辣、直截である。

「さようでございまする。大船は、向きを変えるのに、手間取りまする。天下のお舵取りは、慎重、悠揚が肝心かと」

笑顔で、久通が言い添える。

吉宗は、側近の政事への差し出口は排するが、諫言は快く受け入れた。少なくとも、不快の色を面にあらわすことを自戒して、聞く耳をもつよう努力しているようであった。

このように幕政の沈滞がつづくなかでの、大岡忠相の町奉行抜擢であったのだが、

「あれは、上申魔、献策狂というものではあるまいか」

吉宗が戯れ言で、うれしい悲鳴を上げたほど、忠相からの上申書が相次いだのである。早速、防火対策についての献策である。

もちろん、老中を通じての書面提出であった。

重要案件は、首座あるいは月番老中が参上して、直接、将軍と協議する。定例の決裁書類や下役からの上申書のたぐいは、側役（御側衆）が取り次ぐ。

譜代幕臣系三人に紀伊藩系二人で成る側役を、吉宗は区別せずに用いてきた。だが、やはり、幼時から知る氏倫、久通の二人を重用してしまう。他の三人は、家柄も人柄も申し分ないのだが、将軍への遠慮が多く、もどかしさを覚えるのである。諮問しても、形式張るばかりで、要領を得ない。

上申を奨励した後は、側役のうち氏倫、久通を正式に御用取次とし、老中御用部屋と

の間の連絡を密にして、事をはかどらせるほかはなかった。

大岡忠相が献策した防火対策の骨子は、町地の不燃化と町火消制度の創設である。

不燃化計画の内容は、火除地の思い切った増設、拡大と、草葺き板葺きが主の町屋に漆喰塗りや瓦屋根、土蔵造りを奨励することであった。その実際案が詳細に述べられてあった。

町火消制度創設の件は、江戸城下消防の欠陥を突いている。

これまでは、幕府直属の、旗本が指揮する定火消、大名が数家ずつ方角別に受けもっている方角火消、同じく大名役の寛永寺や浅草米蔵等所所に点在する幕府重要施設の消火にあたる所所火消で、町人は全く関与できないでいた。

忠相が綴る献言の主旨は、家屋が入り組んだ町地を、そこに居住する町人たちで守らせたい、というものである。

「町人火消については、理の当然と思えるが、歴代の町奉行は、かかる提言をしなかったのであろうか」

吉宗は首をかしげる。

「御下問があるかと存じ、老中の意見を徴するとともに、定火消役にも町人火消創設について、賛否を問うてまいりました」

取り次いだ久通は、抜かりは無い。

「諸人の意見をまとめまするとと、火事は江戸の華などと、半ば捨てばちに言われる通り、大火は絶えませぬ。多くは町地からの出火にて、その町地を町人自身で守るための町火

消創設は、町人からの請願もあり、誰もが必要を痛感しておるようでございまする」
「それが、なにゆえ、今日まで実現しなかったのじゃ」
「それがその、江戸は将軍家のお膝元でございまするがゆえに、武家の総本山でございまする。何事も、武士が統率する伝統がございまする由。つまりは、町人どもの手出しを無用、とする意気地でございまするな」
「意気地は尊しとするも、それでも火事が頻発するに及んでは、武家、武家と威張ってもおられまい」
吉宗は火事に無関心ではいられなかった。
紀伊藩時代においても、和歌山城下の大火や江戸屋敷の度重なる焼失が、どれほど藩財政を圧迫したか、身にしみている。
この年（享保二年）、一月二十二日にも大火があった。小石川馬場から発した火が、強風に煽られて神田川を越え、大手門前の大名屋敷まで飛び火し、評定所が炎上したのである。
黒煙が空に渦巻き、火の粉が本丸に降ってきた。
吉宗は素早く火事装束を着用し、中奥御殿の大戸をはずさせ、それを梯子代わりに屋根へ登り、仁王立ちになって火の手を見きわめたほどである。
「将軍家のお振舞いとしては、前代未聞」
と、老中以下、驚嘆したものであった。
久通の報告はつづいている。

「老中各位は、町人が町内ごとに火消組をつくることは、徒党を組む基になりかねず、これが悪用されれば由由しき事態を招来するやも知れず、との危惧を抱いておりまする。また、火事場での武家火消と町人火消との喧嘩口論も予想されるゆえに、町火消創設には慎重を要す、との意見もございました」

「なるほど、それらにも一理あるのう」

吉宗は、眉間にしわを寄せて、しばし考え込む。

「さりとて、越前の献言を捨て置けば、向後、何を上申しても空しい、という風潮が生まれるであろう」

久通は、口出しを、ぐっと自制している。

吉宗が結論を出すのを、辛抱強く待つ姿勢をとっていた。

「改革を恐れてはならぬ」

やがて、吉宗は、おのれに言い聞かせる。

「やはり、許可すべきじゃ」

決意を固めたように、吉宗は強い語調で言い切った。

「老中に伝えよ」

「はっ」

「町地の不燃化計画と町人火消は、必要なる事柄ゆえ、旧陋にとらわれず、杞憂を捨てて推し進めよ。ただし、拙速はならぬ。慎重に、と、このように大岡越前へ指示するよう、伝えよ」

「うけたまわりましてございまする」
久通は、即、座を立ち、老中御用部屋へ向かう。

大岡忠相が、武家火消組との協調を計りながら慎重に事を進め、町火消組織を発足させたのは享保五年（一七二〇）八月であった。三年余の歳月を要している。
江戸府内の町地を四十七の地区に分け、それに、い組、ろ組などと、いろは四十七文字をつけたのは忠相の機知であろう、と吉宗は好感を抱く。
「四十七組には、へ組、ら組、ひ組というのは無く、その代わりに、百組、千組、万組に置きかえられたそうでございまする」
加納久通の顔が、すでに笑いかけている。
「上様、恐れながら、その理由がおわかりでございましょうや」
「へ組、ら組、ひ組が無いとな」
「御意」
答えを出そうとする久通の気配に、
「待て」
吉宗は制し、
「へは、例の臭い、あれか」
「御意」
「らは、ちとわかりかねるが、ひは火で、ともに忌み言葉であろう」

「その通りでございまする」
「らは……」
「裸の裸を、お膝元ゆえ、憚りましたる由」
「なるほど」
「とりわけ、いろはにほへ……の、へに当たった組が、越前の奉行所へ泣きついたようでございまする。へ組、へ組と、年中からかわれては、親子兄弟まで肩身が狭い思いをするというわけでございまする」
「いかにも、そうよのう」
奔放であった若い一時期、遠駆けで庶民と交わり、下情に通じている吉宗は大笑いであった。

三

町火消結成と並行して、町地の不燃化計画も進められていたが、これにも大岡忠相は献策者でありながら、手間取っているようである。
火災は、依然、江戸府内に猛威をふるいつづけていた。
とりわけ、冬から春にかけて、毎年、大火が発生する。
吉宗が将軍宣下をうけた享保元年（正徳六年）の一月は、大小十三度もの火事が府内を混乱におとし入れ、多くの人命と財産が失われた。

翌享保二年一月の大火のとき、吉宗は黒煙渦巻く本丸の屋根に登って仁王立ちになり、火勢を見きわめている。

北方一帯から、はるか東の深川にかけて火の海と化した江戸を見渡す吉宗は暗然たる思いで、防火体制整備の急を痛感したものである。

享保三年は、新将軍吉宗の、幕府直属の定火消や大名火消等への檄が利いてか、一月には大きな火事はなかった。しかし、四月と十二月に、数十町を焼く大火に見舞われた。

享保四年は三月と六月に大火。十二月には地震にともなう火災が府内各地で発生している。

享保五年は、八月に町火消いろは四十七組が活動をはじめたが、その前の一月に神田、二月に青山一帯を焼く火事があった。三月二十七日に日本橋箔屋町から出た火は、折りからの烈風にあおられて通町、伝馬町という目抜き通りを焼き払いながら、浅草、下谷まで延焼、上野山の寛永寺内の大猷院（三代将軍家光）霊廟が炎上する有様となった。

この数年の間、吉宗は老中に命じ、普請奉行、作事奉行、南北町奉行等、関係役人に不燃化計画の進み具合を、何度も調査させている。

江戸府内は、六割が武家地、二割が寺社地、残り二割だけが町地であり、その二割の土地に、およそ五十万人の町人がひしめき住んでいた。

しかし、武家の権威を保持するため、一般町家での瓦葺き、銅張りは禁じられていたのである。ごく一部の、御用達豪商や目抜き通りの角店舗、武家地に隣接した町家密集地が瓦を置くことが許されていたのにすぎない。

一方、大名屋敷は瓦屋根が主であるが、それでも古式を重んじた柿(こけら)などの板葺きや茅(かや)葺き屋根も少なくない。旗本屋敷も同様である。寺院神社は重厚な柿葺きや草葺き屋根が、むしろ多い。

幕府は、先ず、大名屋敷、旗本屋敷、寺社の瓦屋根化、銅張りを督促し、民家に対しては塗屋根を奨励した。

塗屋根とは、板葺き屋根には漆喰を塗り、草葺きの屋根にはこねた土をかぶせるのである。

吉宗は、町家に瓦屋根を許可してもよい、否、むしろ奨励すべき、と考えるのだが、「恐れながら、直ぐに屋根を瓦に変えることのできぬ、手元不如意(てもとふにょい)の武家も多く、その面目に御配慮願わしく」

このような老中の意見で、町家の瓦屋根は黙認、という半端な指示が町奉行へ出されていた。

しかし、南町奉行の大岡忠相は、町家の瓦葺きを強引に推し進めているようである。それでも、武家屋敷、寺社、町地ともに、不燃化は遅遅として、所期の目的に近づかない。

老中の、もってまわった答弁では、らちが明かないので、要旨をまとめるのに才のある加納久通に取り次がせているのだが、

「詰まるところは、先立つものの詰まりでございまするな」

余人の耳目のないところでは、吉宗の機嫌次第で、久通は主従の則(のり)を越えた打ち解け

かたをする。同じ側近でも、硬骨漢の有馬氏倫が同席していると、こうはいかない。
「先立つものとは、詰まるところ、金子のことか」
吉宗も戯れを返す。
「御意にございまする。上も下下も、金詰まりにて、幕命に従いたいのは山山なれど、財力がない、ない袖は振れぬ、というわけでございまする」
「ない袖、のう」
吉宗は、おのれが着用の、ごわごわした木綿の単物の袖口を見つめる。依然、吉宗は江戸城で最も質素と噂される粗衣を通していた。
「そういえば、旗本からの、屋根葺き替え貸し金の請願が幾度か出されておったのう」
「大名からも、願い出がございまする」
「なんとかならぬのか」
「側役が出過ぎまするとも物議をかもしまするゆえ、入って調べたことはございませぬが、御金蔵は空だそうでございまする。帳簿の上においては、差し引き欠損つづきの勘定にて、翌年分の年貢や御用達商人への延べ払い等、やりくり算段を重ねて当座をしのいでおる由、河内守の述べるところでございまする」
河内守とは、老中井上正岑である。先日、吉宗から一年の年貢収穫高を問われて、答えられず、発奮して財政に多少、強くなったようである。
吉宗は、うなずき、翳りを帯びたまなざしを遠くへ投げた。
紀伊藩主時代の、財政再建に取り組んだ、苦闘の歳月がよみがえったのである。

吉宗が紀伊五十五万五千石の封を継いだとき、今の幕府同様、差し引き大きな欠損つづきの勘定で、年貢の前納の強要や上方商人からの融資等で、当座をしのいでいた。藩財政の実情を直視したとき、当時、二十二歳であった吉宗は、目の前が真っ暗になる思いであった。

挫けそうになる心を奮い立たせたのは、幼少年期に受けた屈辱の過去である。「湯殿っ子」「鬼だいだい」と陰に陽にののしられた、その悔しさである。

その悲憤を、ばねにして、藩財政再建と善政の実施に、文字通り、邁進したのであった。

内心、おのれの弱みとして怯みを覚えていた巨軀と容貌魁偉を、逆に武器とし、強面で質素節倹を命じ、俸禄の二十分の一を差し上げさせた。

贅沢を監視するため、町廻横目という役人を置き、城下を巡回させて、武家、町人、農民の別なく、徹底して奢侈を取り締まらせたものである。

遊興を禁じられた武士が、怠惰に流れぬよう、悪行に走らぬよう、芸（武芸）目付職を設け、家臣の武術学問習練の度合いを探らせもした。

城門外に訴訟箱（通称、目安箱）を置き、治政への献言や不満を広く受け入れ、施策に生かしたのも、藩主時代の治績の一つに数えられている。

一方で、吉宗は、地方巧者を多く登用し、農政の改革を推し進めた。

洪水や山崩れなどの災害を防ぐとともに、灌漑用水路の整備となる治山治水工事には、

吉宗はたびたび陣頭指揮をとった。この農政積極策で新田が大規模に開発され、荒廃した田畑の再生にも成功したのである。

治政七年目を迎えたころには、収入が支出を大幅に上回り、上方豪商からの膨大な借金もほぼ返済し、家臣に課していた差上金を年賦で戻すまでに財政を立て直した。

（われは、財政に関しては、勘定奉行よりも、老中よりも、熟達しておる）

強い自信を、吉宗は秘めている。老中も紀伊藩における実績を思慮の一つに入れて、吉宗を将軍に擁立したのであるが、

「今、しばし、能ある鷹は爪をかくす、の策をお用いなされまするよう」

という有馬氏倫の進言があり、老中の立場を重んじて、吉宗は政事への細かな口出しを控えている現状であった。

「今や、上様は紀伊五十五万五千石の一国の主ではございませぬ。天下六十余州に君臨する将軍でありますれば、高所大局にお立ちあそばされ、当分、鷹揚に、聞き置くだけになされませ」

このような氏倫の忠言もある。

吉宗の気質としては、防火体制が焦眉の急であるならば、将軍の命令一下、即、必要な計画を実行に移したい。

手元不如意の武家、町人に資金を貸し与え、一挙に瓦屋根、土蔵造りに変えたい。

幕府の金蔵は空というが、それは言葉の綾だと、吉宗は思っている。諸事節約を徹底すれば、屋根葺き替えの費用くらいは容易に出せる、と考える。

真実、欠損つづきで施策を何一つ実施できないというならば、紀伊藩で試みて成功した、家臣からの差上金で賄う方策もあるではないか。

将軍としての吉宗が浮かべる家臣は、旗本・御家人ではない。三百諸侯と称される大名であった。この諸大名から忠誠の証として、万石につき二十分の一を上納させれば、数年のうちに幕府財政は立ち直る、という腹案を、吉宗は持っている。

しかし、老中も大名であれば、まず、老中五人から強い異議が出ることは明らかであった。

諸大名も深刻な財政難に苦しんでいるのであれば、動揺は六十余州に波紋をひろげ、将軍吉宗不信の機運も生じかねない。

第一、氏倫、久通の両側近が、無謀、と諫めることは必定である。

(将軍とは、かほどに……)

吉宗は胸の内で慨嘆する。

(権力を思いのままにできぬ、弱き存在か)

天下経綸を持ち腐れにしなければならぬものか。

所詮、将軍は、お飾りか。

「そうせいさま」と称されたと伝わる、四代将軍家綱公や六代将軍家宣公、あるいは先代の幼君家継公のように、「そうせい」の一言のみを用い、何もせぬのが天下安寧の元ではないか、少なくとも江戸城は平和、とも思い惑う。

そうであっても、

（われは、断じて、お飾りにはならぬ）

吉宗は、腹の底で、決意を固める。

おのれが、老中や大奥の実力者、そのほか、よくわからぬさまざまな勢力の思惑で、尾張家と水戸家を退け、将軍に祭り上げられたとしても、

（いずれ、時機をうかがい）

おのれの経綸を実現してみせる。そうせねばならぬ。そうでなければ、

（何のための将軍職ぞ）

と、心を奮い立たせるのであった。

「湯殿っ子」「鬼だいだい」と蔑まれてきた過去の悲憤が、新たなるばねとなって、正義を行い、善政を敷き、

（天下の名君とならねばならぬ）

吉宗は胸中深く期するのである。

そのためには、老中御用部屋に、一人でもよい、おのれの分身を置きたい、と切実に思う。

四

五老中のうちで最も若いがゆえに生真面目であった阿部正喬は、軍役についての吉宗の質問に答えられず、以後、気うつの症が日月とともに募っていた。

何度か辞職を願い出ていた正喬を、そのつど慰留してきた吉宗であったが、ころあいをみて認めた。享保二年（一七一七）九月十九日である。

後任には、水野和泉守忠之を登用した。

老中衆が推挙した一人であったが、家柄、経歴ともに、資格を充分に具えた人物である。働き盛りの、四十九歳。

忠之の水野家は、神君家康の生母伝通院（於大の方）の同母兄忠守の三男、忠元を藩祖とする将軍家外戚筋の名門であった。

家康生誕の城、という由緒を有する三河岡崎城五万石の城主である。

老中へ昇進する道筋の一つである奏者番、若年寄、京都所司代という段階を着実にのぼってきた英俊でもあった。

しかし、自然な人事に見えて、吉宗が念願としていた、老中御用部屋に分身を置く、その重要な布石であったのである。

五万石前後の譜代大名から選ばれる老中は、大政を預かる最高職である。望む者が多い。

定員は四人か五人。よほどの落度がないかぎり終身官に近いゆえに、欠員はめったに出ない。老中昇進の道筋を着実に進んでいても、若年寄、大坂城代、あるいは京都所司代で隠居、という例がほとんどであった。

競争も激しい。水野忠之が老中になれたのは希有の幸運というべきであり、将軍吉宗の格別の思し召し、と見られて当然であろう。

事実、この登用は、吉宗が、おのれの分身になりうるか、じっくり見定めた、その結実にほかならない。

京都所司代は、将軍直属で、朝廷、公卿に関する一切を司るのが主務である。

あたかも、将軍宣下後に、皇室、勅使等への謝儀があり、吉宗の亡き正室の実家伏見宮家への挨拶、大奥対策としての天英院の実父、前関白近衛基熙卿への進物等、打ち合わせが重なり、京都所司代水野忠之と面談することが多く、人品と才知を洞察できた。

並行して、広敷伊賀者（御庭番）に老中衆が推挙した何人かの老中候補者の身辺を調査させていた。報告を比較閲（けみ）すると、悪評判が最も少なく、三河武士の伝統を重んじて質実剛健、清廉潔癖に身を処していると目されるのは、水野忠之が随一である。

だが、英俊で人柄がよく、剛健清潔だけでは、吉宗が求める分身の条件を満たさない。

吉宗同様、進取の気象に富み、正義心が強く、かつ、将軍への絶対の忠誠心が必要であった。

とりわけ、吉宗は、服従心を重視している。

（たとえ、黒であっても、われが白と断ずれば、白であると押し通すほどの）

八朔（はっさく）（八月一日、徳川家関東入国記念日）は、年始賀儀同様の幕府重要式典があり、在府の大名は総登城であった。

遠国在任の士は、赴任先で八朔を祝うが、御用次第で江戸に参勤することもある。

この年、水野忠之は参府し、八朔の儀式をおえると、あわただしく帰洛していった。その前日、出立の挨拶に目通りを願い出ると、吉宗は忠之を休息之間に招じ、下段之間で親しく茶を喫しながら、四方山話に興じた。

途中、吉宗は、なにげない口調で、

「将軍という職は、とりわけ孤独なものである。上がないからのう。何事も、最後は、おのれが決断せねばならぬ。我が儘にもなりやすい」

と、にこやかさを失わず、話題を転じた。

忠之は、中肉中背で、目鼻立ちが整っている。吉宗より十五歳年上であるが、魁偉な将軍の前で畏まっていると、端整な容貌であるだけに、大人と対座する純情なる少年といった図に見えなくはない。

「常憲院（五代将軍綱吉）の世における、生類憐みの令、の悪しき前例もある」

明敏な忠之である。早くも、吉宗の思惑を察したようであるが、無言で謹聴の態を保っていた。

「大政を輔弼するのが老中であるが、政道において、将軍の施策を非とする場合、老中はあくまで諫言を通すのが正義であろうか。将軍は老中の意見を重んじ、論語の教えにある通り、過ちては則ち改むるに憚ることなかれ、に徹すべきであろうか」

もはや、吉宗は狙いを隠さない。

水野忠之のほうにも、家柄と経歴からいって、大政輔弼の座につく意欲がなかろうはずはない。御新政初の老中更迭があるとすれば、おのれが補任される最も近い地位にい

る、という自負は強いであろう。

そして今、明らかに、将軍から直接、試されているのである。

ところが、観察する吉宗の目には、忠之の顔面に動揺も気負いも認められない。

「上様（吉宗）の場合でございまするが、老中は、一、二度、信念を言上するのは輔弼の責務といたしましても、将軍家の御命令は絶対無二でございまするゆえ、たとえ非でございましても、臣たる者、従うのが本義かと存じまする」

四方山話のつづきのように、忠之は、さらりと言ってのけたのである。

追従に似て、追従ではなかった。

向けてくる畏敬のまなざしに、へつらいの色は全くない。

吉宗は、むしろ、異様な威圧を覚えたのである。上様の場合、非道の政治をおこなうはずがない、過ちを冒すはずがない、という確信に満ちた眼光が畏敬のまなざしにふくまれていた。

逆に解せば、将軍たる者、王道をつらぬき、決して過ちを冒してはならぬ、という、強烈な諫言にも感じられる。

しばらくして、忠之は謹み辞去したが、吉宗は肌着がじっとり汗ばんでいるのに気づいた。

（まぎれもなき、人傑）

忠之に、老中に任ずる吉宗の内命が伝わったのは、その日から、およそ一ヵ月半後である。

五

翌享保三年（一七一八）十一月。吉宗は難題に直面した。

同月十五日の夕方、御側役の有馬氏倫が休息之間にやってきて、

「主だった両替屋（現・銀行）二十数軒が、暖簾をおろし、休業の挙に出たとのことでございまする」

と、気遣わしく言上したのである。

「なにゆえ」

吉宗は、怪訝顔で、問う。

「南町奉行大岡越前の、金銀相場是正の命令を不服とし、いっせい閉店の由」

「なんだと」

吉宗は血相を変えた。

「町人が奉行に刃向かったと申すのか」

氏倫は、吉宗の昂奮を静めるような身振りをする。

「これには、双方、もっともなる理由がございまする。まずは、お聞きくだされ。そもそも、近ごろの急激なる銀高、金安に因がございまする」

氏倫は、広敷伊賀者のうち市中の風説を集めている者と、氏倫の家臣からの急報による、と前置きをし、言上を続けた。

「本日の午後、大岡越前は本両替屋十六軒全員と、脇両替屋（主として銭を扱う小規模店）の行事（世話役）二十人を南町奉行所に呼び集めましたる由。近ごろの、急激なる銀高、金安が物価に与える影響の大きさを憂慮し、いかなる理由によって銀高が収まらぬのかを、問い糺すためでございまする」

貨幣には、高額通貨である金貨・銀貨、それに庶民が日常に用いる銭貨があった。

金貨は江戸を中心に関東で流通し、京都・大坂を中心とする関西では銀貨で取り引きがなされていた。金の産出が東国が主で、銀が西国で多く採掘されることが起因の商慣習である。

金、銀、銭を、用途に応じてそれぞれ交換する相場は日日変動するが、幕府が示している相場は金一両、銀六十匁、銭四千文（四貫文）であった。

この、いわゆる公定相場で、長らく安定していたのであるが、今年（享保三年）に入ると、金一両に対して銀が五十八匁になり、五十五匁になり、夏には五十二匁前後に金が下落し、十一月中旬には四十三匁まで金が安くなったのである。

金の下落は銀の高騰を意味する。銀の力が強くなれば、金の価値はその分だけ弱まるわけで、公定相場であれば一両で六十匁分の物資が仕入れられたのに、今月は四十三匁分の品物しか購入できない。

この金安、銀高の傾向は、銭遣いの庶民にとっても、日日の暮らしに直接響いているのである。

それというのも、江戸は町人五十万に武家、寺社の者、無宿者などをふくめて、およそ百万人の口を養わねばならない大消費地である。だが、それを賄う諸物資の生産力が関東周辺にそなわっていない。

高価な絹織物（呉服）、麻織物、木綿、綿などの衣料のほとんどが、銀遣いの京都や大坂の問屋からの買いつけであった。

主食の米、麦、酒、塩、醤油、鰹節などの食品。火事のたびに需要が激増する材木、金具類。薬、藍玉、白粉、紅、砂糖なども大集散地である上方の問屋を経て、菱垣廻船、樽廻船といった千石積みの大型帆船を使って、海路で大量に送ってくる。決済は銀である。

これらの実情から、銀が高く、金が安い相場になれば、江戸の荷受問屋は買い控えをせざるをえなくなり、江戸八百八町の店頭から生活必需品が消えることになる。品不足は、当然、値段を高騰させる。

江戸住民にとっては由由しき事態になり、人人の怒りは、問屋や商人に向けられるとともに、町奉行所へも投げつけられるわけであった。

本来、金、銀、銭の交換をとり扱い、切賃（手数料）を利益とするのが両替屋であった。そのうち、預金、貸金をおこない、遠隔地との商売に必要な手形を振り出したり、為替の取り組みを代行し、決済に深くかかわるようになって、権勢も強まる。

両替屋の多くは、木綿問屋、酒問屋、鉱山業、呉服商などで富を蓄積した豪商である。本人、あるいは一族が、それらの商売をつづけており、巨大財閥といえた。

絶えず高額の金銀を動かしているゆえに、金銀相場による物価への影響が大きく、また相場を巧妙に操作することで、一族の商売に莫大な利得を与えるとともに、両替屋自身も暴利をむさぼっている、という疑いも持たれている。

このような背景を、氏倫は、かいつまんで語ったのち、

「両替屋一統は、相場は生きものゆえ、両替屋仲間の努力をもってしても、どうにもならぬ。成り行きにまかせるほかはない、と、奉行所で申し述べたようでございまする」

「それでは、越前は納得しないであろう」

吉宗の、浅黒いあばた面には、おのれが選んだ町奉行を軽んずる両替屋仲間への憤りがうかんでいた。

「それゆえ、越前は、即、公定通りの金一両、銀六十匁、銭四貫文の相場で取り引きするよう、一同に命じたようでございまする」

「当然である。われでも、そうする」

「恐れながら、町奉行はそうでありましても、天下を統治めされる上様は、大局に立って物事を御判断なされなければなりませぬ」

低い声の氏倫は冷静である。傳役に戻ったような厳格な物言いであった。

人払いをしているので、小姓も耳目がとどかない入側の端に退いている。温厚な加納久通の姿も見当たらない。

（さては、氏倫は、この際、何か釘をさすつもりか）

側近の性癖を熟知している吉宗は、胸中、身構える。

「歳末の、よろず物入りの時期にさしかかり、銀高、金安を放置せば、江戸住民の困窮は目に見えておる」

吉宗は、若いころ庶民と交わった体験もあって、下下の暮らしに通じており、経済への関心も深い。

「今年に入って、上方の銀が強く、われの膝元である関東の金が下落しているのも、われには不愉快である。われの新しき治政を軽んずるように思えるぞ」

本気で吉宗は言っているのではない。本気の発言であれば重大事になるからである。傅役に対する駄駄っ子に似た態度であり、氏倫を挑発して、本音を吐かせる思惑もある。

「それは、逆さでございまする」

氏倫は動じない。

「上様の御新政をよろこび、安堵しておりまするがゆえに、商人どもは思い切った商売をしておるのでございましょう。その勢いが、相場をいちじるしく変動せしめておる、と解すべきだと存じまする」

氏倫は、父の有馬義景が紀伊藩において、大坂屋敷奉行、松坂町奉行、勘定奉行を歴任したことから、経済の仕組みや財政に明るかった。

吉宗の傅役に任じられたのち、一貫して、家政を取り仕切った。吉宗の越前丹生郡三万石時代、さらに本藩五十五万五千石の当主になってからも、側用人ながら事実上の勘

定奉行であり、破綻に瀕していた紀伊藩財政のやりくりを指図したものである。

もちろん、吉宗の断固とした決意が、氏倫の自在なる働きを促進せしめたのである。同時に、吉宗がなし遂げた紀伊藩財政再建の功績は、氏倫の陰の働きに支えられていたといっても過言ではない。

父義景から受け継いだ人脈も、氏倫は大いに役立てたことであろう。今も、その人脈は生きているはずである。

義景が在任した大坂は、天下の台所と称される諸物資の大集散地である。問屋業を営む豪商が縦横にめぐらされた運河沿いに軒を並べ、日日、巨万の富が動いている。

同じく松坂は、紀伊藩領であり、昨今、本両替屋の最大手となっている三井・越後屋をはじめ、小野田・松坂屋、鈴木・伊豆蔵、小津屋、中川屋といった、上方に本店をもち江戸へ進出した富豪、いわゆる伊勢商人の中心地であった。

それらの人脈があればこそ、財政再建のための金融が円滑に運び、借財返済にも好意ある処置をとってくれた、と吉宗は聞いている。

この点、吉宗は、氏倫に頭が上がらぬ面をもっていた。

「いずれにしても、町奉行の命令を無視し、暖簾おろしの暴挙に出た両替屋どもは、不埒ではないか。何分の処置が必要であろう」

「明朝、必ずや、越前が老中御用部屋へ、委細を報告し、処置の指示を仰ぎにまいりましょう」

「老中は、どう対処するであろうか」

「越前の強腰に、公儀に逆らった罪として、入牢の上の取り調べを認めるやも知れませぬ。もっとも、不埒なる町人を小伝馬町（牢屋敷）へ送り込むのは、町奉行の手限り（独断）でできまするが、越前は慎重でございまするゆえ、老中の認可を求めるでございましょう」

「それでよいではないか。近ごろの豪商どもの驕慢は、目にあまるやに聞く。牢にぶちこみ、しばし頭を冷やさしめるのも、適宜の処置ではないか」

氏倫は無言である。

「いずれ、両替仲間から、それぞれの手づるを求めて、老中などに釈放の嘆願がこよう。そこで、重重、説諭し、解き放せばよい」

「すでに、嘆願はきておりまする」

「なんと」

吉宗の眼光が鋭くなる。

「そのほうの許にか」

「老中の屋敷にも、まいっておりましょう」

しばし絶句した吉宗は、ふたたび、顔面に憤りの色をにじませる。

「いかなる申し条ぞ」

「孫平次の申しようでは、三井（両替屋）の手代（支配人）が屋敷に駆けつけ、相場は生きものゆえ、江戸の両替仲間の力では、いかんともしがたい。町奉行が命じる金一両に銀六十匁で取り引きをいたせば、今の相場は四十三匁前後ゆえ、十七匁ほどのひらきが

ある。商いをすればするほど欠損は莫大となり、身上潰れ（破産）は必至。それにより、暖簾をおろすほかに生きる道はございませぬ、との釈明、並びに、相対（実）相場の認可願い、でございまする」

孫平次というのは、有馬氏倫家の用人、川本孫平次である。氏倫の功績は、孫平次の下働きに負うところが大で、氏倫の腹心であった。

三井・越後屋をはじめ、紀伊藩時代からの豪商との連絡は、孫平次が一手に引き受けている。

町人は、みだりに江戸城へ入れない。そこで、昵懇の間柄である有馬家の用人を通じ、火急に、氏倫へ手を打ってきたのであろう。

豪商の打つ手の素早さと、その手が直ちに城中の中奥にまで伸び、将軍の側近である氏倫を確実に動かしている、そのことに、吉宗は驚きと怒りを覚える。

吉宗は、しかし、憤りはうかべるが、怒りをあからさまに面へあらわさない。罵声も発しない。誰に対してもそうであるが、不遇であった幼少時代からの自制が身についているのだった。

だが、氏倫をにらむ眼光は鋭さを増す。

「汝は、公儀よりは、商人の肩を持とうとしておるのか」

声はおだやかである。

氏倫は、依然、冷静に答える。

「両替屋の身上が潰れましては、無数の手形や借金証文等が宙にうき、金融はとどこお

り、上方との取り引きは沙汰止みとなり、江戸へ諸物資が入ってまいりませぬ。歳末を控え、江戸百万の住人が迷惑をこうむりまする。幕府をはじめ、諸大名の多くが、両替仲間に為替御用達を命じておりますれば、世の混乱は計り知れませぬ。恐れながら、今一つ……」

氏倫の秀でた額の左から眉間にかけて刻まれている、古い刀傷が、朱を帯びていた。

「両替屋とその一族の商人には、功労もあり、諸家ともに、多少の恩義もございましょう。無下にはできぬかと存じまする。これが、天下を統治めされる上様の、大局に立つ御判断かと」

今度は、吉宗の右目の下が、けいれんを起こし、しばし、収まらない。

老中をはじめ、奉行等、幕府要職にある者は、四ツ上りの八ツ下りと称し、正四ツ（午前十時）までに登城し、正八ツ（午後二時）に下城する決まりである。

老中は、屋敷では公用をおこなわないのが常であった。だが、町奉行は城中で老中や関係諸役人との打ち合わせ等をすませ、八ツに下城、奉行所に戻ると、それからが白洲裁きなどの本職であった。激務である。

南町奉行大岡越前守は、有馬氏倫が推量した通り、正四ツに登城すると、御用部屋の都合を伺い、許しを得て出頭してきた。

すでに前夜、吉宗は、おのれの分身と思い定めている水野和泉守忠之を密かに不時登城せしめ、休息之間に呼んでいる。

忠之も当然知っている両替仲間暖簾おろしを話題にし、

「越前は、町奉行として、なすべきことをやったのである。あっぱれ、と褒めるべきであろう。重き役目の奉行にあからさまに背き、公儀より許されおる両替という大事の家業を放棄して休業したるやからは、投獄の上、闕所（取り潰し）にも処する罪科である」

このように強面で語ったのち、

「さりながら」

と、表情をゆるめた。

「両替仲間にも、休業をもって抗するやむをえざる事情もあるやに聞く。また、入牢、闕所等の誅罰を科するとき、その影響するところは大であり、ここは大局に立ち、しばし寛容をもって、両替仲間の言い分も段段に聞きとり、円満解決の道を求めるよう、越前に、老中の考えとして説諭せよ」

将軍としては懇切に過ぎるほどの指示を与えていた。

その指示通りに事は運び、大岡越前守は無念の思いを抑えて、両替仲間との妥協の方策を探りつづけたのであるが、数日後、

「どうも、両替仲間は強硬のようでございまする」

困惑の表情で吉宗に報告するのは、加納久通である。

側役としては明らかに出過ぎた具申を押し通した有馬氏倫は、自ら出仕を差し控え、外桜田の屋敷にこもって謹慎していた。

「無用である。斟酌なく登城するよう、伝えよ」

と、久通に言い置いているが、本心としては、しばらく氏倫の顔を見たくない吉宗である。

考えてみれば、氏倫の進言は正しい。

たしかに、公儀に抗する両替仲間を直ちに罰するのは、町奉行の職掌内の、視野の狭い判断といわざるをえない。

額の刀傷を朱に染めた、

(氏倫の忠告がなくば……)

大岡越前の立場を重んじ、暖簾をおろした両替仲間の全員、あるいは主だった者を、断固、処罰したであろう。

常憲院治世の初め、巨万の富を誇り、あまりにも奢侈(しゃし)驕慢に走った浅草黒船町の豪商、石川屋六兵衛を闕所の上、追放に処した故事を、吉宗は思い起こした。

天和元年(一六八一)の出来事であるから、吉宗の生まれる三年前である。

御新政の意気に燃える英断と見られているが、それによる世の混乱と諸大名の迷惑は長く語り継がれていた。

石川屋は、商人同士はもちろん、大名貸しと称される、諸大名や大身(たいしん)旗本へ多額の融資をおこなっていた。その利子と、見返りの御用達等の利権、不正への目こぼしで富を蓄積。さらには、幕府権門との親密を金看板に、悪辣(あくらつ)に商売をひろげていったのである。

その石川屋が、突然、家財没収の上、江戸十里四方追放となったのである。庶民は喝

采を送ったが、無数の手形や借金証文等が宙にうき、それの悪用も頻発し、非常な混乱を呈した。

一方、常に財政に窮している諸大名や大身旗本は、石川屋が闕所になったことで借金証文がうやむやになる期待よりは、あてにできる金主を失ったことの困惑のほうが強かった。紀伊藩も、かなりの影響をうけた、と吉宗は聞いている。

氏倫の進言は、正しく、適宜であった。

そうであっても、吉宗の、両替屋騒動でうけた心の傷は深い。

（大岡越前は、われより一層、敗北感を味わっているであろう）

吉宗は、誰に対しても、一件を大政のなかでのごく些細事と見て、気にもとめない風を装っていたが、断腸の思いであった。

紀伊藩と長年、裏面で結ばれてきた、氏倫が指摘する、功労もあり、多少の恩義もある三井家をはじめとする本両替仲間十六軒と、大手の脇両替屋七、八軒は、結束固く、大岡越前守の懸命の調停を頑として受け入れようとしないからである。

越前守は老中と協議し、金一両に銀五十四匁、あるいは五十五匁という線で妥協を計ろうと試みた。公定は金一両、銀六十匁である。実相場は金一両、銀五十匁前後にまで金が持ち直しているので、中を取ったのだった。

だが、越前守のこの譲歩案を、両替仲間は受け入れず、あくまで相対相場の公認を求めたのである。

老中も評定所も、相役の北町奉行も、面倒に巻き込まれることを避け、大岡越前守一

人に解決をまかせ、逃げていた。

評定所は、老中、寺社・町・勘定の三奉行、時には側役、大目付等も立ち合う、幕府最高の協議、裁定の場である。

その席で、越前守は眦を決して次のように述べたことを、吉宗は立ち合った有馬氏倫の報告で知る。

「処置を一任されましたる上は、不肖、大岡忠相、斟酌はいたしませぬ。非は両替屋一統にあり、公儀が二度、三度と譲歩したのでは、政事に一貫するところがなく、町奉行として職務を果たすことはできませぬ。彼方が折れて、謝罪し、開店するまでは、放置いたしまする。それは望ましくないと仰せられるのであれば、引責辞任するいわれはなきゆえ、罷免していただきたい」

吉宗は、氏倫へうなずいただけであったが、胸中、爽快さを覚えていた。

(われの目に狂いはなかった。越前もまた、人傑)

結束した両替仲間は、謝罪の気配さえ見せず、暖簾をおろしたまま年を越してしまった。

公儀が愚弄されたままという、未曾有の事態である。

吉宗は、将軍でありながら強権をふるえず、苛立ちを腹の底にしまって、成り行きを見守るほかはなかった。

享保四年(一七一九)の新春を迎えた。

一月、二月、三月に入っても、町奉行所と両替仲間は歩み寄らず、暗闘がつづく。

脇両替屋は数百軒、店をひらいているので、銭遣いの庶民の、日常の暮らしに支障をきたすことはない。

それでも、上方との取り引きが円滑に進まず、実相場は銀高、金安が是正されないままであるため、諸物資の品不足と高値が江戸住民全体を苦しめていた。

だが、本両替屋等の豪商に反感を抱いている庶民は、じっと我慢である。

悲鳴を上げたのは、大商人であり、御用為替手形の決済等がとどこおってどうにもならない幕府の勘定方であった。

閉店をつづける両替仲間自身も、にっちもさっちも行かなくなっている様子である。

三月十九日の午後、老中首座井上河内守正岑が月番老中水野和泉守忠之を伴い、こじれた両替仲間の件について裁断を仰ぎにやってきた。

正岑は、忠之の強い進言で、重い腰を上げた様子である。

「どのような解決が望ましいぞ。腹案はあるのか」

吉宗は問う。

「はっ」

正岑は平伏し、

「和泉守が言上、つかまつりまする」

と、逃げた。

「和泉、申せ」

「恐れながら、差し迫りし実情の、ありのままを先に申し上げたく」
忠之は、両手をつかえたまま、真摯の面持ちである。
「許す」
「申し上げまする。早急なる解決を切望いたしまする嘆願が、当の両替仲間はもちろん、御三家をはじめ、諸大名、御直参、幕府内からも、陰に陽に相次いでおりまする」
吉宗はうなずく。そのことは、側衆から聞いている。広敷伊賀者の報告にもある。
「さらには、かくのごとく金詰まりの世になりましたる上は、長年とどこおりし未払金の御清算を、と、呉服所をはじめ、御納戸御用達等、出入り商人たちの督促が急でございまする」
「和泉」
正岑は、老顔にうろたえの色をうかべて、
「そこまで申し上げなくてもよい」
と、制する。
「かまわぬ。われは、ありのままを知りたい」
吉宗は正岑を無視し、忠之を直視した。
「用達商人への未払金は、いかほどか」
「調べましたところ、およそ十六万両にのぼりまする」
「十六万両……」
吉宗は、あっけにとられる。

十六万両は、一両を一石に換算し、五公五民の貢租とすれば、きわめておおざっぱであるが、三十二万石の領国の年収入に相当する、と、吉宗はこれくらいの算用は直ちにできた。

「十六万両という大金を、公儀が、商人どもに、つまりは借金したままというのか」

「御意」

「恐れながら……」

と、正岑が、また、あわてる。

「十六万両は、常憲院さま御治世からの累積でございまして……」

「河内、公儀の負債であることに変わりなかろう」

吉宗は、物やわらかにたしなめたが、思わず嘆息をもらす。

両替仲間の、公儀を軽んじて強腰をくずさない、その裏面を見せつけられる思いであったからである。

常憲院――五代将軍綱吉は、治世半ばから正常を欠いた。巨費を投じて寺社の造営、修築に凝り、生類憐みの令の一環として数万頭の犬を保護飼育する犬小屋を建設、自らも衣食に豪奢の限りをつくして幕府の金蔵を空にしてしまったのであった。

呉服所は主として大奥の衣裳を調達し、御納戸御用達は将軍家と幕府の服飾、褒賞物、手回り品等一切を納入する商人である。これら御用達には、後藤縫殿助、茶屋四郎次郎という老舗にまじって、越後屋八郎兵衛、三井三郎左衛門、伊勢屋利右衛門ら両替仲間の一族がめじろ押しである。

（首の根っこを押さえつけられているようなものではないか）

吉宗は気力が萎えてゆく。

翌三月二十日の午前。吉宗は、南町奉行大岡忠相を、御座之間に召し出した。

加納久通の導きで、老中首座井上正岑の後ろから姿を現わした忠相を一見したとき、吉宗は胸を衝かれた。

将軍と町奉行が直接会うことは、めったに無い。一年ほど前、町奉行任命を言い渡して以来の接見であるが、やつれようがひどい。両替仲間との長期の暗闘に心身をすりへらしたさまが、如実に伝わってくる。

これから指示しなければならない、その内容を思えば、吉宗の辛さは倍増するのだった。

だが、吉宗は、ことさら快活に振舞う。

「決まり文句の挨拶は無用。近う、近う」

上段の框まで正岑と忠相が膝行してくると、

「越前、なかなかの勤めぶり、大慶である」

と、慰労せずにはおれない。

「ははっ」

恐懼平伏する忠相に、なおも、二、三、言葉をかけ、その後に、両替仲間の願いを、寛容をもって聞き届けてやるよう、指示したのである。

銀高、金安をやむをえずとする、相対相場の是認であった。

町奉行の、そして公儀の、全面敗退にほかならない。
昨日、井上正岑、水野忠之に、側近の有馬氏倫、加納久通を加えて、あらためて協議した結論が、これであった。
「半端なる歩み寄りにて、さらに揉めるより、この際、両替仲間の言い分を通し、逆に、貸しをつくろうではないか」
吉宗は、砕けた言いようで、決断を下した。
さらに、職を賭けて立ち向かっている大岡越前を、誰が説得するかという段になると、当然、老中の仕事であるが、
「われが、話そう。そのほうが、まわりくどくなくてよい」
と、翌朝の、忠相御座之間召し出しを命じたのである。
吉宗は、難局から逃げず、あれこれ思い煩うより、自ら直截に事に当たろうとする心意気が強い。
これは、功を奏した。
将軍直の御諚に逆らえるものではない。
大岡忠相は、全面屈伏の指示に、愕然とした面持ちであったが、
「不服か」
吉宗が、にこやかに声をかけると、
「謹んで、お受けいたしまする」
両手をつかえ、深深と頭を下げたものである。

正月をはさんで、約四ヵ月もの間、暖簾おろしという前代未聞の横車を押し通した本両替仲間十六軒と同調した脇両替屋は、直ちに開店した。

江戸の目抜き通りは活気を取り戻したのであるが、その報告をうけた吉宗の心は、一向に楽しまない。

第四章　財政再建と大巻狩

一

享保五年（一七二〇）八月に、町火消いろは四十七組を発足させた将軍吉宗は、刑罰の見直しを指示、十一月に先ず、遠流の刑に処せられた者の家族に対する連座を廃止した。

享保六年（一七二一）四月には、主殺し、親殺しの重罪人であっても、町人・農民であれば家族に累が及ばない、と定めた。従来だと、家族も幼児に至るまで獄門、あるいは死刑に処せられていたのである。

同じ四月、吉宗は、江戸城内の吹上庭園に白洲を特設させ、寺社・町・勘定の三奉行が合同で詮議する、いわゆる上覧裁きをおこない、公平厳正なる裁判を督励した。

同年八月、南町奉行大岡越前守忠相の献言を納れて、江戸城和田倉門外、竜の口の評定所入口に、目安箱を設置した。

両替仲間との暗闘で涙をのみ、一時、意欲を衰えさせていたかに見えた大岡忠相であったが、すぐに、上申魔、献言狂を回復させ、老中御用部屋を当惑させていた。その一

つが、目安箱の提言である。

忠相は、山田奉行時代に、当時、紀伊藩主であった吉宗が和歌山城門外に訴訟箱とも目安箱とも呼ばれる箱を設けて直訴を許し、政道に取り入れた治績を知っていた。その善政を上申書に記述し、江戸においても民意を広く受け入れ、御政道に生かすよう献言したのである。

吉宗は、すでに、目安箱設置の腹案はもっていたのであるが、

「越前には、両替仲間の件で辛い思いをさせた。目安箱は、越前の提案ということで、手柄を立てさせてやろうではないか」

と、加納久通に語り、老中御用部屋にそのよう手配させたのである。

日本橋等に、予告の高札が立ったのが閏七月二日。

八月二日に、評定所の外に、目安箱が出現した。

二尺四寸（約七十三センチ）立方の、樫材の箱は銅板を張った上部に細長い口があり、毎月、二日、十一日、二十一日の三度、朝から正午まで所定の場所に置かれ、誰でも（のちに幕臣の投書は禁止）訴状や献言を投げ入れることができた。

正午になると、厳重な警固のもと江戸城本丸、休息之間に運ばれ、吉宗保管の鍵で錠があけられた。小姓が差し出す封書は、吉宗自身が開封し、全部、目を通すのである。

ただし、高札の公示にある通り、住所、氏名が明記されていない書状は破り捨てられた。また、不正邪悪なる意図がうかがえる投書は、糾明の上、処罰されることになっていた。

これはと思う献言は、老中に回覧させ、「どう思うか」と、意見を出させた。

目安箱の投書から、吉宗の善政と称される幾つかの施策が生まれている。

享保七年（一七二二）の一月、小石川伝通院前で医所を営む小川笙船（しょうせん）という町医者の、貧困者のための施療院設立についての投書採用も、その一つであった。

吉宗は、早速、老中を通じ、町奉行大岡忠相に掛かりを命じた。小石川薬園の敷地に、小石川養生所が開設したのは、同年十二月である。

前後して、下総（しもうさ）と上総（かずさ）に新田開発が可能な荒地がある由、投書があり、調べさせたところ事実とわかった。吉宗は投書した浪人二人を褒賞するとともに、勘定奉行に開墾を命じている。

目安箱の設置は、やましさを秘める幕府高官や庶民に恨まれている小役人を恐れおののかせ、綱紀粛正にも役立った。

事実、投書のなかには権門や役人の不正、非道をあばく訴状も少なくない。

吉宗は、しかし、本人周辺にそれとなくほのめかすだけで、表立って糾明を命じなかった。処罰するよりは、反省による立ち直りを期待したのである。

将軍直属の、広敷伊賀者（御庭番）の存在と相まって、諸大名、幕臣、庶民の、吉宗への畏敬は一段と強まった。

「名将軍」「名君」の賛辞が上下に満ちても、吉宗の心は一向に浮き立たない。

将軍就任と同時に掛けられた、財政再建という枷が、日日、心にくい込んでくるからであった。

幕府が、御用達商人に、十六万両もの未払いがあるほど、困窮しているのである。

「東照大権現（初代家康）の御遺産は金銀だけでも二百万両はあったと聞く。台徳院（二代秀忠）は、さらにお殖しになり、大猷院へ二百十万両あまり、お譲りになられたと伝わる。それが、今や金蔵は空で、やりくり算段の有様。われが紀伊藩を継いだときも、そうであったが、何という、めぐり合わせじゃ」

愚痴の響きを帯びるこの種の放言は、加納久通にしかもらせない。

「やはり、厳有院（四代家綱）さまの世の、明暦の大火が、大きかったのではこざいますまいか。江戸のほとんどが焼野原になり、御城も西丸だけを残して、本丸、二の丸、三の丸、それに天守閣まで燃え落ちてしまいました。御城の復興や、諸大名、旗本、町人へのお援い金等で、数百万両を費やしたと聞きまする。天守閣まで手が回らず、今もって、再建できない有様でございまする」

「天守閣は、天下泰平の世に、無用という考えがあってであろう」

「御意にございまする。折りしも、佐渡、伊豆をはじめ、各地の鉱山が掘りつくしのため、枯渇したことも大きゅうございまするな」

「さらには、常憲院（五代綱吉）の御放漫で、ついに金蔵が底をついたというわけじゃ」

これには、久通は無言を守る。将軍家批判になるからであった。

「鉱山からは、微微たる金銀しか出ず、この数年は天候不順、風水害がひどく、年貢は減少つづきのようじゃ。財政立て直しどころか、俸禄の支給にも差しつかえが出ておる。贅沢禁止、節倹奨励だけではどうにもならぬ」

めったに弱音を吐かない吉宗だが、声に力がない。

幕臣は、所領を与えられている知行（石）取りと、米で渡される切米（俵）取りに分かれている。

切米取りは、大体、小禄の武士で、二月（春借米）と五月（夏借米）に年額の四分の一ずつが渡され、十月（冬切米）に残り二分の一が支給される。切米は、城中に張り出される張紙値段（時価）に従い、札差（換金、金貸しを兼ねる禄米取扱い業者）から米、あるいは金銭を受け取るのである。

知行取りも不作で収入減に見舞われているが、切米取りは、享保六年の冬切米から遅配がはじまり、翌享保七年は春借米が支給額の三分の一しか出ない、という惨状であった。

「紀伊藩の財政立て直しでは、家臣に二十分の一の差上金を課したが、われは江戸城生まれの将軍ではないゆえ、遅配が重なる幕臣に、この上の差上金を命ずる勇気はないわい」

またもや弱音が出る。

巨軀と魁偉な面貌をもつ主君であるが、その裏に隠された繊細な心根と、出自にまつわる引け目をよく知る久通は、応答する言葉を探せない。

二

享保七年（一七二二）の五月十五日。吉宗は財政に専念する勝手方老中を創設、水野和泉守忠之をその任に当てた。

二日後の五月十七日、老中首座井上河内守正岑が病没。五月二十一日、大坂城代安藤対馬守重行を老中に新任した。

重行は美濃加納六万七千石の領主で、当年五十二歳。俊英鋭敏というよりは、実直温順の質であった。敢えて、このような人材を選んだのである。

「ほとくない」

頼りない、まどろっこしい、という意味の紀伊言葉を、吉宗は独りいるときに口走る。

老中御用部屋にしみついている、事なかれ第一の考えと大名幕閣の世間知らず苦労知らずに、ほとほと愛想をつかしていた。

老中尊重を打ち出した吉宗であるが、これは譜代大名懐柔策の一つであった。将軍在任足かけ七年、所期の目的は達している。

吉宗擁立に功労があったとされる古参老中は、享保二年に阿部正喬が心身衰弱により辞任、享保三年に土屋政直が高齢により隠退、享保五年には久世重之が病死していた。そして、今年、井上正岑が現職のまま死去。七十歳は天寿を全うしたといえよう。

残っている古参老中は、首座となった戸田忠真であるが、七十二歳であれば、市井の

落書にあると広敷伊賀者が報告する、

　毒にも薬にもならぬもの　白湯と戸田山城守

そのものであった。

事実上の老中首座は、吉宗が分身としての働きを期待している、水野忠之である。

もう、老中御用部屋に気兼ねをする必要はない。

（いよいよ、将軍親政の時機が到来）

大奥の、天英院、月光院といった実力者も、相応に齢を重ね、吉宗の体制に順応して、穏和にすごしていた。

将軍は、もはや、お飾りではない。

むしろ、忠之以外の老中が、お飾りであったほうがよい、と吉宗は考える。

実直温順で、将軍を畏怖し、おのれの意見を持たず、上意下達を旨とし、

（われの意のままに動く老中）

このほうが望ましい。

独裁専行の弊害を慮らないではない。しかし、大名幕閣の能力の限界を知る吉宗は、

（余人に頼らず、われが、敢然と難局に当たるほかはない）

と、決意を新たにするのであった。

俸禄の遅配、欠配まで引き起こしている財政の立て直しに、しばし待て、はないのである。

（蛮勇、あるのみ）

水野忠之を勝手方老中に任命したのちは、財政に関しては忠之を御座之間なり、休息之間に呼び、事を決することができた。

吉宗には、じつは、誰もが思いつかないであろう、秘策がある。

もれることによる騒動を避けるため、腹心の有馬氏倫、加納久通にも打ち明けていなかった。

「断に当たって断ぜざるは、反って、その乱を受く」

吉宗は、史記の名言を口に出し、おのれに言い聞かせる。

電光石火の実施を目論んでいた。

これから長くつづくであろう治世である。施策一つで政道に破綻をきたしたくない。名君としての声望を失いたくない。

そのための、楯となる分身が、水野忠之ではないか。

六月下旬（享保七年）、吉宗は忠之と、侍講の一人である室鳩巣を休息之間に召し出し、財政を抜本から立て直すための、忌憚のない意見を求めた。

氏倫と久通を、離れた位置で陪席させ、見届け役をつとめさせる。

発案に期待はしていない。これまでにも、両人に何度も意見を求めてきている。それゆえ、世間へ向けての手続きといえた。

室鳩巣は、当年六十五歳。十五歳で加賀藩の江戸屋敷に招かれ、藩主前田綱紀に進講したほどの英才である。その綱紀の命で京都へ遊学、時の大儒者木下順庵の門に入り、新井白石と並ぶ逸材と称された。正徳元年（一七一一）、白石の推挙で幕府の儒官となっ

ている。

吉宗の世となり、旧制に密着しすぎていた新井白石は失脚したが、鳩巣の地位に変動はない。時に応じて、法律や道徳について吉宗の諮問に与っていた。

一儒官であるが、諸大名の屋敷にも出入りしており、駿河台に拝領屋敷を構えているところから、「駿台先生」と呼ばれ、世の尊崇を集めていた。門弟も多い。

その言が口伝えにひろがることで、影響力は大きい。

その効果を狙い、経済についても一言を有しているところから、忠之と協議させたのである。

忠之の進言は、

「上様の、これまでの御方針通り、節倹をさらに徹底させ、冗費を見出して省き、さらには、お役につかざる無為徒食の小普請組数百人の召し放ちも、やむをえないのではないかと、存じたてまつりまする」

「三河以来の、旗本、御家人を、路頭に迷わせるのか」

吉宗は、故意に、驚きの声をあげる。

鳩巣も、目をみはっている。

「幕府という全体を生かすためには、一部分の肉を削ぎ落とす処置も肝要かと」

忠之も悲痛な表情である。

「われの身を削られる思いがする。召し放ちは、最後の手段にしようではないか」

吉宗は、しみじみと語る。

仁を説く儒者鳩巣の目に、ほっとした色がうかぶ。
「忠之、ほかに方策はないものか」
「平凡ではございまするが」
「平凡こそ大事」
「年貢の増加を計るほかはございませぬ」
「そうよのう。年貢は幕府収入の基盤である。切米取りの小普請組は、主として百俵とか二百石取りといった小身者であろう。それらを、二、三百人召し放ったとしても……」
吉宗は算用は得意である。
「四、五万石の節約になるかどうか。実収五万石の新田の開発をすれば、二、三百人の幕臣とその家族を、泣かせずにすむことではないか」
「御意」
忠之は、しかし、浮かぬ顔である。
「なれど、新田の開墾が成功いたしましても、年貢の増加に結びつくには、何年もかかりまする」
さすがに勝手方老中である。画餅に近い話には乗ってこない。
「幕府は永遠につづくのじゃ。目先の処置も大事であるが、抜本の対策としては、遠大なる計画を地道に進めるほかはあるまい」
「御意」
「目安箱の投書により発見された下総、上総の荒地じゃが、あれよりの収入は、いかほ

どに見積もっておるぞ」
「東金という地域が最大とのことにて、その地で五、六万石の見込みとの報告をうけておりまする」
「それみよ。今もって、隠れたる荒地は、各所にあるやも知れぬ。風水害によって放棄した田畑、農民逃散による捨て田畑、それらを丹念こまめに掘り起こしても、何十万石もの増収入になるのではないか。地方巧者を督励し、治山治水の工事と併せて、池、沼、河川の流域、河口等を干拓すれば、新田はさらに広がるはずじゃ」
新田開発による増収は、紀伊藩時代に成果を上げ、体験ずみである。
「今一度、徹底調査させてみよ。財力を有する商人に、新田開発を請け負わせるのも手であろう」
誠実周到な忠之は、用意の手控えに、吉宗が語る要点を矢立の筆で走り書きしている。
「今一つ」
吉宗は、忠之の筆の休みを待って、重要なことを述べるように、しばし言葉を止めた。
忠之が、吉宗を注視する。
「僻地に存する山林、湖沼等は、公領（天領）と私領（藩領）、あるいは私領同士が入り組み、どちらともつかず、放置されたままの土地もあるにちがいない。諸大名に命じ、それらも探し出させ、開拓するよう指示するのも、方策ではあるまいか」
三河岡崎五万石の領主である忠之は、おのれの藩領の国境を思いうかべるかのごとく遠くへまなざしを投げ、私領の開墾が幕府の収入にどう結びつくのか思案している風

である。

吉宗は、すぐに、忠之の胸中を察した。

「公領と私領の入り組みは公領として耕し、私領と私領の入り組みも、幕府の費用によって開発してもよい。むろんのこと、年貢は幕府が徴収する。かような案ではどうであろうか」

忠之は首をかしげる。

「恐れながら、公領と私領の境は折り合いがつくと存じまするが、私領の入り組みを公領の収入にすることに関しては、異論が、諸大名から出るのではございますまいか」

「ちと、強引すぎるか」

苦笑した吉宗は、戯れ言のように、つぶやいた。

「私領を、公儀が開発の名のもと、かすめ取ろうとする、など、あらぬ疑いをかけられるやも知れぬのう」

忠之は、吉宗の真意がつかめず、困惑した面持ちである。

吉宗は、あっさり、その件を打ち切り、目を室鳩巣へ向けた。

「待たせた」

「ははっ」

鳩巣は形をあらためる。

「このほかに、財政立て直しの妙案があれば、聞きたい」

「妙案と言えるほどではございませぬが、即刻、財政難を救う方法はございまする」

「ほう、それは耳より」

吉宗は興をかき立てられた振りをしたが、鳩巣の言い分はわかっていた。

「恐れながら、過日、申し上げたことがあるかと存じまするが、最も不当なる利得をむさぼりおりまする、主として京、大坂の、両替屋をはじめといたしまする商人どもから、こぞって献金させますれば、一年、二年分の公儀御支出を賄えるのではございますまいか」

案の定である。

先代の政道に深くかかわっていた同門の先輩新井白石と鳩巣が交わしたという、有名なやりとりを、吉宗も仄聞していた。

白石が、「天下の利得は両替商の掌に落ちたるの感あり。両替仲間の三十人くらいを処刑すれば、万民の不満は半ば解消されるのではなかろうか」と、憤慨の言をもらしたとき、鳩巣は、

「三十人でも五十人でも引っ捕らえ、磔にすればよろしかろう」

と、煽ったというのである。

今、鳩巣は、将軍の面前ゆえに過激な言を弄するのを憚っているが、次のように進言をつづけた。

「本来、豪商と呼ばれる者が溜め込みおりまする金貨、銀貨、財宝のたぐいは、皆、天下を統治あそばされまする上様のものと申してよく、必要に応じて召し上げてさしつかえ御座なく、御憐愍のお情けにて、少少の利息をつけて、当分の借り上げとなされるの

もよろしいかと。とにもかくにも、富が一部の商人にのみ偏り、大公儀をはじめ万民が苦しむ現状は黙しがたく、素直に従わざる商人がござれば、断然、お取り潰しもしかるべきと存じたてまつりまする」

老顔を赤く染めて、熱烈に持論を吐露したのである。

吉宗は、ちらりと、彼方を見やった。

氏倫は苦虫を噛みつぶした表情であり、久通は目を閉じて居眠りの態である。

「駿台先生の説には、理があるようにも思えるが……」

吉宗は、おだやかに語りかける。

「士、農、工、商、いずれも、分に応じて、それぞれの働きをしており、世の役に立っておるのじゃ。富が偏るのは不都合ではあるが、さりとて、権力をもって、没収するは、理不尽の非難をまぬがれまいぞ。商人にすれば、知恵をしぼり、人一倍働きつづけて溜め込んだ利得は、正当と考えているであろう」

心外といった表情の鳩巣が何か言上しかける。

「まあ、待て。われは、ことさら、商人の肩を持つわけではないぞ。学者には、わかりかねることかも知れぬが、この世の仕組みは入り組んでおってのう。そのほうが申すように、溜め込みおる金銀を洗いざらい献上させ、従わざる商家を取り潰して財宝を召し上げれば、たちどころに金融はとどこおり、世の混乱は計り知れない。困窮するのは、公儀をはじめ、諸大名、旗本であり、庶民もまた給金の支払いが遅れ、店には品物が並ばず、飢え苦しむという事態に、めぐりめぐってくるのじゃ」

鳩巣め、それこそ、鳩が豆鉄砲を食ったようであるな、と、吉宗は笑いを抑えて、とどめを刺す。

「のう、鳩巣」

「はーっ」

「今どきの将軍は、かほどに経済のことを、大局に立って、考えておるのじゃ。深山にて孤高を保つ聖者ならばいざ知らず、幕府に仕える学者であれば、心狭い正義心、道徳心に偏らず、大局に立って学問を活用してもらいたいものである」

「ははーっ。恐れ入りたてまつりまする」

鳩巣は額を畳に押しつける。

水野忠之は感じ入った面持ちであり、彼方の氏倫と久通は安堵の色をうかべて澄ましこんでいた。

吉宗は言葉を継ぐ。

「それにのう、商人からの献上金、借り上げは、当座の一時しのぎに過ぎぬ。やはり、幕府百年の計を念頭に置き、対策を立てるのが本筋であろう」

この日は結論を出さず、課題を残した形にして、吉宗は散会とした。

三

七月一日。吉宗は老中首座戸田忠真と、勝手方老中水野忠之を御座之間に呼び、

「財政の事につき、親しく話したき儀あり。明後、七月三日、正五ツ（午前八時）、諸大名に総登城を命ずるように」

と、言い渡し、すぐに上段之間から退座した。

翌二日。吉宗は、居残るよう伝えていた水野忠之を、老中をはじめ主だった役職の者が下城した夕刻、休息之間に召し出した。

水野忠之に有馬氏倫、加納久通を加え、吉宗は下段之間へ下りて、車座になり、密議およそ半時（一時間）。

その後、三人は吉宗と夕食を共にした。

吉宗の食事は、依然、一汁三菜の、蔬菜料理を主とした粗食である。一日二食を厳守しているが、精白しない玄米の飯を何杯も豪快に平らげる。

この夕、いつもならば吉宗同様に健啖ぶりを発揮する股肱の氏倫と久通の食が進まず、忠之に至っては、ほとんど喉に食物が通らない有様であった。

粗食が口に合わないのではない。忠之も、将軍に倣って、玄米の飯と蔬菜を主とした食事を励行しているからである。

吉宗は、この日、はじめて、誰にも思いつかないであろう、財政再建の秘策を三人に打ち明けたのであった。

「勝手方老中のそちが、窮余の一策として考え出し、われが、その献策を、将軍家として恥辱をかえりみず、承認した。かような段取りにいたせ」

吉宗は、先刻、このように、冷然と忠之に命じたのである。

七月三日。

幅広い環濠からほのかに立ちのぼり、たなびく朝霧のなか、江戸城大手門前広場は、ごった返していた。

乗物・駕籠・乗馬をはさんだ仰仰しい供揃えの大名行列が、何十組と鉢合わせをしている。

それぞれ特徴のある槍を立てた大小の行列は、なおも、縦横左右にのびる大名小路を埋めつくし、日本橋の彼方まで陸続と絶え間がない。

声をからして整理にあたる幕府役人の指図に従い、広場で人数を減らして順番を待つ大名行列は、整然と大手門橋を渡ってゆく。

枡形に入り、豪壮な渡り櫓造りの大手門をくぐると、下馬下乗広場で、一帯は人の渦である。ここで供揃えをさらに減じ、大名は数人のみを従え、徒歩で本丸大玄関へ向かうのである。

在府大名の総登城であった。

俗に三百諸侯という。享保のこの時代、大名は二百六十数家。参勤交代で在国の年にあたっている大名家も、世子、あるいは隠居（前藩主）が名代をつとめるので、二百六十数家の行列が江戸城をめざすことになる。

正五ツ少し前、本丸大広間では、名代をふくむ三百諸侯が、家格や慣例に従った席次で着座しおえた。

中段、下段、入側まで、膝を接するほどの詰め込みである。

儀式日ではないので、服装は月並み登城に準じた半裃である。年始拝賀の、直垂狩衣、長裃等の礼装ではないが、それでも大名が一堂に会する姿は壮観であった。

時刻になると、吉宗は休息之間を出て、老中安藤対馬守重行の先導で、御成廊下づたいに大広間へ向かう。

老中に就任して一ヵ月半に満たない安藤重行は、将軍先導という大役に、足がもつれぎみである。

吉宗も、久方振りに緊張を覚え、足の運びがぎこちなかった。

(大名とて家来)

何を命じても、唯唯諾諾、服従あってしかるべき。

(それに、たいしたことを命じるわけではない)

歩を進めながら、吉宗は胸の内で、おのれに言い聞かせる。

松の廊下にさしかかると、大広間の、ざわめきというほどではないが、大勢の人が寄り合うときに発する細波のような音が耳に入った。

それも束の間、お成りの声が掛かって、細波の音が急速に引き、本丸御殿全体が静まり返る。

この瞬間を、吉宗は好む。

将軍の絶大な権力を実感するのである。

上段之間に入り、一座を見渡すときも、吉宗の全身に快感が走る。

御三家をはじめ、連枝の越前福井松平家、加賀百二万石の前田宰相、薩摩七十七万石

の島津中将、独眼竜政宗の血脈を引く陸奥仙台六十二万石伊達少将、井伊の赤備えとして武名をとどろかせた直政の末裔である彦根三十五万石井伊侍従ら、いわゆる一国一城の主二百六十余人が、上半身を平にし、額を畳につけるように拝礼しているからであった。

だが、今、一座を見渡した吉宗は、同じ形で平伏している三百諸侯の背のひろがりに、突然、動悸が高まったのである。

いっせいに面を上げたときに、往往にして受ける一種の威圧を、脅えをもって予感したからにほかならない。

異例の総登城が、諸大名を疑心暗鬼にしているであろうことは、想像に難くない。各藩江戸屋敷の用人や留守居役が八方へ走りまわったことであろう。

有馬氏倫と加納久通の屋敷にも、総登城の真意を探りに多くの人士が訪ねてきた、との報告である。両人の口は固い。

公示通りの、

「財政の事につき、親しく話したき儀あり」

のほかは、聞き出せないはずだ。

示唆が与えられるとすれば、老中首座の戸田忠真と老中安藤重行からであろうか。

六月下旬、吉宗は勝手方老中水野忠之と儒者室鳩巣を召し出し、財政立て直しについて協議した。要職にあることの自覚が強い忠之は、口を噤んだままであろう。

その忠之は、課題を残した形であった休息之間での諮問を、老中御用部屋で協議し直

したにちがいない。その内容を、忠真と重行が、一族の大名や縁者の懇願で、ほのめかすことはありうる。

今一人は、室鳩巣である。鳩巣は、口が軽いというのではないが、講義を天職と心得る学者であるから、しゃべりは得意であった。六月下旬の休息之間での、各人の発言と、

（われの意向は……）

その一端は漏れているであろう。

（それでよし）

じつは、これらの漏洩は、吉宗の狙いであり、仕掛けだったのである。

吉宗が秘める真の政策を隠し、一気呵成に事を決するための、いわば囮作戦であった。真の政策を、諸大名が事前に知るところになれば、その善し悪し、可否は別にして、譜代大名を中心に、東照大権現以来百二十年余保ってきた徳川家の幕府の威信を失墜するものとして、ごうごうたる非難が巻き起こるであろう。

同時に、吉宗が秘める政策は、いずれも財政難に苦しむ諸大名にとって、少なからぬ痛手になるであろう。

だが、十六万両の借金を返済できず、また金融面でさまざまなしがらみがあり、それゆえに両替仲間をはじめとする豪商に強権をふるえない幕府ではないか。この上、献金や御用金を課して、さらに首の根っこを押さえつけられる愚は、断じて避けねばならぬ。

であれば、幕府財政を立て直す即効策は、

（この一手のみ）

吉宗は、下腹に力をこめ、
「面を上げよ」
と、平伏したままの三百諸侯に声をかけた。
いっせいに髷がゆれて、頭が上がる。
だが、大名といえども、将軍を直視することはできない。恐れ多い気持を態度であらわし、目を伏せておくのである。
しかし、今日は、やはり様子がちがう。上目遣いに、吉宗の表情をうかがっている大名は二、三人ではない。
用人や留守居役同士を通じての風説のひろがりは、じつに速い。
恐らく、諸大名の耳には、新田開発に関して吉宗が述べた二条の言葉――
「公領と私領の入り組みは公領として耕し、私領と私領の入り組みも、幕府の費用によって開発してもよい。むろんのこと、年貢は幕府が徴収する」
の案と、
「私領を、公儀が開発の名のもと、かすめ取るとする、など、あらぬ疑いをかけられるやも知れぬのう」
という戯れ言まじりの、この二つが入っているであろう。
大名としては、領地の問題は重大事である。
この案に対する、親しい大名同士の話し合いは進んでいるかも知れない。
吉宗は、この政策を推し進めようとすれば、困難なことがいくつも出て、収拾がつか

なくなることを知っている。即効策としては用いることのできない、財政再建案であった。それゆえ、囮である。

吉宗は、皆の意表をつき、一気に事を決しようとする初志を確認した。

「本日の総登城は、余の儀ではない」

緊張のあまり、右の耳の下がひきつっているのを、吉宗は感じる。

「一同も承知と思うが、幕府をひらいてより、およそ百二十年、未曾有の大火もあり、そのほか、歴代、さまざまな出費が嵩み、われが江戸城に入ったとき、すでに金蔵は底をついておった」

吉宗は、ようやく、気持の落ち着きを覚える。声に乱れがなく、よく透っているようであった。

一座を見渡す余裕も生じた。

あわてて目を伏せる大名も少なくない。

「このままでは、国費支えがたく、三河以来の家人（幕臣）のうち、数百人も扶持をあてがえず、召し放つほかはない。これは、神祖東照大権現に対したてまつり、申しわけない次第である。よって、……」

吉宗は、あやまりなく伝わるように、言葉をゆるめる。

「幕府創始以来、前例なしといえども、われの恥辱はかえりみず、命ずるものである。すなわち、一万石の高より、米百石宛、幕府に捧げ、忠誠の証とするよう。なお、この事、昔の軍役同様と心得よ」

大広間には、あまりに意外な将軍御諚（ごじょう）のためであろう、異様なるうめきが流れる。

吉宗は、ゆるやかに言葉をつづけた。

「和泉守（水野忠之）には、勝手方老中としての献策をもとに、節倹の徹底、ならびに新田開発等、財政再建の工夫をさせておる。しかしながら、すぐに金蔵が満たされるわけではないゆえ、何年かの間、忠誠を期待する次第である。詳細は、この後、和泉守が述べる」

吉宗は、悠然と、座を立った。

四

諸大名を総登城させ、将軍が直直、所領一万石につき米百石の割り合いで上納し、幕府財政を扶助せよ、と命じた「上米（あげまい）令」は、幕府はじまって以来、これほど奇抜な仰せ出しはないと、冷笑をふくむ批判の声は少なくないようである。

六十五年前に江戸の大半を焼いた明暦の大火をはじめ、諸大名の領内や江戸屋敷での災害、凶作等に対し、幕府が救済金、見舞金を出すのは慣例である。藩が拝借金を願い出ることも、めずらしくなかった。

紀伊藩も例外ではない。寛文八年（一六六八）に、吉宗の父・光貞の時代であるが、幕府より十万両を借りている。その返済が重荷になって、藩財政を悪化させる一因になっていた。

というのは、五代将軍綱吉が逝去した宝永六年（一七〇九）、将軍代替わりにあたり、幕府は諸藩に拝借金の返納を督促したからである。

諸大名の窮乏が幕府以上という実情は、論を俟（ま）たない。宝永六年の督促で何とか返納しおえた諸藩は、新たに拝借金を願い出たいところであろう。

それを、逆に、吉宗は、事実上の借金を、三百諸侯に課したのである。

しかし、吉宗は、負担のみを強いたのではない。これも、誰もが思いつかないであろう、大きな見返りを与えていた。

七月三日。大広間の上段之間から、吉宗が悠然と退座した後、水野忠之は今一度、上米令の要旨を説き聞かせ、次のように付言したはずである。

「上納は、新田開発等による増収穫が御金蔵の実入りとなるまで、十年、さよう十年はつづくと心得られよ。ただし、上様の格別なる御仁慈により、この間、参勤交代の期間をゆるめられ、一年の江戸在勤を半年に短縮のこと、お許しなされた。一年半の在国、半年の在府は、藩財政にとって、何よりであろう。すなわち、それにて浮く諸経費は、上納の分を上回り、藩財政を好転せしめるはずである。ありがたく、お受けするよう」

吉宗が放った御広敷伊賀者の報告は、さまざまである。

「外様大名家におきましては、概して、上米の御令を、よろこんでおりまするよう、見受けられまする。参勤交代の短縮が、大いに経費節約になることが、勘定方等の算計にて、わかってきたように推量されまする」

紀伊藩薬込（くすりごめ）役系の御広敷伊賀者は、享保四年（一七一九）の二月、広敷番頭（ばんがしら）の支配下

にあっても、内実は側役（掛は有馬氏倫、加納久通の両人）の指図を受けるよう改められ、大奥御殿の北にある天守閣台座近くの庭に番所が設けられた。

御庭御番所と名づけられ、そこに詰める御広敷伊賀者を、俗に御庭番と呼んだ（享保十七年・一七三二、御庭番は御休息御庭之者の名称で、正式職名となる）。

「譜代の大名家におきましては、おおむね、経費節約の利得は表立って論ぜず、上米の令が軍役同様という仰せ出しでありますれば、謹んで忠誠を示すのみ。異論は、御家を危うくするゆえ無用と、家中一統、小者に至るまで、御政道に関する雑言を固く禁じているように見受けられまする」

中奥御殿の西端に、大奥へ渡る上御鈴廊下がある。その手前に、御駕籠台と称する昇降口が設けられてあった。

吉宗は、近ごろ、左右を高い塀でさえぎられたこの場所に御庭番を呼び、密命を与え、報告もうけている。

今しも、台の下にうずくまって、この家系の者独特の、至近ではよく伝わる低い声で言上しているのは、明楽政晴であった。

政晴は、吉宗が敵地に乗り込むに似た気持で紀伊屋敷から江戸城入りをした当初、宗家相続についてのさまざまな風説を集めて有能であった明楽正親の倅である。

正親は昨年（享保六年）の六月、老耄のゆえをもって、嫡男政晴に家督を譲りたいと、有馬氏倫を通じて願い出た。

吉宗は快く許し、老後をよく養うよう、氏倫に伝えた。ところが、数日後、氏倫が異常なる注進をなしたのである。

「薬込の……」

氏倫は思わず古い職名を口走り、

「正親が自害して果てましてございまする」

「自害とな」

「はっ、腹を切り、返す刀で喉を突いた由」

「なにゆえじゃ」

めったに驚きを表へあらわさない吉宗の声が甲高い。

「書き置きがございまする」

巻紙を、氏倫が捧げる。

担当の上司である氏倫宛ての遺書であり、急ぎ読む吉宗の目が湿ってゆく。

正親の筆致に乱れはなく、簡明であった。

冒頭で、長年の恩寵への謝意を記し、次いで、心身の衰弱が急激にて、乱気狂病の兆しも自覚する。機密に深くかかわった者として、万が一、あらぬ事を口外するようになっては取り返しがつかない。よって、自ら口を封じる愚挙をお許し願いたい。

このような大意であった。

「壮絶にして……不憫」

とりわけ重用していただけに、万感がこみ上げてくるのであろうか、魁偉なる吉宗の

頬に涙が伝わる。

「この泰平の世に……そこまでせねばならないのか。そうさせるのは、われなのか」

沈痛なつぶやきであった。

「正親は、主として尾張家の内情に精通しておりましたるゆえ、おのれを厳しく処したのでありましょう」

氏倫は冷静であった。だが、老いが目立つ顔面の、額の刀傷が赤く染まっている。

「正親の自刃、忠義無比と讃えねばならぬのであろうが、前例となってはならぬ」

吉宗は、平常に戻って、指示した。

「病死ということにし、向後、機密漏洩の恐れに対しては、久通とも協議し、別の手段を講ずるように」

「はっ」

「隠退する毎に自害するがごとき、悲惨なる慣習ができれば、公儀の恥であり、第一、薬込から引き継ぐ庭番の家が絶えてしまう」

吉宗の声には、死を賭して隠密の任務に従事する、身分の低い陰の忠臣たちへの慈愛がこもっていた。

御駕籠台下での、明楽政晴の言上はつづいている。

「総じて、このたびの上米の令は、日がたつにつれて、主旨が正しく解され、好評をもって受け入れられているように探知されましてございまする。なれど、尾張家のみは、

お国元は存じ上げませぬが、江戸におきまする市谷上屋敷、麹町および四谷の中屋敷、高田穴八幡にございまする下屋敷、木挽町築地のお蔵屋敷、いずれも、公儀のなされようへの批判が、あからさまに、この耳に入りましてございまする」

吉宗に動揺はない。

尾張藩からは、付家老連署の意見具申が老中御用部屋へ提出され、それが吉宗のもとに届いていたからである。

東照神君家康は、御三家を立てるにあたり、直臣のなかから大名格の重臣を、それぞれの家に数人ずつ配した。

尾張藩には、譜代の家老家として、成瀬隼人正、竹越壱岐守らが付けられ、両人が最も力を有している。

付家老の任務の最大は、例えば、紀伊藩に付けられている三浦遠江守為隆が、江戸城入りをする主君吉宗に、

「恐れながら、それがし、神君家康公より、紀伊家を補佐せよ、との命をうけましたる家系」

と前置きをして、忠言をおこなったように、家康が創始した制度、遺訓を守って主家を誤りなく輔導し、同時に幕府の藩屏としての任を全うさせることにあった。

尾張家付家老には、御三家筆頭の家柄であるだけに、とりわけ第一の藩屏たらんとする意欲が強い。

成瀬、竹越両家老がつづった意見具申書の要旨は、

「公儀の御命令に違背するがごとき不埒なる思惑は、毛頭たりともございませぬが、藩屏筆頭の家に付けられた者として、神君家康公お定めの御祖法を歪めたてまつるに似たるこのたびの御諚に黙するのも、家系の責務に反すると考慮し、両人の一存にて、申し上げるべきことだけは申し上げておきまする。すなわち、将軍家が直直、臣下に借米を命ずる、軽きお振舞。見返りに、参勤交代の大法を御一存でおゆるめなされるのは、いかがなものでございましょうや。後年の禍根にならぬかと、憂慮する次第でございまする」

というもので、嫌がらせに近い苦言であった。

困惑の老中には、

「捨ておけ」

と、吉宗は意に介さぬ振りをした。

だが、神君家康の御名や御祖法を持ち出されると、宗家と将軍職を継ぐ家康の末裔として、始祖を崇拝し、神君に倣おうとしている吉宗は苦しい。心が苛まれるものがある。

自ら、「幕府創始以来、前例なしといえども、われの恥辱をかえりみず……」と、告白しているのにもかかわらず、

（武士の情けを解せぬ輩）

と、尾張家主従へ怒りがこみ上げる。

付家老両人の一存、と断っているのは、万が一の場合の責めを負う手立てにほかなら

ない。

尾張家当主継友と重臣、さらには平侍、下屋敷や蔵屋敷の小者に至るまで、尾張側の目からは将軍位を奪ったかに見える紀伊家出身の吉宗へ、遺恨は消えていないであろう。事に乗じて落度をあげつらい、できうれば失脚へ追い込み、継友を将軍に擁立したい野望は消していないにちがいない。

吉宗は、ひところ、尾張家からの報復に気をとがらせた。とりわけ毒殺を警戒し、食事の毒味は念入りにおこなわせたものである。

代替わり当時、八代将軍は御三家筆頭の尾張家から出るとされていたにもかかわらず、当主が、吉通、五郎太と相次いで急死をとげてしまった。

これは、将軍位横奪を企む紀伊家が、陰の者を使い、「毒をまいらせた」という噂が立ち、尾張家の上下を騒然させ、吉宗は身の危険を感じたものである。

この尾張家の内情を探って報告したのが自刃した明楽正親であり、その倅の政晴が、今、尾張藩の動向について言上しているのであった。

政晴が耳に入れた雑言のたぐいは、付家老両人が老中へ差し出した意見具申と大差はなく、吉宗憎しの尾鰭をつけた、いわゆる下衆のうっぷん晴らしである。

それとは別に、巷の声で、吉宗の胸にこたえる政道批判もあった。

「高田穴八幡の尾張家下屋敷周辺からの帰路、牛込神楽坂の一膳飯屋に寄ったのでございまする。あの界隈にも大名屋敷が幾つかございまして、宵の口をすぎまするると、足軽、中間、下働きといった奉公人が溜まりまして、安酒などを飲み、にぎやかなものでござ

いまする。自然、口も軽くなり、上米の御令にかかわりまする、このような話を耳にいたしましてございまする」

泣き上戸とおぼしき中年の折助（武家の下働き小者）が、町医者風の老人相手に、涙声でくだを巻いていた、と政晴は言上する。

折助は、主家から暇を出されそうになっているらしく、それが、上米の令によって、一万石につき百石分の人減らしをしようとしているためという。

「公方（将軍）さまは、お旗本の扶持があてがえず、召し放つほかはないゆえ、大名に扶助せよとお命じになったというが、そのために、こちとらが召し放ちになってしまう。参勤交代の江戸在府が短くなって、その分、経費が浮くというのに、上米御用を口実に、お侍の扶持を削ったり、わしら文句も言えぬ弱い者を追い出そうという魂胆じゃ。このような愚痴でございました」

政晴は、父の正親がそうであったように、時折、言いよどむ。しかし、御庭番は見聞したことは、将軍批判であろうと、そのまま申し上げるのが掟である。

無表情を保って聞く吉宗も、つらい。折助の愚痴には胸塞がる思いであった。

（将軍たる者、巷のごくごく小さき事に心を乱すべきではない）

と、気を猛く持ち直そうとしながらも、

（われは、並みの将軍ではない。小事をも見逃さず気を配る。それが正しき政道ではないか）

このようにも反省するのである。

五

上米令がもたらす幕府の増収は、年間、十八万七千石と算計された。

知行取りは別として、幕府が旗本・御家人に支払わねばならない切米・扶持米は三十七万石余りであるから、労せずして、その半額を賄えるわけである。

これで、とりあえず、俸禄の遅配、欠配の憂いは解消した。

一方、大名と随従家臣団の路銀および江戸屋敷滞在費が、藩の年間収入の五割前後を占めるとされる諸大名にしても、参勤交代期間の短縮は、上米の出資を補って余りある利得となっている。

上米令を口実にした人減らし策が一部にあったとしても、それは藩の事情であって、将軍の関知するところではない。

尾張藩の意見具申は、正論に似ているが、私怨に根ざしている。ゆえに同調する大名は無く、大勢が上米令を可としていた。

「八方めでたしと言えるはずであるが……」

つぶやく吉宗は、休息之間で、頭をかかえる日がつづく。

庶民は、必ずしも、吉宗の施策を善政と讃えないのである。

先ず、参勤交代の大名の在国が一年半に延びたことで、定まりの収入が激減する街道筋の本陣をはじめ宿場、人足、関連の商人等が悲鳴を上げた。

同様に、大名の江戸屋敷滞在が半年に短縮されたことで、臨時の奉公人が職を失い、出入り商人も取り引きが半減して、生計が立たぬ、と目安箱に嘆願が相次ぐ有様である。

「生計が立たぬと言うは、上も下も、贅沢に慣れたからである。質素、倹約に徹すれば、相応の暮らしは成り立つはずである」

食膳における唯一の楽しみであった酒も、三献を一献に節して範を垂れている吉宗は、このように考えるのだが、側近の加納久通までが首を横に振り、

「金は天下の回り物、と申しまして、倹約や溜め込みばかりでは、金銀が死蔵し、世の中は沈滞いたしまする。血気が滞らず五体をめぐれば心身健康でありまするがごとく、金銀もほどよく万民の間をめぐるようにいたさなければ、世に活気は生じませぬ。何か、景気を上向ける手立てを講じませんことには、江戸は病み、衰えまする」

と、吉宗の持論に同意しないようになっている。

江戸府内の、商家の実情探査を命じた御庭番数名も異口同音に、

「節倹令、並びに贅沢と目される物の売買御停止、それに参勤交代の短縮によりまして、立ち行かなくなり、倒産をいたしましたる商人は、急に増えましてございまする」

と、それぞれが実例を申し述べた。

絹織物を扱う呉服屋、塗物問屋、雛人形等節句の高価な飾り物を扱う問屋、その職人たち。伽羅の油屋、鼈甲櫛簪細工所、蒔絵師、高級菓子舗、料理茶屋。

冠婚葬祭の簡素令によって影響をうけている諸業者。

新築、改築が激減したため、立ち行かなくなった材木問屋、建具屋、大工、指物師、

御用絵師。

酒問屋、居酒屋、芝居小屋、遊所もさびれて、芸者や芸人も職を失い、泣いているという報告もあった。

「恐れながら、公方さまは貧乏神と、お恨みする声もございまする」

このような風評をもたらす御庭番もいる。

（貧乏神とは、心外）

吉宗は悲しみに襲われる。

財政難ゆえの節倹令、金詰まりゆえに無駄遣いをやめ、地道に暮らすよう諭達する贅沢禁止令ではないか。

（われが、将軍が、率先垂範しておる）

にもかかわらず、武士も庶民も内心不満のようで、素直に従わず、生計が成り立たなくなると、

（逆恨みに、われを恨む。なにゆえぞ）

吉宗は、休息之間で、人知れず悩むのであった。

贅沢禁止令で倒産するというのであれば、生きてゆくのに必要ではない奢侈品を扱う浮薄の商(あきな)いをやめ、万民が生きるために必需な米づくり、野菜づくり、土鍋焼き、食器づくり、草鞋(わらじ)編みなどをやればよい、と吉宗は考える。

だが、不思議なことに、この健全にして正道と信じる処世法を、

「御意にございまする」

「仰せの通りでございまする」
と、老中も、側役も、小姓たちも、口では言うが、明らかに納得していないのである。
といって、格別の献言があるわけではない。
吉宗は苛立ちを覚える。
折しも、幕府御用達の豪商連が手を組み、金詰まりを申し立て、あらためて長年の未払金の清算を願い出てきた。
「いかが取り扱いましょうや」
苦悩に顔をゆがめた、勝手方老中水野忠之の伺いである。
「総額、たしか、十六万両であったな」
「御意。本来ならば利息も少なからずございまするが、それは遠慮申し上げると、かような口上もあった由」
「利息は遠慮か」
屈辱の思いで、吉宗の右目の下が、しばし、ひきつる。
「常憲院さまの世からの累積にて、御当代には、かかわりはございませぬ。なれど、時節柄、無下にもできかねまする。適当なる額の年賦にて、返済してゆく方策もございまするが」
「無用」
吉宗は、厳しい表情で、断固、言い切った。
「恐れながら、それでは、事が、こじれまする」

忠之は、再考を求める、悲壮きわまる気色である。
「それゆえ、一時に、全額を払ってしまうのじゃ」
「な、なんと……」
意外な御諚が二度つづき、忠之は言葉を失う。
「ただし、一時払いを望む者には、三分の一を減ずる。十年の年賦を承知する者は、利息は付けぬが、全額を返済する。このように伝え、折衝させるよう」
吉宗は冷静に指示した。
御用達商人への未払金の件は、かねてから、吉宗の心に掛かっていた。この借金も一つの引け目になって、幕府は豪商に強く当たれず、先年、両替仲間の横暴を許し、町奉行大岡越前守に無念の涙をのませている。
おのれが抜擢した吏僚の無念は、吉宗自身の無念にほかならない。
吉宗政権の責任ではないにしても、負債は一刻でも早く、下世話に言えば、
(叩き返し)
幕府の面目を保たねばならぬ、と吉宗は念じ、返済の方策を考えていたのである。
「忠之」
「はっ」
「今年より、上米による増収が見込まれる、それを返済に引き当て、明確に清算した後は、商人との腐れ縁を断つよう、綱紀粛正を、あらためて諭告せよ」
吉宗は眼光鋭く命じた。

御用達商人への支払いは、この年（享保七年）の暮れにおこなわれた。大半が一時払いを望んだので、十六万両の、およそ三分の一の差し引きで、支払い総額は十万両余であった。

当面、贅沢禁止令の緩和を引き出せばよいと、その程度の下心であったらしい豪商たちは、半ばあきらめていた大金が一時に入って、

「さすがは天下一公方さま、名君であられる」

と、大よろこびで、褒めそやした。

天下一、というのは流行り言葉であった。天下一の三字の画を合わせると八画になる。それと八代将軍治世を結びつけ、吉宗、あるいは御当代を讃えるときに冠するのである。

一方、この大出費で来春の切米の遅配が懸念される幕臣はもちろん、上米がこのような使われかたをすることに疑問を抱く諸大名の間でも、庶民からも、

「上様は大商人に甘い」

「将軍家は天下国家を領ろしめす器量にあらず、せいぜい紀伊一国の殿さまじゃ」

「天下一公方さまは、無駄遣いも天下一」

などと、悪評判を撒かれたものである。

財政再建のめどがつき、幕政は安定期を迎えていた。

節倹、綱紀粛正、防火対策、目安箱設置、窮民対策の一つとしての養生所開設、法律の仁慈をもっての整備等、改革の成果は確実に上がっている。

実用になる学問の奨励という主旨で、これまで禁じられていた洋書や医具、暦作成に必要な天文器械などの輸入も緩和した。

吉宗は、和歌や茶道といったところを苦手とするが、実用学には関心が深い。

中奥休息之間は、享保五年（一七二〇）八月の豪雨以来、雨漏りがいちじるしく、いかな節約将軍であっても老朽殿舎の建て替えを承認せざるをえなかった。

仮りの休息之間は、近くの座敷と廊下を間仕切って上段之間、下段之間をつくっている。だが、上段之間は、従来の十八畳より狭い。

吉宗は、そこを、さらに間仕切らせて一室をこしらえ、大きな机を置いていた。

机の上には、オランダ商館長献上の、星座を記した天球儀、測量に用いる象限儀、図解の多い洋書類、足の長いアラビヤ馬の模型、算学者建部賢弘に命じて作らせている日本総絵図の部分図などが置かれている。

吉宗は、また、季節による雨量の変化に興味を抱き、中庭に面した湯殿口に目盛りを刻んだ桶を置き、雨の日は自ら調べて記録しはじめていた。

洋学とともに、室鳩巣、荻生徂徠ら儒者も重用し、学問振興にあたらせている。

享保八年（一七二三）六月、門地が低く、禄が少ない者でも、役職に応じた俸禄を在任中に足し加える、足高の制を設け、人材登用に思い切った手を打った。

関連して、地方巧者や財政に秀でた下役人を抜擢し、勘定奉行に配して新田開発、年貢増収策に専念せしめた。異例の上米令を一年でも早く廃止して、幕府と諸大名との間を正常に戻すためには、農政改革による相応の増収を確保しなければならないからであ

る。

享保の新政は、多少の批判はあるにしても、この数代の将軍がなさなかった難題を避けずに取り組み、順調に進展している、と見てもよいのではないか、と吉宗は半ば自讃する。

だが、心は弾まない。

休息之間内の間仕切りの、大机の前に座って、何することもなく、ぽつねんと物思いにふけることが多い。

自讃のあとには、必ず、不安と懐疑がしのび寄るのである。

（人心は、われから、遠く離れていっているのではあるまいか）

よかれと熟考し、命じる施策のことごとくが、世に受け入れられていない気さえするのだった。

「御意にございまする」

「仰せの通りでございまする」

何事にも、老中をはじめ、氏倫、久通ら側役、日夜おのれに仕える小姓、小納戸といった近習たちも、このように答えて黙するのが通例となっている。

（面従腹背）

現に、御庭番を通じて伝わる巷の声は、施策に対する批判や将軍揶揄が増えてゆくではないか。

この年（享保八年）、吉宗は、ちょうど四十歳。将軍在任、足かけ八年であった。

絶えず倦怠感があり、心身の急激な衰えを自覚する。

「おからだを養うのは食物でございまする。お心を養うのは気でございまする。気の元でございまする元気も、お年を召されるにつれて、滋養ある食物を選ばずしては湧き出てこないものでございまする」

典薬頭の家柄である奥医師の今大路延寿院道三が、粗食改善を強く進言した。

氏倫、久通両側近の口添えも誠実に満ちており、吉宗は延寿院の進言を納れることにした。早速、蔬菜を主とした膳部に加え、魚肉、貝類、もずく、のり、わかめ、こんぶ、といった海のものの料理が目立つようになる。

一汁三菜の以前に比べれば、二倍にも三倍にもなった膳の数を眺めながら、

「われも、口驕りたる並みの将軍に、成り果てたるものよ」

と、照れ隠しに自嘲をして見せもするが、食通の評判も取った。

ある日、吉宗は、鯛の蒸し焼きを一口食し、

「これは、しめ鯛（死んだ鯛）であろう」

と言った。

小納戸頭取が台所頭に問い合わせると、時化で活鯛が上がらず、納入された昨日のしめ鯛で調理したことがわかった。台所人一同、焼き物で鮮度を味わい分ける上様に、恐れおののいているという報告である。

後日、吉宗は、

「あれは、味わい分けもあるが、長年、雨の量を測っておると、時化で釣船が出ぬ日は

わかるものよ」

と、笑っている。

このように食膳の変化はあったものの、依然、吉宗は政務にも倦み、うつうつとして楽しまない日がつづいていた。

心気を思い切り解き放つことができるのは、野山を駆け回る狩猟のほかにない。

吉宗は、敵地にも思われる江戸城に入った当初、固苦しい儀式や独特の慣習に追いまわされ、冷たいまなざしにも囲まれて、

「うんざりじゃ。将軍とは、なかなかもって、つらいものよのう」

と、久通にもらし、叶わぬことと知りながら、自由三昧を夢みたものである。

そして、五代将軍綱吉が生類憐みの令を発布して以来、三十年おこなわれていなかった鷹狩りの制度再興を老中御用部屋に諮問した。

鷹狩りは、東照神君が好み、奨励したことで知られる武芸であれば、直ちに、鷹匠、餌指、鳥見組などの諸役の復活が決まり、鷹場の整備も進められた。

将軍吉宗の初放鷹は、有章院（前将軍家継）の一周忌の喪が明けた、享保二年（一七一七）五月十一日であった。早朝、江戸城を出馬、両国橋より船で亀戸村へ渡り、向島一帯にかけて久方振りの狩猟を堪能したのである。

鷹狩りの情景を脳裏にうかべると、吉宗の胸は沸き立つ。

享保二年の五月以後、吉宗は余暇を無理につくって何度となく、陰気のこもる江戸城

を鉄砲、弓、槍の隊伍を組んで出立、陽気がひろがる原野を大声を発しながら駆け巡った。

陽光に万象が照り輝き、草いきれにむせかえる野道を行くとき、吉宗の胸に紀伊和歌山での無頼放蕩の日日がよみがえり、思わず愛馬に鞭を当て、随従の士をあわてふためかせるのが常である。

鷹場に入り、徒歩になると、並はずれた長身の吉宗は、前後を固める近習、諸隊士、勢子らの行列のなかにあって、頭部一つが抜きん出る。

それゆえに、天性の目敏こさとあいまって、はるか彼方の草むらを走る野獣を、誰よりも早く見つけることができた。

狩猟中、青天俄にかき曇り、土砂降りの雨に見舞われ、近くの禅寺で雨宿りをしたことがある。

吉宗は、びしょ濡れの衣服を下帯（ふんどし）ごとぬぎ、乾かす間、寺から借りた布を腰にだけ巻いて、縁側近くで悠然と茶を喫した。吉宗には万事、貴人としての気取りは全くない。

近習の若侍の多くは、

「許す。皆も裸になって乾かせ。夏とて、風邪をひくぞ」

と声をかけても、もじもじして、下着までぬごうとしない。

将軍の近辺ゆえの慎しみではなく、人前で裸になるのが恥ずかしいのだという。

折りから、天地を切り裂くがごとき雷鳴がとどろき、稲光が幾重にも走った。

いっせいに悲鳴が上がり、小姓組、書院番という親衛武官までが逃げまどう有様である。吉宗は泰然として動かない。

「上様、おへそを取られまする」

絶叫して走り寄り、金象眼された葵の紋章が入った吉宗の陣笠を捧げた忠臣は、随従目付の小笠原常春であった。小笠原流流鏑馬の家系で、その名手である。

「とりあえず、これにて、お隠しを」

雷が人のへそを好み、むしり取って食する、という俗説を信じない吉宗であるが、常春の真剣な表情に受け取り、

「このようなものでは、防げまいぞ」

へそは丸出しにしたまま、受け取った陣笠を、ひょいと頭にのせ、大笑いしたものである。

雨上がりに、隅田川上流から対岸の浅草待乳山聖天宮の森にかかった、雄大な虹の美しさが、吉宗の瞼に焼きついている。

こういう事もあった。

狩り場の混雑で、足軽がもつ鉄砲の先が、長身の吉宗の顎を突いたのである。

足軽は恐怖の声を上げて地面にひれ伏し、近習たちが血相を変えて、足軽を押さえ込んだ。

吉宗は、ゆったりと、あたりを見回し、

「近くに目付は、いないようであるな」

わざと声高に言い、

「それならば、咎める者はいない。過ちは誰にでもある。何事もなかったことにいたせ」

と、足軽を放免させた。

騒ぎに傍まで駆けつけていた目付は、見て見ぬ振りをし、遠ざかって行った。その目付も、小笠原常春である。

享保八年の四月、吉宗は山城淀より下総佐倉五万五千石へ移した、三十八歳の俊英松平左近将監乗邑を老中に任命し、御用部屋の充実を計った。

将軍親政の意欲がとみに薄れた吉宗は、安定期に入ったこともあり、政事の大方を老中に任せたいと思うようになったのである。

享保九年（一七二四）の十二月に、六十四歳の老練重厚の京都所司代、松平伊賀守忠周（信濃上田五万八千石）を老中に加えた。

これで、老中は戸田忠真、水野忠之、安藤重行、松平乗邑、松平忠周となり、吉宗が将軍に就任した当時の五人に復したことになる。

この五老中に、吉宗とは以心伝心の間柄である有馬氏倫、加納久通の両側役が参与すれば、

「われは、早、楽隠居じゃ」

と、戯れ言をもらし、一層、鷹狩りに熱を上げた。

享保十年（一七二五）三月二十七日、吉宗は下総小金原（千葉県北西部一帯）で、かな

り大規模な鹿狩りを挙行した。

老中松平乗邑以下、小姓組五十人編成四隊、書院組五十人編成四隊、先手組十二隊およそ四百五十人を本陣とし、足軽、勢子等を合わせると五千人を越える一行である。

収穫は、鹿八百余、猪三、狼一、雉十、であった。

「狩りは、何といっても、鎌倉将軍頼朝公が富士山の裾野で催したと伝わる、大巻狩りにとどめをさすであろう」

吉宗は、あこがれの目で、鹿狩りで大いに働いた若手老中松平乗邑に語り、大学頭林信充らに、その故事を調べさせることを命じた。

建久四年（一一九三）五月八日から二十九日にかけて、継続しておこなわれた富士野の巻狩りには名のある大方の武将が随従し、合戦さながらであったとわかる。

「さもあろう」

吉宗は、その情景を心のなかで浮かべるのであろう、魁偉な顔面を紅潮させた。

「われも源氏、将軍である。泰平の世に慣れた閣老を鼓舞し、惰弱を否めぬ旗本の気風を改めるためにも、われの治世に一度は、合戦同様の大巻狩りをいたさねばならぬ」

勝手方老中水野忠之は、財政の上から難色を示した。だが、「老中は、一、二度、信念を言上するのは輔弼の責務といたしましても、将軍家の御命令は絶対無二でございまするゆえ……」と、述べたことのある忠之であれば、異議を押し通せるものではない。

吉宗の構想をそのまま実現するとすれば、忠之の概算では一万両を越える出費となる。

「上米令を継続しております諸大名に配慮なされ、半分ほどの陣立てが願わしく」

という忠之の妥協案を、吉宗も呑まざるをえなかった。

場所は、富士山の裾野ではなく、下総小金原と決まった。小金原も、晴天であれば、遠くに、くっきりと富士山を望むことができる。

享保十一年（一七二六）三月二十四日。内示の随従の士に出動命令が下った。

出立は、三月二十七日、丑の刻（午前二時）。

「合戦の覚悟たるべし」

の通達で、閣老も幕臣一統も恐れおののき、前日は、妻子と別れの盃をくみかわしたようである。

当日、広大な小金原は人馬と家伝の馬標、旗指物で埋まった。

高台に幔幕を張りめぐらした本陣には、中央の床几に、陣羽織に馬乗袴、草鞋ばきの吉宗が座し、左右の床几には老中松平乗邑、若年寄大久保常春、同じく松平乗賢ら閣老、側役有馬氏倫、加納久通、大目付、目付衆、大番頭、小姓番頭、書院番頭ら幕僚が居流れた。いずれも陣羽織姿であり、籠手や臑当で武装している士もいる。

散開している旗本・御家人は、従者を合わせると一万余。志願の陪臣（大名の家臣）、数千。

巻狩りは、山野を遠巻きに包囲し、鳥獣を狩り場へ追い込んで仕留める、壮大な猟である。声を上げ、鳴り物で追い込むのは勢子であり、合戦であれば雑兵というところであろう。

武蔵、常陸、下総、上総の四ヵ国から徴発され、包囲している勢子は十六万八千人、

という報告を、吉宗は受けている。

準備が整うと、吉宗は高さ五丈（約十五メートル）の仮設大井楼にのぼり、采配を振った。

作戦開始の合図は大筒二発であり、以後は太鼓、鉦で各隊の進退、展開、突撃を指示するのである。

午後になり、包囲がいよいよ縮まると、吉宗は井楼をおり、騎馬隊の先頭に立って疾駆し、鮮やかな手並みで銃を放った。

総攻めである。一帯は鉄砲の音で満たされ、鬨の声が鯨波となって、いつまでもつづく。

吉宗、生涯最大の快事であった。

第五章　米将軍

一

大巻狩りがおわると、吉宗は気抜けしたように、日がな一日、ぼんやり過ごすようになった。

あの日、前夜は昂って眠れず、出立が丑の刻（午前二時）、帰城が亥の刻（午後十時）。人馬で満ち満ちた小金原では、午前は高い井楼の上から采配を振り、午後は騎馬隊を指揮して騎上から重い鉄砲を連射して飽きなかった。

陽が西の空を赤く染めて、小さく嶺を出す富士山の、その山脈に連なる地平へ沈みはじめると、無数の篝をたいて夜を昼にもどしての酒宴である。肴は、もちろん、仕留めた鹿、猪、兎、野鳥であった。吉宗は、諸隊を慰労して、憩ういとまがなかったのである。

いかに頑強なからだと心気剛毅の質を誇っていても、四十三歳は、人生五十年とも言われるこの世では、初老というほかはない。

二十二歳にして政道の表に立ち、以来、満二十年、精励辛苦の積み重ねであった。ほ

っと息をついた隙に、長年にわたる疲労が心身を蝕むようである。
「将軍として、やるべきことは、やった。少なくとも、改革の道筋はつけた」
休息之間の上段の、昼間から寝床を設えさせている御簾の内で、だらしなく寝そべることをおのれに許す吉宗は、しかし、この態を恥じながら、つぶやく。
東照神君には遠く及びもつかぬが、歴代の将軍のなかでは、
「名君の類に入るであろう」
自讃して、心を奮い立たせようとする。
だが、政事に取り組もうとする、新たなる意欲がわいてこないのであった。
こののち、将軍として何をなせばよいかを考えても、大きな目標が浮かばないのである。
将軍の権力が、必ずしも絶対無比ではなく、豪商の財力の前に、時として敢えない悲憤も味わわされた。
（将軍とは……）
思ったほどのものではない、という自嘲も出る。
「いよいよ、楽隠居か」
と、声を強めてみたが、それができない現実に、吉宗は苦悶のうめきをもらす。
吉宗の嫡男家重（長福丸）は、去年（享保十年）、十五歳になったことで、四月に元服の式をあげ、従二位大納言の叙任をうけた。これを機に、二の丸から、世子の居城である西の丸へ移している。

今年は十六歳。しかし、どういうわけか、虚弱の質で、知恵の遅れも隠せない。

（われの子でありながら……）

母は、正室に準ずる扱いの、側室お須磨である。紀伊時代、重臣たちが薦めた女性で、吉宗好みの大柄頑強の体つきではなかったが、才女であった。

（われの粗野と、お須磨の蒲柳を……）

受け継いだか。逆であって欲しかった。

（われの体軀と、お須磨の才智を……）

吉宗は、ほろ苦さを嚙みしめる。

お須磨は、吉宗が将軍になる三年前の正徳三年（一七一三）に、次子を産んだが、母子ともに命を落としている。二十六歳であった。

家重（長福丸）の母代として奥向に入れたのが、おこんである。「枕席に侍らす容貌ではない」と、加納久通が言上した醜女であったが、学才があり、気立てがよく、吉宗は愛情をそそいだ。

おこんは、やがて懐妊し、男子を出産した。将軍家の次男、小次郎（のちの田安宗武）である。その、おこんも、二十九歳の享保八年（一七二三）に病死してしまった。小次郎は、今年、十二歳。二の丸で傅育されている。

（これも、嫡男と次男が逆であれば……）

小次郎は、吉宗とおこんの長所を、見事に受け継いでいた。面貌は「鬼だいだい」に近いが、幼いながら四歳年上の兄家重より、ひと回り図体が大きく、無病強健である。

頭の働きが早く、それでいて謙虚で、周囲への思いやりを欠かさない。

「上様の幼少時を、二度、拝する思いでございまする」

かつての傅役である有馬氏倫と久通は目を細めるが、吉宗も、小次郎が愛しい。後継者に擬したい。

だが、武家において、とりわけ将軍家において、長子相続を否み、長幼の序を乱すとき、必ずや、分派を生じ、内紛に至るであろう。

(われの治世になって……)

そのような失態は避けねばならぬ、と吉宗は決意し、頼りない家重を元服と同時に西の丸へ移し、後継者であることを世に示したのである。

吉宗は、あと二人、男子を儲けている。三男源三と四男小五郎(のちの一橋宗尹)である。ともに母は、お久であった。

源三は享保四年に生まれたが、その年のうちに夭逝。

小五郎は享保六年生まれで、当年、六歳である。平凡な甘えん坊で、まだ海の物とも山の物とも判別がつかぬ。

生母のお久も、小五郎を産んだ年に、産後の肥立ちが思わしくないまま、黄泉へ旅立っていった。

吉宗は、先に正室の理子を失い、お須磨、お久、おこんと、三人の側室と死別したのである。

理子をのぞいて、いずれも、武家にとっては宝である男子をこの世に残した功績はあ

るが、

（はたして、幸せであったであろうか）

こう思うと、おのれの至らなさが自責となって、吉宗を襲う。

一人一人の、閨での仕草なども思い出され、先立たれた寂しさが、いまさらのように胸を疼かせるのであった。

吉宗は、大奥で泊まることは少なかった。

江戸城奥御殿独特の権威めいた雰囲気、何のためであるか数百人もの女が住む奇怪、殿舎にしみついた脂粉の匂い、寝所に入るまでの厄介な段取り、それらが吉宗の気持を大奥泊まりから遠ざけるのである。

中臈が、同じ寝所で、警戒や介添えを兼ねて添い寝をする制度がある。中臈たちは旗本の子女が多く、気品もあり、美貌でもあった。おこんも、お久も、萎縮して、夜明けまで、からだを固くしていたものである。

日夜、多くの中臈ら奥女中にかしずかれる大奥の暮らしは、紀州訛が抜けない、容姿がいちじるしく劣る、おこん、お久の両人ともに苦痛であり、時折、心細さを吉宗の胸に顔を埋めて、小声で訴えた。

紀州屋敷の奥向でも、旧来からの諸制度があった。吉宗は幾つかを改めたものだが、寝ずの番は次の間で控え、それも老女が当たっていた。命ずれば、睦言を交わす間は遠くへ退く。それゆえに、奔放に愛撫し合うことができた。

そのような生活に慣れていた、おこん、お久には、大奥で押しつけられるさまざまな

仕来りは、正室に準ずる扱いをうけながら、それゆえに、幸せにほど遠い日日であったにちがいない。

紀伊から入ってきた将軍の愛妾を、故意に苦しめようとする、底意地の悪ささえ、吉宗は大奥の女たちに感じたものである。

吉宗にも、江戸城生まれではない引け目がある。義憤にまかせて、大奥の悪習を、細かいところまで言い立てて改革する勇気は、やはり無かった。それらがもたらす女御殿の騒動を思うだけで、気が滅入ってしまう。

大奥は、本来、将軍の私邸である。だが、吉宗にとって、この女御殿は、依然、敵地のような気がするのだった。

大奥には、適齢の美女が、少なくとも数百人はいる。しかし、吉宗は、心動かされなかった。そのように努めている。

おこん、お久の心情を思い遣るとき、敵地の女に惑うのは男の恥、と一種の意地もあって、時として媚を売ってくる中臈たちに見向きもしなかった。

今、吉宗の側室は、おくめという紀州女一人である。おくめは、おこんの侍女として大奥へ入り、おこんが勧める形で、吉宗の手が付いたのであった。

おくめは、紀伊藩士の娘である。少女のころに江戸屋敷の奥向に仕え、江戸の水に慣れていた。やはり、吉宗好みの大柄であるが、可憐な面差しであり、おこん、お久ほど大奥住まいに気後れを感じていないようである。

吉宗は、目下、おくめ一人で不足を覚えていない。

おくめは、お手が付くと、すぐに女児を産んだ。享保六年のことである。女児は芳姫と名づけられ、吉宗は、初めての女の子とあって、それこそ目のなかに入れても痛くないほどの可愛がりようであった。だが、一年たたぬうちに病死してしまった。

おくめは健康であるが、吉宗が大奥泊まりを厭うこともあって、その後の懐妊の兆しはない。

吉宗は、あばたが残る精悍な面差しであり、巨軀である。いかにも精力絶倫に見られる。それゆえ、年寄たちは競って、縁故、愛顧の女性を側室に差し出そうとするのだが、その実、この数年、吉宗は性欲の衰えを痛感していたのだった。

意欲の衰え、心身の衰えと、それは関連しているのであろうか、とも思い、物悲しさが募る。

この年（享保十一年）の六月七日、吉宗は別の悲しみに襲われた。

二の丸で病の床にあった吉宗の生母、おゆりが息を引きとったのである。

「七十二歳は、天寿を全うしたといえよう」

吉宗は、悔みを述べる人人に、このように応え、自らも慰めた。

吉宗は、江戸城入りをした二年後の享保三年（一七一八）、身辺が落ち着いたころあいに、和歌山城に残したままであった生母おゆりを、万全の道中手配のもと、江戸に迎えた。

付き添ってきた女中頭は、三十歳を待たず、お褥お断りをした、吉宗の元側室、おさ

めである。

米二俵を軽軽とかつぐ怪力の持主で、その姿に吉宗は魅せられたのであった。

何年振りかで見るおさめは、三十三歳になっていたが、まだ充分にみずみずしく、将軍生母のお付きとして気品さえにじみ出ている。

当時、まだ精力旺盛であった吉宗は衝動にかられたが、おさめは柔和な微笑で応じなかった。

おゆりとおさめは、和歌山城でもそうであったが、江戸城二の丸暮らしをはじめても、実の親子のようであった。

吉宗は、安心して、おさめに母を託したのである。

(母者は、幸せだったはずじゃ)

充分に孝養をつくしたと思う。

おさめは、おゆり(浄円院)の葬儀がおわると、吉宗の慰留を柔和な微笑で聞き流し、江戸城を出て髪をおろし、浄円院の位牌所である小石川伝通院(家康生母お大の御霊屋)の塔頭福聚院の近くに庵を結んだ。

吉宗は、おさめに対し、せめてもの志として、終生、年二百俵の寄進を決めたところである。

このころ、大奥の主であった天英院は西の丸内で老後を養っており、美貌と権勢を誇った月光院は、往年のかんばせも失せ、吹上に新築した御殿で余生を送っていた。

二

生母浄円院の一周忌をおえた享保十二年（一七二七）の初秋になると、吉宗に元気がよみがえった。

将軍としてやり残した、大いなる事業を思いついたからである。

七十七歳になる老中首座戸田忠真は、全くの、お飾りである。将軍擁立の、ただ一人生存している功臣として、優遇しているだけであった。

吉宗は、事実上、幕政を総べている、勝手方老中水野忠之を休息之間に呼んだ。

「来年の、東照神君御忌日（四月十七日）に、日光社参を成し遂げたい。さよう心得、準備するように」

高飛車であった。

御用部屋に政事の大方を任せたのち、時折発する命令は、いきなりで、暴君の感がなくはない。

忠之は目を丸くしている。

「恐れながら、日光社参には、莫大なる費用を要しまする。それゆえ、長い間、おこなわれておりませぬ」

「わかっておる。厳有院（四代将軍家綱）の寛文三年（一六六三）以降、六十五年、沙汰止みである」

吉宗は故事を調べていた。

「常憲院（五代将軍綱吉）、文昭院（六代将軍家宣）ともに、熱望なされたが、費用の件で、実現しなかったようである」

「常憲院さまさえ成しえなかった日光社参を、諸大名に上米を命じつづけておりまする、最も財政窮乏の当節、なんじょう、準備にかかれましょうぞ。恐れながら、御正気とは思われませぬ」

忠之にしては、異例の抗議である。

かつての新進老中も、在任十年、年齢は五十九歳に達している。相応の貫禄がそなわっていた。

吉宗は、柳に風と受け流す。

「寛文三年の社参は、十二日の日数を費やしておる。われの算計では、日数を半分に縮め、軍役も半減すれば、幕府分は、およそ十五、六万両で賄えよう。上米収入の一年間分を下回る。新田開発や捨て田畑起こし等で、年貢の増加も見込まれるはずである。やってできないことではなかろう」

近習を使って、ひそかに資料を集め、自ら算盤をはじいて出した予算書きを、吉宗は忠之に突き付けたのである。

忠之は、あっけにとられ、しばし言葉を失った。

享保十三年（一七二八）四月十七日、吉宗は日光東照宮社頭で、ぬかずいていた。

ついに、夢を実現したのである。

神祖と称される家康の廟所、日光東照宮参詣は、祖父を異常に崇拝した三代将軍家光が、生涯に十一回も挙行している。単なる宮参りではない。諸大名を供奉させ、十数万騎という大軍団を組んで、江戸城から日光まで行進するのである。

将軍の権威を内外に誇示する儀式でもあった。諸大名を臣下と内外に認識させる、統制策でもあった。

「日光社参は、簡素を尊崇する、徳川幕府支配下にある、すべての武士のよろこびである。供奉は、古来より、軍役である。忠誠の証である」

吉宗は、前代未聞の上米令を発した時と同様、「軍役」と「忠誠」を持ち出した。

軍役であれば、従わない者は反逆と見なされ、領地没収、誅殺も覚悟せねばならない。

幕府草創期、江戸城をはじめ、京の二条城、駿府城、名古屋城等、枢要の巨城を、手伝普請の名で、諸大名に築城させた。平時の軍役である。忠誠の証である。

その負担に堪えかねて、外様大名の雄・福島正則が異議を申し立てようとしたとき、これも外様大名の雄・加藤清正が、

「不平があるならば、手勢をまとめて帰国し、謀反を起こすがよかろう。それができぬというのなら、おとなしく幕府の命令に従うことだ」

と、たしなめたという有名な伝説は、武士であるならば誰でも知っている。

「軍役」「忠誠」を持ち出したのは、吉宗もまた、その効力を充分に知っていたからにほかならない。

緊縮した規模であっても、幕閣（老中首座で老齢の戸田忠真は江戸城留守居役）、御三家、譜代大名の大半は、前例により供奉をまぬがれない。外様大名も忠誠の証として供奉を申し出る。

諸大名とその家臣団、将軍吉宗を親衛する旗本・御家人軍団、それらの従者たち、人足等、総勢は十数万と喧伝された。

規定の礼装に身を固めた華麗なる大武者行列は、子の刻（午前零時）に江戸城を威風堂堂と進発したが、後尾は巳の刻（午前十時）になって、やっと動き出すという物凄さである。

吉宗は、往復ともに、駕籠よりは騎馬を好み、馬上豊かに進みながら、前方も後方も、果てしなくつづく軍団を眺め、

「まさしく、われは将軍。武家の棟梁である」

幾度となくつぶやき、満悦至極であった。

今や、吉宗の恣意に歯止めをかける者はいない。

かつては、有馬氏倫と加納久通が、傅育に当たってきた責任と特権によって、大事には眦を決して諫言、献言を辞さなかった。だが、両人も老いている。氏倫は六十一歳、久通は五十六歳である。側役は政事に容喙すべからず、の内示を、敢えて無視することなく、近ごろでは余計な口をきかぬようになっていた。

むしろ、大巻狩りにせよ、日光社参にせよ、八代将軍吉宗の偉業に光輝を添えるものとして、煽っている節さえ見える。

宿怨をもつ尾張家も、このたびは、進んで賛同を示した。

神祖東照宮廟所への社参に異議をとなえれば、御三家の資格を問われるからであった。金銭の損失と神祖尊崇を、秤にかけて論ずるわけにはいかない。

それに、吉宗と御三家とは、今や、権力の差が歴然としている。

加えて、当主の継友は病弱であり、嗣子に恵まれていない。万が一の事態を考えると、あたら将軍家の不興を買って、相続問題をこじらせたくない、お家断絶という最悪の道をたどるべきではない、このような思惑が重臣たちにあり、恭順いちずに態度を改めていた。

このような情勢から、軍役ゆえに供奉の大名は費用自弁の、日光社参という豪勢な大儀礼は、表向き、大成功をおさめたのである。

日光社参の昂奮がようやく冷めた、享保十三年の暮、側役の有馬氏倫と加納久通が、老中御用部屋からの奇妙な伺いを、吉宗に取り次いだ。

「関東郡代伊奈半左衛門支配の品川宿にて、上様の御落胤と称する、源氏坊天一、あるいは天一坊と名乗る若侍が、山伏姿の家来を従え、三十万石ほどの御家門取り立て間近と言い、金銀を献上させておりまする由、届出がございましたとのことにございまする」

「われの、隠し子が現われたのか」

紀伊時代に放埒の何年かを送った、身に覚えのある吉宗は驚かない。やや老いを刻ん

でいるものの、魁偉を損わない顔面に、期待の色さえうかんだ。
「真実なれば、めでたいことではないか。連枝は多いほどよい」
性欲の衰えが、ついに陰萎に至り、向後、子が望めそうにない吉宗は、頼りない嗣子家重を支える、血を分けた男子が欲しいのである。
「年ごろは……（放埒の時期と）合うのか。何か証拠となるべき品でも持っておるのか」
吉宗は身を乗り出す。
このようなことを好まない氏倫は、苦虫を嚙みつぶしたような顔で沈黙を決めこむ。
当時、放蕩の後始末等で苦労させられた久通が、にこやかに口をひらいた。
「真実の御落胤でございますれば、大の不敬になりまするゆえ、伊奈半左衛門も委細を聴取することもできず、ひそかに拝するのみの由でございまする。そもそも、直接に取り調べをしてもよいものか、どうなのかの伺いでございますれば、未だ、子細は……」
「ひそかに見たのであれば、年ごろと容貌くらいは、わかっておるのではないか」
四十坂半ばになった吉宗は、生来の我慢強さが薄れ、せっかちになっている。
「三十前後、容貌は、若君らしく装っておるようでございまする」
「三十前後なれば……」
吉宗は、往時を回顧するまなざしになる。
「はい。確かに、和歌山城におられた時期でございまするが、参勤にて江戸屋敷に御滞在の年もございまする。どうも、微妙でございまするな」
久通のほうは、主君の隠し子出現を、どこか楽しんでいる風である。

氏倫が、咳払い一つ。

「三十歳前後でございますれば、長子相続のことも、からんでくるやも知れませぬ。重大事でございまするぞ。慎重の上にも慎重に、糾明することが望ましゅうございまする」

久通もうなずき、表情を引き締める。

「考えてみまするに、今になって名乗り出るというのも、いぶかしゅうございまする。真実、お血筋にて、証拠となる何かがございますれば、もっと早く、堂堂と申し立ててしかるべし。ちと、変でございまするな」

吉宗も、一時の昂ぶりが収まり、早くも落胆の色である。

「道理である。真偽が判明するまでは、ただの浪人のたぐいである。斟酌なく糾明するよう、用部屋に伝えよ」

このように指示し、不興げに座を立った。

老中より命をうけた関東郡代伊奈半左衛門が、天一坊一行を役所に召し出し、取り調べたところ、仕官を餌に金品を騙し取る、単なる詐欺一味と判明したのである。

もっとも、一味は紀伊藩とかかわりはあった。藩士の屋敷に奉公していた女が、主人の胤を宿し、実家に戻され産んだ子が、天一坊改行と自称する若者であった。

重臣を装った参謀格の常楽院という山伏が、吉宗の和歌山城時代の行状を知っており、これを種に筋書きを仕立て、仕官話に飢えている浪人や小商人を騙していたのである。

翌享保十四年（一七二九）の四月、評定所において郡代の上司である勘定奉行稲生正

武が裁き、天一坊改行は打ち首、獄門。常楽院ら共謀の輩は遠島等、申し渡しがあり、二十一日に処刑が執行されて事件は落着した。

「若かりしころの、罪の報いか」

吉宗は、落胤を騙った天一坊なる若者を憎まず、おのれの行状が一人の若者の首を獄門台にさらすことになった因果を、ひそかに悔いるのであった。

暗い気持に沈んでいた五月、明るい出来事があった。

鄭大威という唐（中国）の商人が、交趾国（ベトナム）産の象を、将軍吉宗に献上したのである。

珍獣象は、五月二十七日、本丸大玄関前の豪壮な中雀門を巨体を屈めてくぐり、大広間前庭に引き入れられた。

大広間の入側に座が設けられ、吉宗は左右に御三家をはじめ諸大名、布衣以上の旗本、儒者らを陪席させ、珍獣を観覧した。

巨象は、もちろん象使いの操りではあるが、吉宗へ向かって前足をたたんで蹲り、大きく拝礼したものである。

「うむ。遠路はるばる、大儀であった」

吉宗が異例の直言をかけると、象は長い鼻を大きく振り上げ、

「ああーっ」

と鳴き、恐悦至極といった身のこなしで、深深と頭部を地にこすりつけた。

「あっぱれ」

吉宗は思わず膝を大きく叩き、陪席の権門たちも一様に感嘆の声をもらした。

三

巨象も公方さまの御前で、恐懼拝礼した、という噂は、たちまち江戸中にひろがり、

「さすが、名君吉宗公、東照大権現さまの御再来」

などという賛辞を、御庭番が集めてきて、天下泰平に思われた。

ところが、この年（享保十四年）の秋になると、新米収穫期を前にして、米価が大暴落したのである。

上方、とくに大坂が天下の総台所と称されて久しい。東西のほぼ中央に位置し、かつて長い間、日本の都であった奈良、京都に近く、先進生産地であるとともに、諸物資の大集散地である。大方の物価は、大坂で決まるといっても過言ではない。

その大坂で決まる米相場は、一石当たり銀五十匁前後で安定していたのである。

金銀相場によって変動するが、銀五十匁から六十匁が金一両に換算され、昨今は一両が五十五匁前後であった。

このあたりの米相場であれば、諸物価とも釣り合いがとれた、武家にも、農民にも、町人にも無理のない、平穏な状態といえる。

米相場も、毎日、微妙に変動していた。

だが、ここ数年、安値が顕著になってきたのである。

一年を平均した一石当たりの上方相場であるが、享保十年が五十・三匁、十一年が五十一・五匁。

十二年になると、突然、三十六・八匁と暴落し、十三年は三十七匁とやや値を戻したものの、十四年、つまり今年は、三十匁にまで下がり、さらには二十八匁、二十七匁、二十六匁まで落ちてゆくのである。

「解せぬ。これは、どうしたことじゃ」

吉宗の声が荒い。

享保十二年に、突然暴落したとき、天下の総城下町といわれる江戸の米価を安定させるため、江戸の有力商人たちを大坂へ進出させ、堂島に米相場会所を設立させていた。その会所から、大坂町奉行を通じて、毎日、午前と午後の米相場が、公用早飛脚で幕府に届くのである。

その文書は、直ちに筆写され、中奥休憩之間へ差し出される。吉宗が、そのように命じているのだ。

人前では、めったに喜怒哀楽を表に出さない吉宗であったが、年のせいもあってか、近ごろは怒鳴り声を発することもめずらしくない。

図体の大きい、見ようによっては恐ろしげな面貌の、最高の権力をもつ将軍である。怒気が全身に充満し、顔面に顕れるけいれんを見ると、長年、側に仕えている者でも縮み上がる。小便をちびった小姓もいた。

誰もが尻込みするようになり、仕方なく、扱いに慣れた加納久通が、米相場の文書を

吉宗の閲覧に供する役を引き受けている。

「恐れながら、将軍家が、毎日の米相場に、一喜一憂なされるのは、少少、変でございまする」

機嫌のよい日を見計らって、久通が持ち前の剽軽な口調で、たしなめたことがある。

「いや、将軍であるがゆえに、気にせねばならぬ」

吉宗の表情は、真剣そのものであった。

「米価は、幕府にとっても、武家一人一人にとっても、重大事であるからのう」

それは事実であった。米が、すべての価値の標準になっているのが、今の世である。米（年貢）が幕府財政の基礎であり、米の石高によって地位を定め、諸大名を統制しているのである。

石高が上がれば、それは立身出世であり、富み栄えたことになる。農政改革等によって収穫を増やせば、領国はそれだけ豊かになり、藩主をはじめ、藩士、領民の生活も楽になるはずであった。

幕府も同様である。それゆえに、幕府財政の立て直しのため、吉宗は節倹を令すると並行して、新田開発、捨て田畑起こし等による増産を督励してきたのである。

さらに、享保十二年、吉宗は農民の強硬な反対を押し切って、年貢率の引き上げを断行した。これまで、天領（幕領）は四公六民であったのを、五公五民に改めたのである。

農民の怒りは、直接には代官へ向けられたが、心のなかでは、それを命じた吉宗を恨

んだ。

「今の公方は名君とは、真っ赤な偽り。正体は、苛斂誅求のみを図る、悪代官の親玉じゃ」

このような声は、しかし、怒りやすくなった吉宗を憚り、御庭番も報告しないのである。

吉宗が目指した増収策は成功した。

幕府の蔵にも、市井にも、米が満ち満ちた。

だが、幕府、諸大名、武士全般が、豊かになるのではなく、逆に困窮するという奇妙な事態に直面したのである。

すなわち、米が必要を上回って市井に出ると、余分だけ、値段が下がってゆく。

米が安くなるのは、庶民にはよろこばしい。

だが、米価の下落は、農民を苦しめ、米で俸禄を取る武士の収入が減ることを意味する。

同様に、幕府収入も、米価安の分、目減りすることになるのだった。

まさしく、米余りによる米価安は、幕府にとっても、武家一人一人にとっても、重大事であった。

米の価格が安くなっても、諸色（米以外の物品）がそれに連れて安くなれば、武家もそれほど困らない。

ところが、米価は下落しても、諸色の値段は下がらないばかりか、じりじり上がって

ゆくのである。

いわゆる、米価安の諸色高であった。

吉宗は、勝手方老中水野忠之を呼び、

「米価引き上げの工夫をめぐらし、同時に、諸物価引き下げの策を講じるように。これは、緊急を要するぞ。詳細は、そちに任す」

と、一種矛盾した指示を、何度となく発せねばならなかった。

大きく政策が転換した。幕府は米価を上げるために、なりふりかまわなくなる。新田開発の計画が縮小、あるいは中止された。水田を潰して、米作から菜種、唐胡麻、煙草などの商品作物をつくる畑へ変えさせる。大量の米を使う酒造りを奨励する。米を原料とした、餅菓子、せんべい、おこし等の製造も促進する。

丼飯の杯数を競う大食会も、罰当たりと禁止されていたのだが、黙認ということになった。

総じて、節倹令、贅沢禁止令の逆をゆく、幕政の変節である。

幕府は自ら米を六十万石貯蔵する方針を公表したが、諸大名、米問屋、富豪にも米を大量に買い溜めさせ、米不足の状態をつくり出して、米価を上げる策も断行した。

これまでは「博奕同様の不埒なる儀」と法度であった空米売買（投機取り引き）も許可になった。

一連の米価引き上げ策は、当然、世の非難を浴びる。

「米は、なくてはならぬ、常食であり主食である。誰もが安く食べられるよう、値下げ

に努力してこそ、正しき御政道ではないか。それを、あの手この手で値上げを企むとは、何という悪政」

このような声が、公然と巷に満ちた。

「お上のなさることは、正気の沙汰ではない。米不足をつくり出すため、こっそり米俵を海へ捨てさせておるそうな」

このような噂さえ、ひろがっている。

農民も、汗水流して増産に励んだにもかかわらず、努力は報いられず、新田開発の頓挫、水田潰し、年貢率の引き上げなどの政策急転があって、

「お上の言われること、なさることは身勝手すぎる。信を置くことはできねえ。正直に働く者が馬鹿をみるわい」

などと、恐れず吹聴し、誅罰を加えようとすると、その前に逃散してしまう有様であった。

米が生計の基盤である武家は、大名はもちろん、知行取りも、切米取りの幕臣も、米価暴落による収入の激減に怒りを抑え切れない。

一石が二十六匁ということは、三年前の享保十一年の一石五十一・五匁に比べれば、およそ半額である。

「米将軍、吉宗公の大の御失政じゃ」

「上様は無為無策、耄碌なされたか」

仲間内の内所話だが、公然の秘密といえた。

米将軍というのは、以前は、地方巧者を登用して、地味の改良、新田開発等、米増産を推進する吉宗への賛辞であった。

近ごろでは、米将軍の称のほかに、八木（米の字を分解）将軍とも呼ばれ、これは揶揄であり、蔑称に近い。

「上（将軍）のお好きな物、お鷹野と下の難儀」

という落首が口伝えにひろがったことがある。

この場合の下は、鷹狩りのたびに勢子や荷運びに徴発される農民を指した。

同じ落首が、今度は下を大名とその家中に擬し、武家の間で、あらためて流行りだしている。

上米令は、依然つづいており、七年に及んでいた。その一方で、お上は莫大な費用を惜しげもなく投じて、大巻狩りをはじめとする鷹狩りに淫している。日光社参という、大蕩尽もやってのけた。それぞれ大義名分は掲げているものの、おのれを満足させるだけであり、身勝手すぎるという不服がこめられているのであった。

大方の御庭番は、将軍吉宗の不興を慮って、「見聞きしたままを、私見を加えず言上」する掟にそむき、加減をするようになっていた。御庭番もまた、追従を第一とする当世風に堕落し、吉宗も耳が痛い風説は聞きたくない態度を隠せなくなっていたからである。

だが、明楽政晴だけは、多少の斟酌はするものの、峻厳であった父親の血を受け継ぎ、職務に忠実であった。

それゆえ、政晴の言上で、吉宗は政道に対する不平が上下に満ちている現状を知らないわけではない。

「上のお好きな物、お鷹野と下の難儀」という落首も、政晴の口から聞き知っていた。

また、目安箱の投書からも、米価値上げ諸策の悪政と諸色値下げがはかどらない無策を訴える民の声を、読み取ることができた。むろん、目安箱への書状は、住所・名前を明記した将軍への直訴であるから、あからさまに吉宗を非難する文面は、ほとんど見当たらない。

戸田忠真の死去（享保十四年十月）にともない、正式に老中首座に昇り、勝手方を兼ねる水野忠之へ悪政失政のすべてを転嫁し、「公方さまの御仁政を裏切る希代の悪臣」「獅子身中の虫」「民をいためつける悪代官の親玉」などと評して、早急の更迭を献言する投書が日増しに多くなっていくのであった。

四

享保十五年（一七三〇）の新春。

年始賀儀は、例年通り、厳粛にとりおこなわれた。しかし、吉宗は、主要式典である三箇日拝賀謁見の間じゅう、どことなく、とげとげしさを感じ、めでたさに浸れなかったのである。

元旦、休息之間で、江戸紫に染め上げた直垂狩衣に着替えたのであるが、烏帽子を着

けたとき、結びひもが付け根から取れるという不吉があった。

納戸頭（なんどがしら）が真青になり、組頭に予備の烏帽子を取りに走らせたが、切腹をしまじき形相である。

「気にするでない。物は古びれば、ほころびもしよう。以後、点検（しらべ）を念入りにすれば、それでよい」

洋学好みらしく、にこやかに理をもって諭したが、内心はおだやかではなかった。

最初の出座は、御三家、家門、国持ち大大名らが待つ白書院である。上段之間に嗣子と並んで賀をうけるのが恒例であるが、時刻が迫っても、家重が現われない。

家重は西の丸に住まっているが、本丸中奥の座敷で、決まりである緋色の装束に着替えているはずである。

仕度がととのった吉宗は、じれて、廊下へ出ると、向こうから、ちょうど二十歳になったばかりの家重が、側役や小姓たちとともに、あたふたとやってくる。

怠惰の上に、美食、飽食をほしいままにしているのであろう、肥満がいちじるしい。

（見苦しい。あれが、われの子か）

吉宗は、元旦というのに、暗澹（あんたん）とした気持になる。

案の定、去年の初冬に新調した装束が、わずか二、三ヵ月のうちに、どうにもならぬほど窮屈になっており、何とか格好をつけるのに手間取ったという弁解であった。

苦笑をもらす吉宗の、右目の下がひきつっている。

白書院は、高貴な人士のための儀式部屋であり、上段之間、下段之間など五室から成

り、総畳数は百二十畳ほどであった。

吉宗は、家重を伴って上段之間に着座したのであるが、平伏している二十数人の、御三家をはじめとする二十数人の大大名の背に、名状しがたい威圧を感じたのである。

その威圧感は、次に出座した大広間でも受けた。

仕切りをはずせば四百畳にもなる大広間には、譜代大名、外様大名の半数、交代寄合、表高家、留守居、大番頭、書院番頭、小姓組番頭、五位の諸大夫、布衣以上の旗本、布衣以下であっても要職を占める諸役人たちが、それぞれ指定の装束に身を固めてひしめき、平伏している。

その烏帽子の波に不満がたゆたっており、敵意の妖気さえたちのぼっているように思えるのであった。

二日目、三日目の拝賀式典にも、吉宗は臣下たちが放つ、よそよそしさ、とげとげしさを気のせいにして忘れ去ることはできなかった。

米価安の諸色高は、一向に改善されていないからである。

庶民は米の安さをよろこび、諸色高に苦しんでいる。武家のほうは、米価安による収入減と諸色高の両方に難儀していた。用達商人への支払いが充分にできかねた大名や旗本たちは、新年を迎えたとて、顔色は冴えない。

不安、不満、苛立ち、憤りが上段之間へ向けられたとしても、

(無理からぬことか)

と、吉宗は、休息之間に戻っても、三箇日の間、気は晴れなかった。

一月八日は、御用始めである。

将軍が政務をとるのは、主として午後であるが、この日、吉宗は四ツ（午前十時）の登城太鼓が鳴り終らないうちに、老中を御座之間へ集めた。

老中は、この新春、水野忠之、安藤重行、松平乗邑、享保十三年十月に大坂城代から昇進した酒井讃岐守忠音（若狭小浜十万七千石）の四人である。これに、有馬氏倫と加納久通の両側役が加わり、会議をはじめたのである。

五代将軍綱吉の後期から、六代、七代と三代にわたってつづいた側用人の弊害を排し、側役の政事介入を禁じてきた吉宗である。だが、昨今、氏倫と久通の参与なしには重要政策は決しえないまでになり、両側役の権限は老中を上回っていた。

側用人制の復活と見られなくはないが、吉宗は、現状に照らし合わせて、これも致し方ないと思っている。

だが、おのれの気力の衰えと、変節を悲しむ気持を全く失っているわけではなかった。

（われも、結局、年とともに……）

並みの将軍になってしまった、という忸怩たる思いは強い。

そうであっても、怨恨の声なき声に満ちた現状は、何とか打破しなければならなかった。

「何度も言ってきたことであるが、なにゆえに、米価安の諸色高を改めることができぬのか、その障害はどこにあるのか。どうすればよいのか。本日は、思い切った意見を述べよ。このままでは、政道が成り立たぬではないか」

吉宗は最初から激していた。

面前の六人の誰もが頭を垂れているだけで、口をひらこうとしない。

「忠之」

「はっ」

「そのほうの責任は重い。存じ寄りを、この際、洗いざらい申せ」

忠之のやつれようは激しい。当年六十二歳のはずであるが、去年七十九歳で死去した戸田忠真の面貌に似てきた。病気のために出仕を休むことが多くなっている。

吉宗は胸に痛みを覚えた。

(忠之は、おのれの分身ではないか)

忠之が吉宗を直視した。充血して赤味を帯びた両眼に反抗の色がにじみ出ている。

「申し上げまする」

声がふるえていた。

「それがし、上様の、詳細は、そちに任す、との仰せのもと、できる限りの方策をつくしてまいりました。あまたの法令を出しましてございまするが、大方は、曖昧(あいまい)に腕押しでございまする。これは、所詮、物価問題でありまするのに、商人を思いのままに動かすことができぬからに、ほかなりませぬ。諸悪の根元は、豪商どもの、利を追うことの悪辣(あくらつ)さにございまする。表立って、罪は無きに見えまするが、米価引き上げのための買い米を命じましても、米余りの今日、商人どもは値が下がる一方で、腐らすだけの米を貯えようとはいたしませぬ。利にならぬばかりか、大損をするからでございまする。一

方、金銀相場を操ることで利をむさぼることが憚られまする両替屋どもは、諸色の値を陰で操ることで、莫大な利を得ておりまする。諸色の値を、米価安に合わせられないはずはないと存じまするのに、豪商どもは何かと理屈をつけて高値になる理由を強弁し、その裏で、ひそかに談合をなし、値下げに応じようといたしませぬ。この上は、値下げに応じない商人どもを、片っ端から捕えるとともに、それら商人どもに金銀を貸し与えて操っておりまする三井をはじめといたしまする両替屋を糾明し、汚い言い逃れをするときには、断固、闕所にもし、獄門台にも首を架けて、世の見せしめにすべきと存じまする。こうでもはしない限りは、現状の打破はなりませぬ」

一気に言上をつづけた忠之は、言葉を切ると同時に、口をおさえて前のめりに崩れ倒れた。

口の端から血の混じった汚物が流れ出ている。

奥医師が呼ばれ、応急の治療をしたのち、水野忠之は同僚の介添えで退室し、御用始めの会議は散会となった。

人払いがなされている御座之間には、吉宗と、氏倫、久通が残っている。

しばし考え込んでいた吉宗が、側役両人を見やった。

「われも、長い間、豪商どもの横暴を、内心、憎んでおった」

決意を秘めた声である。

「たしかに、勝手方老中が、あれほど苦しみ、激するほど、両替仲間等は、図に乗りすぎておる」

両側役は、伏し目がちに、沈黙を守っていた。

「忠之が、諸悪の根元と、断言するのじゃ。現状の行き詰まりを打破するのには、三井らの糾明しかないと申すのじゃ。権力が財力に左右されるのは、我慢のならぬことではないか。十六万両の借財を清算しおえたことでもある。斟酌は無用であろう。大岡越前に命じ、悪徳商人どもを、ひっ捕えさせようぞ」

氏倫と久通は目を伏せたままである。

「どうじゃ」

吉宗は、やや、声を高めた。

「氏倫」

「はっ」

「そちは、まだ、商人どもの肩を持つのか」

「恐れながら、氏倫、商人の味方ではございませぬ。豪商どもの、公儀を軽んじ、利を追うことのあくどさを憎むことにかけては、人後に落ちませぬ」

久通も顔を上げて、吉宗と氏倫の表情を、交互にうかがっていた。

「さりながら、両替仲間を捕え、処刑いたしましても、混乱の害のほうが大きく、事態が好転するとは思われませぬ。恐れながら、このような世の仕組みになっておるのでございまする。それに、真実、誰に罪があるのか、誰を処罰して誰を許すのか、正しい裁きは容易ではございませぬ。多くを捕縛して、金融が跡絶えますれば、幕府はもとより、諸大名、旗本、庶民に至るまで、難儀が及びまする。荒療治は……恐ろしゅうございま

する」

「しかし、このままでは政道のしめしがつかぬ。世の不満、非難を、かわしきれない。一人、二人は、見せしめにすべきではないか」

「恐れながら、誰になされまする」

久通が静かに問う。

「三井じゃ。あの一族は、紀伊藩の当時よりの、われとの関係の深さを利得に結びつけておるようで、不快じゃ。世の非難も、いちじるしい。目安箱にも、そのことを指摘する投書は、二、三ではないぞ。身内のごとく見られている者を真っ先に除いてこそ、政道の公明と正義を示しえよう。どうじゃ」

「恐れながら、三井ほか、上方御用達商人どもは……」

氏倫が低い、つぶやくような声で語りはじめる。

「将軍後継を、尾張家、水戸家と競いましたみぎり、老中五人ほか幕府要職、大奥の天英院さま、月光院さま等へ金品を贈り、大勢を変え、事を決するのに、力がございました。紀伊藩の誰が頼んだということではございませぬが、御三家は尾張家、水戸家ともに東寄り、紀伊家のみが上方と深くかかわっておりまするゆえ、上方商人の心意気といったものでございました。われらが公方さまというところでございまする。もちろん、古(いにしえ)のことでございまする。上様の、何ら関知しないことでございまする。荒療治をなされるのに、何の障(さわ)りはございませぬが、敢えて、上方商人に連なる者を見せしめにするのも、いかがかと存じ、申し上げた次第でございまする」

吉宗の耳に、遠い昔の、氏倫の力強い声がよみがえった。
「天が与えたもうた、千載一遇。手は充分に打っておりまする」
吉宗は急速に気力が萎えてゆくのを覚える。

一月八日の御座之間での議論の内容は、豪商の間へもれひろまったようである。
忠告、あるいは脅しの目的で、故意に老中の誰かがもらしたのかも知れないし、有馬氏倫、加納久通の両策士が風説がひろがるよう細工をしたようでもあった。
公儀の意向に従わず利をむさぼる悪徳商人は、闕所の上、獄門台に首を架けることも辞さない、という水野忠之の、将軍御前での発言は、両替仲間をはじめ豪商たちを震え上がらせずにはおかなかったであろう。
豪商たちの買い米が進み、米価はわずかながら上向きを示した。
諸色も、次第に値が下がってゆく。
しかし、依然、暮らしが楽になる見通しは、とても立たぬ情勢であった。
目安箱には、老中首座水野忠之の罷免を求める投書があとを絶たない。
「商人どもの、報復の匂いがいたしまするな」
休息之間で、吉宗から忠之罷免を求める投書の束を見せられた加納久通は、その一通を鼻先にもってきて、戯れ言をもらす。
闕所、獄門と脅かされ、利を少なくせざるをえなくなった商人たちが、儒者や浪人などを使って投書させている疑いを指摘したのである。

「恐れながら」
と、氏倫が持ち前の難しい面持ちで口をひらいた。
「巷の声が、これほど高くなりますれば……」
「罷免せよ、と言うのか」
「そうでもなさらない限り、上下の気持は収まらないのではございますまいか。からだの具合も思わしくなく、病気のため、辞任を聞き届けたということになされば……」
久通が、おだやかな声で説いた。
吉宗も、その腹案は持っていた。世人の政道批判は、その本心は将軍吉宗への憤懣であろう。将軍を名指しでののしることができないゆえに、重用されている水野忠之が矢面に立たされるのである。
（忠之は、われの分身、身代わり）
当面、忠之にすべての失政の科を押しつけて、詰め腹を切らせ、事態を収拾するほかはあるまい、と吉宗は決断するのであった。
四月十五日。吉宗は、翌年より上米の制を廃止し、参勤交代も旧に復する、ことを発令させた。
六月十二日、水野忠之の老中辞任、隠居が公表された。
忠之の突然の免職は、上米の令をはじめとする、さまざまな失政の責任を取らされた、という風説を生んだ。これも、将軍の権威を護るため、氏倫と久通が故意に流した噂かも知れない。

（忠之の罷免は、われ自身の罷免に等しい）

と考える吉宗は、うつうつとして楽しまない。

しかし、おのれが辞任、隠退するわけにはいかなかった。

嗣子の家重が後継者として育つまでは。

八月二十九日から三十日にかけて、暴風雨が関東一帯を襲った。

江戸城本丸御殿も、廊下の戸障子が飛び、雨が吹き込み、建物がきしみ揺れた。

三十日の午後、吉宗は風雨の弱まりを見て、小姓二人を従えただけで、本丸表御殿の東南にそびえる三重櫓（富士見櫓）にのぼった。天守閣が再建されないままの江戸城では、最も高い隅櫓である。

最上階の狭間からは、内堀をへだてて大手門が見下ろされ、その先は大きな屋敷がつらなる大名小路である。屋根の重なりの彼方は、日本橋を中心に、縦横にひろがる町地であった。

大名屋敷には異常は認められなかったが、町地は遠目にも倒壊した建物が多い。

吉宗は小姓の一人をかえりみて、

「側役を通じ、老中に伝えよ。風雨によって大工、屋根屋、左官等、諸職人の賃銀を高くすることは相ならぬ。材木等、諸材料も、平時の値で取り引きするよう、法令をもって触れさせよ」

このように、即、命じる吉宗は、政道に取り組む新たなる意欲が全身に湧き出るのを感じた。

雨は上がっている。
風は、まだ残っているが、その強風が雲を急速に追い払っていた。
天が割れ、突然、陽が射し、濡れそぼった江戸の街衢(がいく)を明るく照らしはじめた。

第六章　回想

一時、自信を喪失し、できれば隠退したいとまで思った享保十五年から、足かけ十六年の歳月が流れた。

延享二年（一七四五）、吉宗は六十二歳になっている。

この年の八月三十日。

午後の政務を早早におえると、吉宗は刀持ちの小姓と床几を二脚持たせた小姓、それに側役の加納久通を伴い、中奥御駕籠口から庭へ出た。

「本丸の主であるのも、一日限りじゃ。ゆるりと、郭を散策してみようぞ」

吉宗は久通に声をかけ、二人とも、やや、おぼつかない足どりで、漆喰の純白が鮮やかな多聞櫓に沿って北へ歩を運ぶ。

明九月一日に、御三家をはじめ主だった大名と老中以下要職にある臣を召し出す黒書院において、吉宗は隠退を公表し、三十五歳になる嗣子家重への家督相続を伝えることになっていた。

吉宗は、大御所として西の丸へ退き、家重が西の丸から本丸へ移ってくるのである。

明日は、また、加納久通も側役の職を解かれ、西の丸付き若年寄に任じられるので、本丸詰めは今日限りであった。

吉宗が将軍と称されるのも、今日が最後である。本丸に居住したのは、足かけ三十年。将軍在位は、正確に宣下から数えれば、二十九年一ヵ月だったことになる。

前七代将軍家継が三年。六代将軍家宣は三年五ヵ月。五代将軍綱吉は長く、二十八年五ヵ月。四代将軍家綱も同様で、二十八年九ヵ月。三代将軍家光が二十七年九ヵ月。二代将軍秀忠は十八年三ヵ月。神祖初代将軍家康は二年二ヵ月であった。

（わずかながら、われが最も長く、将軍職をつとめたことになる）

胸中、吉宗は誇らしい。

久通も足かけ三十年の本丸出仕であり、七十三歳になっていた。

「人の憎がるもの、人喰犬と有馬兵庫頭（ひょうごのかみ）」と落首に出たほど、水野忠之隠退（享保十六年・一七三一、三月卒）後、老中以上に辣腕をふるった有馬氏倫は、十年前の享保二十年（一七三五）に死去していた。享年六十八。充分に働いた満足感が死に顔にあり、吉宗も、父とも兄とも頼んだ人との別れに近い哀惜を覚えたものである。

本丸は、一万一千三百余坪におよぶ建物群が敷地いっぱいに建っており、所によっては中庭のほうが広い。

それでも、細長い庭の築山にのぼると、多聞櫓と白塀が低く感じられる。蓮池堀（はすいけぼり）の彼方は西の丸で、隣接して紅葉山（もみじやま）が望まれ、風光絶佳である。

紅葉山は、徳川家入府前は一帯の里人が紅葉狩りなどに興じた、遊楽地であった。

家康は、太田道灌築城と伝わる江戸城を大拡張するにあたり、紅葉山と、それに連なる吹上と呼ばれる、武蔵野の面影を残す山林も城郭内にとり入れたのである。

本丸、二の丸、三の丸、西の丸、北の丸、吹上を包む内堀内（内郭）は、東西二十一町、南北十七町、周囲は約二里に及ぶ巨城であった。

紅葉山には、神君家康をまつる東照宮をはじめ、歴代将軍の廟と宝蔵があり、江戸城の聖域である。

「お山が、錦織りに燃え上がるのは、あと半月でございましょうか」

久通が腰をのばしぎみにし、色づきはじめた紅葉山を拝する姿勢で、吉宗に語りかける。

「西の丸へ移れば、紅葉山は近くなる。東照宮に参詣しつつ、幾度も紅葉狩りを楽しもうぞ」

微笑み合う二人は、共に老境である。君臣というよりは、朋友の情感がただよっている。

吉宗は、樹樹の間に見え隠れする、極彩色の二天門と東照宮へ、敬虔をこめた目をあてたまま、今年の三月に催した神君家康百三十回忌の大法会を思い起こしていた。

百回忌は、吉宗が宗家を継ぎ、将軍に就任する前年の、正徳五年（一七一五）であった。神君を誰よりも崇拝する吉宗は、そのことを残念に思い、おのれの将軍在任中に節目の回忌を営みたいと念じていた。

その宿願を達成したことで、隠退の決意が定まったといえる。

三月十三日にはじまり、命日の十七日を結願日とした五日にわたる大法要は、家康が帰依した天台宗の法華八講をもって執り行われ、七条の袈裟をつけた日光門主一品公遵法親王（中御門天皇第二皇子）の出座があった。

法親王に従う大僧都をはじめとする衆僧は紅葉山に満ち、礼服に威儀を正した吉宗、家重以下、老中、寺社奉行、諸大名等数百人が法会に参じたのである。

正しく百雷のごとき読経の唱和、心魂を揺さぶる鉦と太鼓の響き、伶人達が合奏する妙なる楽の音、それらが吉宗の耳によみがえるのであった。

大奥御殿の高い塀を右手に眺め、さらに北へ歩を進めると木戸があり、その傍に竹箒を持った黒い羽織袴の士が平伏している。

享保十七年（一七三二）に、御休息御庭締戸番から伊賀御庭番の称を経て、正式に添番御庭番の職名に落ち着いた、通称、御庭番の一人であった。

将軍の密命を帯びて、府内や遠国を回り、隠密御用に従事するのが本務である。だが、平時は天守台近くの庭に設けられている御庭番所に詰め、御庭番の名称に従って左手に竹箒をたずさえ、木戸を中心に近辺の警備にあたっている。

「おう、正元か。大儀」

本来なら、身分上、職務以外の直の言葉はありえないのだが、吉宗は気さくに声をかけた。

首筋がまだ若く感じられるその御庭番は、恐懼し、無言のまま額を地面へ押しつける。

吉宗一行は木戸を通りすぎた。

正元は、幕臣に直された以後の明楽家の三代目であった。祖父が自刃した正親、父が政晴である。

政晴は、農民一揆の真相を調べる遠国御用中、丹波国福知山藩領（朽木玄綱三万二千石）で不慮の死を遂げた。倉地忠見という同僚と二人組みで探索に当たっていたので、暗殺された事実を知ることができた。しかし、遠国御用の御庭番が行方知れずのままであることは少なくない。

二代にわたって御庭番の苛酷な運命に殉じた明楽家の三代目であるだけに、享保十九年（一七三四）の十二月、十六歳にして家督を継いだ正元へ、吉宗は格別、目を掛けていた。

正元は、家督を継いだ二年後の元文元年（一七三六）に再発した両替屋騒動の折、風説集めに働いている。

その年の五月、吉宗は南町奉行大岡忠相と勘定奉行細田時以の強い献策を納れ、貨幣改鋳に踏み切った。

大岡忠相は、依然、江戸市井の物価騰貴に関わりのある、銀高、金安の通貨相場に苦慮していた。金一両、銀六十匁の公定相場を是正、あるいは江戸の物価下落につながる金高、銀安へ相場を傾かせるためには、現行の金貨、銀貨を改鋳し、品位において金貨を強くすればよい、という大岡忠相らの意見である。

上方豪商に意を用いる有馬氏倫と加納久通は、銀遣いの上方商人に不利になるこの改

鋳案に異を立てたが、吉宗は忠相と時以に改鋳を命じた。

新貨幣が出回りはじめると、不可解なことが起こった。金高銀安へ向かう見通しであった相場が、逆に、銀高金安を強めたのである。

「明らかに、両替仲間と豪商どもが談合し、銀貨を大量に隠匿して、品不足による銀高をつくり出した、悪辣きわまる仕掛けでございまする。公儀へのあからさまなる反抗でございまする。断固糾明せずば、御政道が成り立ちませぬ」

町奉行を足かけ二十年つとめる大岡忠相は、眦を決して老中御用部屋で談じ、強引に一任を取り付けると、三井をはじめとする本両替屋十一人に、奉行所出頭を命じたのであった。

ところが、出頭してきたのは主人ではない。身内に不幸があったため不浄を憚って顔出しを遠慮した一人を除き、十人が支配人、手代等の名代だったのである。

「公儀を軽んずる、この所業、許しがたし」

烈火の怒りを発した忠相は、十人の名代に入牢を言い渡し、直ちに小伝馬町の牢屋敷へ送り込んでしまった。

驚愕した本両替屋主人の懸命の嘆願にも、権門の執り成しにも、忠相は聞く耳を持たず、

「金銀相場が正常に戻るまでは、釈放することはできぬ」

と、十人の名代を陰惨なる大牢に押し込めたまま、四十日が過ぎようとしていた。

この間、巷にひろがるさまざまな風説を集めて、吉宗に報告したのが御庭番であり、

明楽正元も大いに働いたのである。

両替仲間と豪商たちは、権門に手を回して、大岡忠相の罷免を計った。庶民は、利のためには手段を選ばぬ商人たちを憎み、大岡越前守に声援を送っていた。

御庭番衆は、これらの情勢を、逐一、言上していたのである。

解決を迫られた老中御用部屋は、忠相の更迭を答申してきたが、吉宗は、

「越前に非はない」

と退け、大岡忠相を寺社奉行に転任させたのであった。

寺社奉行は大名職である。旗本から大名への昇格は、平時、特例中の特例と言わなければならない。

大岡忠相は、当時、三千九百二十石であった。そこで、二千石加増、足高四千八十石とし、一万石の大名を急ぎつくり上げたわけである。

忠相の方は、

「両替仲間の横車にて町奉行を解かれ、寺社奉行に祭り上げられたわい」

と、必ずしも、大名に昇進した栄誉をよろこんでいない。その様子も、正元が探り出し、報告したものである。

十人の名代が、事件を引き継いだ北町奉行稲生正武によって、五十三日ぶりに釈放されたことは言うまでもない。

「のう、久通」

「はい」

「大岡越前は、幾つになっておる」
「それがしより四つ年下でございまするゆえ、六十九歳と存じまする」
「なりたてのころは、慣れないことゆえ、大層、苦労をしたようであるが、近ごろは、いかにも大名らしゅうなった。それに、相変わらずの、働き者である」
「御意。公事方御定書（下巻が御定書百箇条）も、越前の努力で完成にこぎ着けましてござりまする」
吉宗は、最初は評定所に命じ、埒があかないところから勤勉なる大岡越前守に専任させて、法度の整理と法典の編纂を進めてきた。
成果として、まず、享保九年（一七二四）六月に享保度法律類寄が成り、三年前の寛保二年（一七四二）四月に、さらに大集成した公事方御定書が出来、
（これも、後世に残る業績であろう）
と、吉宗は満足に思うのである。
大岡忠相の配下で、公事方御定書編纂にも力をつくしたと聞く青木昆陽という蘭学者の進言を用い、救荒作物としての甘藷栽培を奨励したのも、
（業績の一つ）
と、吉宗は胸の内で指折り数えた。
小石川薬園で昆陽らに増産させて、諸国へ苗を送らせるとともに、吉宗自ら吹上の畑で試植したものである。
吹上の畑では、今は甘藷のほかに、万病に効くという高価な朝鮮人参も栽培されてお

り、時折、市井に放出して価格下落に役立てている。

救荒作物といえば、青木昆陽の進言の元である享保十七年（一七三二）の大飢饉を忘れることはできない。

天候不順に加え、西国に蝗が空を覆うほどに異常発生し、未曾有の凶作となったのである。米の極端な不足で米価は高騰したが、翌年の収穫期には米余りの状態となり、米価はまた下落したのだった。

（あれも、悪徳商人の……）

と、吉宗は、ほろ苦さを噛みしめ、胸中でつぶやく。

買い占め、売り惜しみによる米不足が真相であり、天災よりも人がつくり出した大飢饉だったのである。

江戸では、初めてという打ちこわしが起こったのも、その時期であった。

しかし、昨今、幕府の米蔵には常時、六十万石の籾が貯蔵され、金蔵にも百万両の蓄えがある。米価安定と財政再建は成功したといえよう。

吉宗は、このことにも誇らしさを覚える。

柚木門と呼ばれている多聞櫓の切れ目の門をくぐると、天守台の庭であった。

石垣の下から五重の屋根に輝く金の鯱まで、二十八間五尺（約五十一・五メートル）あったと伝わる天守閣は、明暦三年（一六五七）の大火で焼失し、その後、天下静謐の世に無用と、再建されていない。

吉宗は、久通と小姓二人を従え、土台の石垣に添えられてある階段を登る。
焼け残った土台も巨大である。南北二十間一尺四寸（約三十六・五メートル）、東西十八間一尺（約三十三メートル）、高さは六間（約十一メートル）あった。
江戸城は、海を見下ろす舌状にのびた丘陵を巧みに利用して築造されている。
その高地に、さらに六間もの高さを有する天守台であれば、展望は広大であった。
「富士山が、気のせいか、間近に見えるのう」
「さようでございまするな。日本一高いと称されまする麗峰を、見下ろす感さえいたしまする」
西南の方角の、はるか彼方の山脈の間に、かすかに雪を冠した富士山が遠望された。
目を南へ転じれば、紺青のひろがりに白波がきらめく、海である。
その手前は、江戸城の御殿群が折り重なっていた。
西は吹上の森林である。
南東一帯は、城を守備するかのごとく、大名屋敷が整然と建ち並び、さらに、その向こうの南から東にかけて、町屋が密集しているのが眺められた。
「田安さまの御殿が、すぐ、お目の下に」
久通が朗らかに知らせれば、
「一橋屋敷も見ゆるぞ」
吉宗も好好爺の声である。
北の眼下が舌状台地の、その舌の先で、古くから田安台の地名を持つ。環濠に面して

田安門があり、その内側に御殿が建っていた。

吉宗の次男、宗武の屋敷であった。地名をとって田安家を称し、宗武は当年三十一歳になる。

一橋屋敷というのは、源三が夭逝したため、事実上の三男である、四男宗尹の住居である。一橋門内に屋敷があるところから、一橋家と呼ばれていた。

嫡男家重を、長幼の序を守って後継に決定したものの、不安があり、万が一の場合の継嗣とするため、大名として独立させず、二卿家として保存しているのである。

これも、吉宗の深慮といえよう。

（吉宗の死後、家重は次男重好を清水門内に居住させ、清水家と称し、御三卿が成立する）

このように手を打った吉宗は、将軍家内部に後顧の憂いを残していない。

だが、

（言わば、外敵……）

には苦しめられた。

宿怨をどうしても捨てきれない、御三家筆頭尾張家との暗闘である。

尾張家は、将軍位を争った継友が享保十五年（一七三〇）に三十九歳で病死し、継友の異母弟である宗春が継いだ。

宗春は、自由放縦の気質を持ち、代代の遺恨もあってか、将軍吉宗の施策に、ことごとく楯突くのである。

節倹、風俗粛正等の幕命に反して、尾張領内に遊所や芝居小屋を繁盛させ、宗春自身、

寺社参詣にも黒の唐人笠に目のさめるような猩猩緋の羽織を着て、飾った白牛にまたがり、五尺ばかりの大煙管をくゆらせながら城下をねり歩く、という傾きぶりであった。

したがって、武士も、農民も、職人も、商人も、皆、美装を競い、うかれ立って浪費に身をやつす有様である。

吉宗は、何度となく使者を遣わして訓戒を試みたが、一層反撥を強めるばかりである。遠国御用の御庭番の報告では、領内は活気を呈しているものの、頽廃の気が立ちこめ、財政破綻は避けられない状態という。

元文四年（一七三九）、吉宗はついに断を下し、宗春に蟄居を命じた。分家の松平友著の嫡男で、高須（美濃内三万石）藩を継いでいた義淳（のち宗勝）の尾張家相続を許し、ここに吉宗の意に従わない大名は皆無となったのである。

吉宗と久通は、小姓がたずさえてきた床几に並んで腰をおろし、天守台から四方を飽くことなく眺めていた。

富士山に雲がかかり、そのあたりが夕焼けで赤く染まっている。

「日没は、物悲しいものよのう」

吉宗がつぶやくと、久通が明るい声で、

「日が沈み、明日になれば、輝きを新たにして、日が昇ってまいりまする」

と、笑顔を向けた。

「徳川家も、同様。日が沈み、日が昇るがごとく、代代、弥栄でございまする」

「弥栄か。明日の将軍継承を前に、めでたいことを言う」

吉宗も笑顔を返した。

吉宗は、大御所生活を、およそ六年送り、宝暦元年（一七五一）六月二十日に逝去した。六十八歳である。中風と尿の具合が悪くなったのが死因と伝わっている。

朝廷より正一位、太政大臣と有徳院の諡号を贈られた八代将軍吉宗の治世は、徳川十五代、二百六十余年のほぼまん中に位置し、毀誉褒貶はあっても、中興の英主と称されるにふさわしい業績を残したといえよう。

参考文献

「徳川実紀」　吉川弘文館
「寛政重修諸家譜」　続群書類従完成会
「大武鑑」　橋本博編　名著刊行会
「江戸幕府役職集成」　笹間良彦著　雄山閣
「諸藩要覧」　井上隆明編　東洋書院
「徳川盛世録」　市岡正一著　東洋文庫
「旧事諮問録」　旧事諮問会編　岩波文庫
「徳川将軍家人物総覧」　歴史読本　臨時増刊第二十二巻第四号
「武家事典」　稲垣史生編　青蛙房
「武家編年事典」　稲垣史生編　青蛙房
「江戸時代史」　三上参次著　講談社学術文庫
「日本の歴史」(17)　奈良本辰也著　中公文庫
「日本史総覧」(Ⅳ)　新人物往来社
「年表日本歴史」(5)　筑摩書房
「徳川吉宗」　辻達也著　吉川弘文館

「大岡越前守」　辻達也著　中公新書
「大岡越前守忠相」　大石慎三郎著　岩波新書
「江戸転換期の群像」　大石慎三郎著　東京新聞出版局
「享保改革の経済政策」　大石慎三郎著　御茶の水書房
「米将軍とその時代」　土肥鑑高著　教育社
「大名と領国経営」　藤野保著　新人物往来社
「和歌山県史」　和歌山県
「和歌山県の歴史」　安藤精一著　山川出版社
「江戸時代の思想」　近代日本の名著①　徳間書店
「江戸城大奥の生活」　高柳金芳著　雄山閣
「柳営婦女伝双」　名著刊行会
「江戸城御庭番」　深井雅海著　中公新書
「江戸城」　村井益男著　中公新書
「江戸城」　小松和博著　名著出版
「甦る江戸城　アサヒグラフ増刊」（三四一七号）　朝日新聞社

年表「吉宗とその時代」

＊年齢は数えによる

年号	年齢	政治・経済	社会・文化	死没ほか
貞享一元（一六八四）	1	10月21日和歌山にて誕生、生母ゆり。幼名源六、ついで新之助		
宝永二（一七〇五）	22	5月、長兄綱教死（41歳） 8月、父光貞死（80歳） 9月、次兄頼職死(26歳)、吉宗紀州藩五代藩主となる		
三（一七〇六）	23	11月、伏見宮貞致親王女・理子（16歳）と婚儀		
七（一七一〇）	27	6月、夫人理子死		
正徳元（一七一一）	28	12月、長福丸生れる（のちの九代将軍家重）母・須磨		
二（一七一二）	29	10月、六代将軍家宣死（51歳）		

享保元（一七一六）	33	5月、吉宗八代将軍となる。間部詮房、新井白石退任 6月、享保と改元 8月、綱吉以来停止の鷹匠頭を復活し、10月、30年ぶりに鷹場を再開	
二（一七一七）	34	2月、大岡忠相を江戸町奉行に任命。美濃守から越前守となる 3月、武家諸法度を改訂して天和の条文に復しめる 9月、水野忠之を老中に任命	1月、奈良興福寺焼失 7月、陪臣、庶民に聖堂の聴講を許可
三（一七一八）	35	11月、新貨（享保金銀）を鋳造。江戸に町火消の制度を作る	7月、鳥類を贈答、食料にすることを禁ずる。江戸城内に測天儀を設立 3月、江戸に火除地を設ける
四（一七一九）	36	4月、中町奉行を廃し、江戸町奉行を南北の二名とする	
五（一七二〇）	32	11月、小次郎（のちの田安宗武）生れる。母・おこん 4月、七代将軍家継死（8歳）	6月、尾形光琳（59歳） 新井白石「折たく柴の記」 山本常朝「葉隠」
			9月、水戸藩主綱条（64歳）

（一七二〇）五	37	8月、町火消の組織を改正、いろは47組とし纏、幟の制度を設ける	11月、「借金銀相対済令」発布（金銀貸借の訴訟は受理しない）	5月、浅草寺本堂の修復が開始される（享保六年完成） 10月、水戸家、「大日本史」250巻を幕府に献上
（一七二一）六	38	4月、庶民の死罪に子の連座中止 7月、小五郎（のちの一橋宗尹）生れる。母・お久		8月、小石川御殿跡を薬園とする
（一七二二）七	39	8月、評定所に目安箱を設置 5月、水野忠之、新設の勝手掛老中となる		3月、「六論衍義大意」（室鳩巣）でき、寺子屋師匠などに配布
（一七二三）八	40	7月、諸大名に上米（石高の百分の一）を課し、参勤期間を緩和 2月、情死者の罰則を制定 3月、諸国に人口調査を命じ、六		12月、小石川薬園内に施薬所、養生所を建てる 1月、心中物の出版、上演を禁ずる

7月、間部詮房（55歳）
12月、「心中天の網島」初演

					12月、大火罹災地に瓦葺きを強制
九（一七二四）	41	年ごとに実施させる 4月、松平乗邑を老中に任命 6月、足高の制を定める 2月、米価下落のため諸物価の値下げを命じる（物価引下げ令） 3月、甲府城主柳沢吉里（吉保の子）を大和郡山に移封 8月、大岡忠相の子忠光、将軍世子家重の小姓となる			1月、英一蝶（74歳） 11月、近松門左衛門（73歳）
十（一七二五）	42	12月、松平忠周を老中に任命 10月、享保大判を鋳造 12月、元禄大判の通用を停止			5月、新井白石（69歳） スイフト「ガリバー旅行記」
十一（一七二六）	43	2月、全国に人口調査を命じ、以後六年ごとに行うことを定める 6月、生母ゆり死（72歳）	6月、永代橋維持のため武士、医、神主、僧を除き一人二銭の徴収を始める（期限十年） 2月、白木屋お駒、小塚原で処刑		1月、荻生徂徠（63歳）
十二（一七二七）	44	9月、京、大坂にも目安箱設置 ○浜御殿で甘蔗栽培始まる	9月、関東に風水害、両国橋、昌平橋など流失		
十三（一七二八）	45	4月、吉宗、日光東照宮社参（四代将軍家綱以来65年ぶり）			

十四（一七二九）	46	12月、金銀貸借に関する訴訟を受理することになる（享保四年の「相対済令」の改正）	4月、交趾（ベトナム）から象渡来、浜御殿で飼われる。吉宗の落胤と称する天一坊を処刑 ○石田梅巌、京都で心学の講席を開く 3月、浜御殿の象を希望者に下げ渡す布告出される 12月、清の画家沈南蘋来日
十五（一七三〇）	47	1月、町火消47組を改組して10組とする。 4月、上米の令を停止し、参勤交代の期間を旧に復す 6月、老中水野忠之を免じ、松平主税、松平輝貞を老中に命ずる 7月、江戸に米会所を設立 8月、吉宗の子宗武の邸を田安門内に作る（田安家の祖）	
十六（一七三一）	48	2月、米価下落のため幕府三年間の倹約令を出す 8月、奥州、関東から江戸への廻米は玄米に限り、白米を禁ずる	
十七（一七三二）	49	いなごの害はげしく西日本に一万	10月、室鳩

十八（一七三三）	50	二千人余の餓死者出る 5月、幕府が隅田川で全国の餓死者慰霊のため水神祭を催す 吉宗、尾張藩主宗春の奢侈を譴責 1月、米買い占めの噂のある高間伝兵衛宅を江戸の民衆約二千人が襲う（享保の打ちこわし） 米価騰貴に苦しむ江戸の窮民に堀を浚わせ日給を生活費とさせる 3月、田沼意次、小姓になる 8月、幕府領の騒動鎮圧に近隣の大名は代官の要請により出兵することを命ずる	○浅草寺奥山に桜の木が植えられ、千本桜と称される 4月、書物奉行、書物目録を改訂して将軍に呈上	巣「駿台雑話」
十九（一七三四）	51	3月、小石川薬園、江戸城吹上苑で甘藷を試植	9月、江戸城郭内はすべて瓦葺きとなる	4月、紀伊国屋文左衛門（66歳） 8月、室鳩巣（77歳） 2月、青木昆陽「蕃薯考」
二十（一七三五）	52		5月、出版物に歴代将軍の言行をのせることを禁ずる	

元文元（一七三六）	53	4月、元文と改元 5月、米価引上げのため金銀貨を改鋳。銭貨が不足して庶民の経済生活混乱 8月、大岡忠相、寺社奉行となる。地代、店賃支払いに関する訴訟の受理を停止	2月、市村座で初代・常磐津文字太夫が初めてタテを語る
二（一七三七）	54	5月、孫家治（のちの十代将軍）誕生 6月、神尾春央、勘定奉行に、老中松平乗邑、勝手掛となる 4月、寺院に仏像仏具などの質入れを禁ずる 11月、大嘗会を行う（貞享4年以来51年ぶり）	5月、江戸大火、寛永寺本坊焼失。 11月、吉宗、飛鳥山に数千本の桜を植えさせ、遊興の地とする 12月、但馬国生野銀山で打ちこわし
三（一七三八）	55		7月、荷田春満(68歳)、伊藤東涯(67歳) 8月、上島鬼貫(78歳)

四（一七三九）	56	4月、尾張藩主宗春に退隠蟄居を命ずる	5月、風紀上の理由から豊後節浄瑠璃を禁ずる 6月、露船、陸奥・安房沖に出没 ○吉宗、青木昆陽、野呂元丈に命じてオランダ語を学ばせる 2月、鈴ヶ森の刑場に池上本門寺・日顕が大題目碑を建立 4月、正徳四年、高遠に流された奥女中絵島が没する（60歳）
五（一七四〇）	57	11月、吉宗の子宗尹の邸を一橋門内に作る（一橋家の祖） 12月、公事訴訟の町人が出頭のとき五人組が同道することを定める	湯浅常山「常山紀談」、石田梅巌「都鄙問答」
寛保元（一七四一）	58	2月、寛保と改元 4月、西国諸大名に享保19年蝗害の際の恩借金を、来年11月迄に返済することを命ずる 10月、姫路藩主榊原政岑に吉原の高尾太夫身請けの咎で隠居を命じ、11月、その子政永を越後高田に移封	6月、死者の棺に六道銭を入れることを禁ずる 7～8月、江戸はじめ諸国に大洪水
二（一七四二）	59	2月、全国の河川沿岸の伐木開墾を禁ずる 4月、公事方御定書（刑法・訴訟法）制定	10月、紀海音（80歳）

三（一七四三）	60	2月、水油不足のため菜種栽培を奨励	6月、大名留守居役の遊興禁止	6月、尾形乾山（81歳）
延享元（一七四四）	61	2月、延享と改元 9月、米価引上げのため米の買上げを諸国に命ずる。田畑永代売買の罰則を緩和、過料とする	8月、江戸湾に津波発生 この年、江戸神田に天文台、出雲大社本殿落成	9月、石田梅巌（60歳）
二（一七四五）	62	9月25日、吉宗将軍職を隠居、家重九代将軍となる	2月、青山六道辻から出火、焼失家屋二万八千軒（六道火事）	スウィフト（79歳）
三（一七四六）	63	10月、老中松平乗邑を罷免 3月、寛保4年以降の貸借訴訟は受理し、それ以前は受付けないこととする		4月、松平乗邑（61歳） 8月、「菅原伝授手習鑑」竹本座で初演
四（一七四七）	64	9月、田安、一橋両家に封地各十万石を与える 11月、吉宗大病 3月、吉宗病気全快 8月、板倉勝該が江戸城内で肥後藩主細川宗孝を斬殺、板倉は切腹を命ぜらる	2月、大盗日本左衛門が捕えられ、3月処刑	5月、太宰春台（68歳） 10月、寺坂吉右衛門

寛延一（一七四八）	65	9月、田沼意次、小姓組番頭格となる 6月、勘定奉行が長崎奉行を兼任 7月、寛延と改元 10月、大岡忠相、五千石加増されて大名となる。田沼意次、小姓組番頭となって禄二千石 11月、御側衆大岡忠光、三千石加増されて五千石となる 12月、琉球使節、江戸到着	3月、江戸で流行の女の羽織を禁止する 9月、加賀藩士大槻伝蔵、配所で自殺	
二（一七四九）	66	1月、老中首座酒井忠恭を罷免、厩橋から姫路へ移封 9月、堀田正亮、老中首座となる ○尾張藩、藩校明倫堂を設立	4～5月、関東に雹降り竜巻が発生、人馬が死ぬ 8月、京都で百カ所余りに落雷、二条城天守閣焼失	8月、「仮名手本忠臣蔵」竹本座で初演 この年新内節始まる モンテスキュー「法の精神」 この年富本節始まる
三（一七五〇）	67			慶紀逸「武玉川」 バッハ(66歳)（83歳）

宝暦元（一七五一）	68	6月20日、吉宗死、遺言により廟を新造せず綱吉の廟に納める 7月、田沼意次御側衆となる 10月、宝暦と改元 11月、大岡忠相、病により寺社奉行を免ぜらる 12月、御側衆大岡忠光、五千石加増され大名となる。26日、大岡忠相死（77歳）	1月、善光寺本坊全焼 4月、越後高田で大地震、死者一万六千人	12月、「一谷嫩軍記」豊竹座で初演

＊参考資料　『日本の歴史』〈別巻5〉（中央公論社）『江戸東京年表』（小学館）『日本歴史シリーズ14 享保の改革』（世界文化社）『徳川吉宗』辻達也（吉川弘文館）



文春文庫

はちだいしょうぐん よしむね
八代将軍 吉宗

定価はカバーに表示してあります

1995年1月10日　第1刷
1995年4月25日　第5刷

ほり かずひさ
著者　堀 和久

発行者　堤 堯

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3－23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4-16-749503-1

文春文庫 最新刊

恋と裏切りの山陰本線
西村京太郎

温泉旅館の婿になるはずだった十津川の部下が山陰の海岸で殺された。他に三篇を収録（解説・村上貴史）

レンタル家族殺人事件
山村美紗

ガン患者の老女をいたわる温かい家族。しかし…現代家庭の荒廃が殺人事件をひきおこす

美人の時代
井上章一

男はなぜセーラー服に欲情するのか…など誰もが悩んだ永遠のテーマを真面目に考察する

熱い手紙
高樹のぶ子

懐かしくも疾しく気恥ずかしかった七〇年前後のあの頃…。著者の第一エッセイ集（解説・村松友視）

ありそでなさそで
――女がひとりでいたいと思う夜
白石公子

ついに迎えた独身での三十歳の誕生日。揺れ動く女心をユーモラスに描いたエッセイ集（解説・石田善彦）

烙印のおんな
澤地久枝

足利銀行二億円詐取事件の女子行員、嬰児殺しの若い母など十字架を背負った女たちのドラマ

おいしい話つくって食べて
牧羊子

古今東西の食にまつわるウンチクを傾け、実際のレシピを添えたグルメ・エッセイ（解説・加四宮）

「女の生き方」四〇選 上・下
山崎朋子編

愛に仕事に、情熱的に生きた女性たち。美智子さまの時代から吉本ばななまで48名が登場

心の砂時計
遠藤周作

時の滴りは時の成熟。折にふれて綴られたよしなし事は、醗酵して芳醇な言葉の酒と化す

吉宗と宗春
海音寺潮五郎

質素倹約の八代将軍吉宗と遊興に耽る豪胆奔放な尾張中納言宗春との凄絶な闘いを描く巨篇（解説・磯貝勝太郎）

柴錬立川文庫

毒婦伝奇
柴田錬三郎

世間の枠をはみ出し歴史に断罪された女の生き方を独特の視点で捉えた時代伝奇傑作集（解説・森田誠吾）

山頭火
石寒太

酒に溺れ家を捨てたこの放浪の俳人は、なぜ現代人の心を捉えるのか。日記と俳句で検証する

LAタイムズ
スチュアート・ウッズ 白石朗訳

マフィアの取立屋が、ハリウッドに乗りこんでのし上がるが、昔の仲間は忘れてくれない

デジタルの秘法
キャサリン・ネヴィル 山本やよい訳

コンピュータ通の銀行勤めの女性が、自行の安全システムに思わぬ抜け道があると知って

少年と悪魔と離婚
リチャード・フリード 加地美知子訳

両親の離婚を止めようと十歳の少年が有名弁護士に手紙を書いた。だめなら悪魔に相談します、と

上を下へのジレッタ 上・下
手塚治虫

売れないマンガ家の妄想世界がヴァーチャル・リアリティを作り出して世界を破滅へと導く